ISSN 2186－0645

富山市埋蔵文化財調査報告 49

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ

—西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡—

2012

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 49

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ

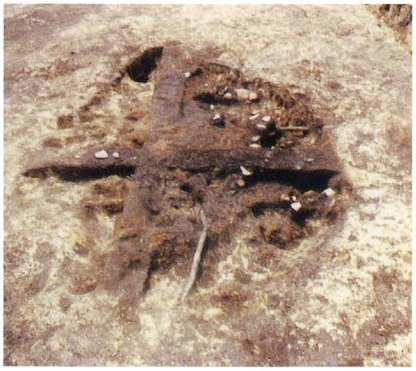
—西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡—

2012

富山市教育委員会

西金屋・西金屋窯跡調査区全景（東から）

SX02　完掘状況（北から）



SX02　土層断面（北から）

SX02　被熱層断割（北から）

カラー図版2　【米田大覚遺跡】

米田大覚遺跡調査区全景（南東から）

「罡本」墨書土器

例　言

1　本書は、個人住宅建築に先立つ平成23年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、富山市教育委員会が国庫補助金および富山県費補助金の交付を受けて実施した。

3　本書で報告する調査遺跡の概要は次のとおりである。

＜西金屋・西金屋窯跡＞

遺跡所在地	富山市古沢地内
発掘調査期間	平成23年4月19日～5月19日
調査面積	176㎡
整理作業期間	平成23年5月20日～平成24年3月30日
担当者	堀内大介（富山市教育委員会埋蔵文化財センター主査学芸員） 新川廣久・納屋内高史・坂口諒子（以上同嘱託）

＜米田大覚遺跡＞

遺跡所在地	富山市米田町地内
発掘調査期間	平成23年7月21日～8月30日
調査面積	143.35㎡
整理作業期間	平成23年8月31日～平成24年3月30日
担当者	野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター主任学芸員） 坂口諒子（同嘱託）

4　発掘調査から報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表したい（五十音順、敬称略）。

酒井英男　中村晋也　望月精司　富山ガラス造形研究所　富山県教育委員会生涯学習・文化財室　古沢町内会　米田町町内会

5　調査にかかわる原図・写真類および出土遺物は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

6　本書の執筆・編集は、嘱託職員の協力を得て、西金屋・西金屋窯跡を堀内、米田大覚遺跡を野垣が行った。

7　西金屋・西金屋窯跡は、富山大学理工学研究部の酒井英男教授に考古地磁気分析を依頼し、玉稿を頂いた。第4章第2節にその分析結果を掲載した。また、パリノ・サーヴェイ株式会社に放射性炭素年代測定・樹種同定を委託し、結果を第4章第1節に掲載した。

凡　例

1　挿図の方位は真北、水平基準は海抜高である。

2　公共座標は世界測地系（国土座標第Ⅶ系）に準拠した。

3　遺構表記は、掘立柱建物：SB　溝：SD、土坑：SK、ピット：SP、その他の遺構：SXを用いた。

4　土器実測図の断面は、須恵器・珠洲を黒塗り、土師器・その他を白抜きとした。

目　次

カラー図版

Ⅰ　西金屋・西金屋窯跡
第１章　経　　過
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 1
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法…… 5
　第２節　基本層序…… 8
　第３節　検出遺構…… 8
　第４節　出土遺物…… 10
第４章　自然科学分析
　第１節　出土炭化物の自然科学分析…… 18
　第２節　土師器焼成遺構の地磁気年代の研究…… 21
第５章　総　　括
　第１節　土師器焼成遺構…… 25
　第２節　呉羽丘陵西麓の古代土器生産体制…… 26
　参考文献　…… 26

Ⅱ　米田大覚遺跡
第１章　経　　過
　第１節　調査に至る経緯…… 27
　第２節　調査の経過…… 27
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 28
　第２節　歴史的環境…… 28
　第３節　米田大覚遺跡における過去の調査…… 30
第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法…… 31
　第２節　基本層序…… 31
　第３節　検出遺構…… 31
　第４節　出土遺物…… 37
第４章　総　　括
　第１節　遺跡の変遷と性格…… 42
　第２節　「罡本」墨書土器について　…… 44
　第３節　畠跡と推定される小溝群について…… 44
参考文献　…… 45

図　　版
報告書抄録

Ⅰ　西金屋（にしかなや）・西金屋窯跡（にしかなやかまあと）

第１章　経　　過

第１節　調査に至る経緯

西金屋・西金屋窯跡は、昭和63年～平成３年に富山市教育委員会が実施した分布調査により、新たに発見された遺跡である。平成５年に「西金屋遺跡」として、富山市遺跡地図に登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地（市№201293）として取り扱うこととなった。同年、遺跡の南で道路改良工事に伴う発掘調査で、奈良時代（８世紀第２四半期～第３四半期）に操業された須恵器窯を発見し、「西金屋窯跡」とした。平成８年、２遺跡を統合して遺跡名称を「西金屋・西金屋窯跡」と改称した。

平成22年６月24日、個人住宅兼工房建設について埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地全域359.09㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年７月９日に市教委による試掘調査を実施し、208㎡に遺跡の所在を確認した。調査では奈良時代～平安時代の土坑等が検出され、奈良時代～平安時代の土師器・須恵器、縄文時代中期の縄文土器等が出土した。

この調査結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、住宅部分の掘削工事が遺構面に達することから、工事主体者の同意を得て176㎡について発掘調査を行なうこととなった。

第２節　調査の経過

発掘調査　発掘調査は、土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が常駐して調査の監理にあたった。

４月19日から重機による表土掘削をはじめ、排土は調査区外に横置きにした。翌20日から作業員を投入して表土掘削が終わった所から順次、遺物包含層掘削を開始した。遺物包含層は北西の一部にのみに残存するため、遺物包含層掘削は同日に完了し、引き続き遺構検出作業に移った。この時点で、土師器焼成遺構の壁の焼けている状況や細かな凹凸が多数みられることが確認できた。

遺構掘削は４月21日から行った。掘削を終えた遺構から断面図・平面図を作成した。遺物量の多い遺構は詳細な遺物出土図を作成した。５月17日に高所作業車を使って全景写真を撮影した。18･19日に土師器焼成遺構SX02の断割や補足測量を行って調査を完了した。５月18日に富山大学理工学研究部酒井研究室による考古学地磁気年代測定の資料採取を行った。

整理作業　整理作業は発掘調査終了後から平成24年３月29日まで行った。接合作業にあたっては、遺構出土遺物どうしはもちろん、遺構出土遺物と包含層出土遺物・試掘調査時出土遺物も接合する個体がみられたため確認を行った。遺構出土遺物は口縁部・底部が残るものを中心にできるだけ図化するよう努めた。遺物写真撮影は４×５判を使用し、図化したものについて行った。炭化物は、自然化学分析会社に放射性炭素年代分析及び樹種同定を委託した。これらの作業と平行して原稿作成を行い、平成24年３月30日に本書を刊行した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、富山市の北西部に位置し、富山市街地の西方約7kmの呉羽丘陵西麓、富山市古沢地内に所在する。標高は15～17ｍである。

呉羽丘陵西麓は北西に向かって緩やかに傾斜し、馬背状の尾根地形を多く形成している。古沢地区周辺地域においては、このような尾根間の谷間を利用して江戸時代に多くの灌漑用溜池が作られてお

り、現在でも大小10余りの溜池が残されている。

六泉上池・六泉中池・六泉下池の連続する溜池はその内のひとつで、現在は富山市ファミリーパーク内にあり、この溜池の西岸に奈良時代の須恵器窯である古沢窯跡群(3)が形成された。古沢3号窯(2)・西金屋窯跡はその北側への延長上の斜面に所在し、さらにその北側の尾根上に本遺跡が所在する。

第2節　歴史的環境

本遺跡の周囲地域には、旧石器時代から中世に至るまで各時代の遺跡が存在する。

旧石器時代では、東山系石刃技法と瀬戸内系横長剥片剥離技法の両方の技法のナイフ型石器が出土する境野新遺跡(9)が知られており、この他に杉谷H遺跡(12)などでもナイフ型石器が発見されている。向野池遺跡(8)では、尖頭器や黒曜石製細石刃核が発見されている。

縄文時代では、前期の遺跡として、貯蔵穴が見つかった古沢遺跡(5)が知られている。中期には、環状集落として古沢遺跡、上堤池遺跡、北押川B遺跡(7)などが知られている。

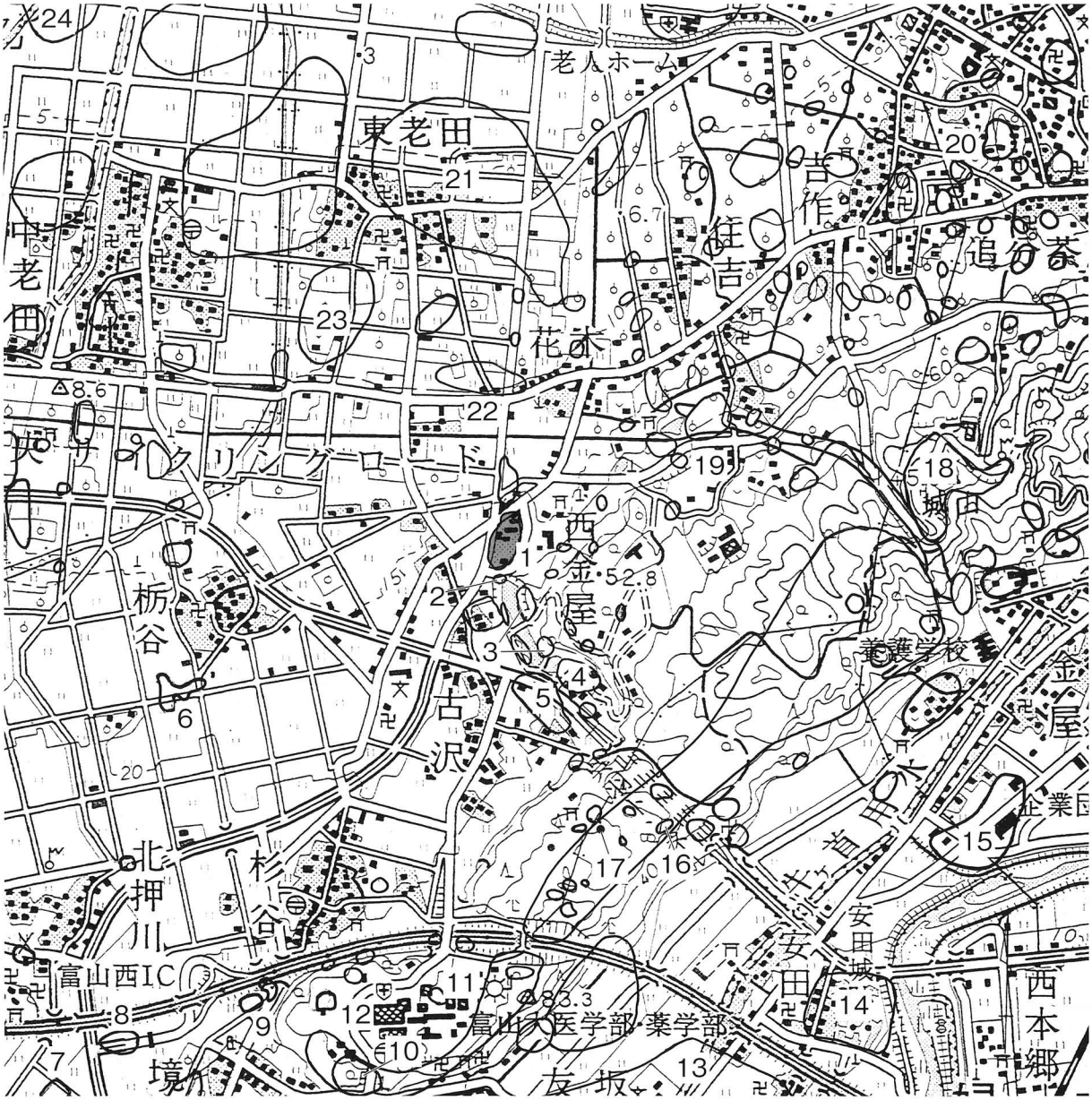
弥生時代から古墳時代では、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、呉羽丘陵南部や羽根丘陵に墓域が集中的に形成されるようで、呉羽丘陵南端では杉谷古墳群(11)が知られており、中には出雲地域とのつながりを示す四隅突出型墳丘墓（杉谷4号墳）がある。杉谷A遺跡(10)では方形周溝墓や円形周溝墓が確認されている。砂川カタダ遺跡(23)ではこの時期の集落が見つかっている。古墳時代中期になると、境野新遺跡・古沢A遺跡(4)・東老田I遺跡(21)で集落が見つかっており、呉羽丘陵には前方後円墳である古沢塚山古墳(17)が築造された。古墳時代後期になると、金屋陣ノ穴横穴墓(16)が呉羽丘陵東側斜面に造られた。

飛鳥・奈良・平安時代には、呉羽丘陵から射水丘陵にかけて須恵器窯・瓦窯・土師器焼成遺構・炭窯・製鉄炉などが築かれ一大生産地帯が広がる。呉羽丘陵西麓地域では、飛鳥時代に操業された金草第一古窯跡(19)、奈良時代に操業された古沢窯跡群・西金屋窯跡などの須恵器窯が知られている。栃谷南遺跡(6)では、奈良時代の瓦陶兼業窯・灰原・掘立柱建物・粘土採掘坑・井戸跡などが検出され、粘土採掘から土器・瓦の焼成までの一連の作業を行う生産工房があったことが分かった。遺跡からは軒丸瓦・鐘状銅製品・土製権衡などが出土している。向野池遺跡では、平安時代の土師器焼成遺構や大型掘立柱建物を含む15棟以上の掘立柱建物、製炭土坑などが検出され、日常容器とともに仏具（瓦塔）も製作されていたことが分かり、郡が経営する雑器所として婦負郡域の手工業生産の中核を成していたと考えられている。花ノ木C遺跡(22)では、奈良時代の溝跡から人形・斎串が出土し、律令祭祀が行われていたと考えられている。

中世では、井田川左岸にある鎌倉時代から室町時代の集落跡である金屋南遺跡(15)が知られている。溝で区画された計画的構造を持つ集落で、掘立柱建物・井戸跡・畠跡・鉄生産の跡・道路跡などが検出されている。井田川左岸に築かれた白鳥城(18)・大峪城・安田城(14)の中間に位置しており、鉄の供給地としての役割を持っていたのではないかと推測されている。

遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	西金屋・西金屋窯跡	集落・窯	縄文・奈良・平安	13	友坂遺跡	集落・城館	縄文・平安・鎌倉・室町・近世
2	古沢3号窯跡	窯	奈良	14	安田城跡	城館	古代・鎌倉・室町・戦国・近世
3	古沢窯跡	窯・集落・生産	縄文（前）・奈良	15	金屋南遺跡	集落・墓・生産	奈良・平安・中世・近世
4	古沢A遺跡	集落・窯	旧石器・縄文（前～晩）・弥生（中）・古墳（中）・奈良・平安	16	金屋陣ノ穴横穴墓	古墳	古墳（後）
5	古沢遺跡	集落・生産	旧石器・縄文（前～晩）・奈良・平安	17	古沢塚山古墳	古墳	古墳（中）
6	栃谷南遺跡	集落・生産	縄文・白鳳・奈良・近世	18	白鳥城跡	集落・城館	弥生～古墳・平安・中世
7	北押川B遺跡	集落・生産	縄文（中）・奈良・平安・中世・近世	19	金草第一古窯跡	窯	白鳳
8	向野池遺跡	集落・生産	旧石器・縄文（早・前）・奈良・平安・中世・近世	20	追分茶屋遺跡	集落	縄文　（中）
9	境野新遺跡	集落	旧石器・縄文（中）・古墳（中）・奈良・平安・近世	21	東老田I遺跡	集跡・生産	縄文（前・後）・古墳・奈良・平安・中世・近世
10	杉谷A遺跡	集落・墓	弥生末～古墳初・奈良・平安	22	花ノ木C遺跡	集落	縄文・弥生（後～晩）・奈良・平安・中世・近世
11	杉谷古墳群	古墳	縄文・弥生（終）・古墳（前）	23	砂川カタダ遺跡	集落	縄文・弥生（後～終）・奈良・平安・中世
12	杉谷H遺跡	集落	旧石器・縄文（中・晩）・平安	24	西二俣遺跡	集落	弥生・奈良・平安・中世・近世



第1図　周辺遺跡位置図（1/25,000）及び調査区位置図（1/2,500）

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査は、重機で表土を除去し、その後人力で剣スコップ・移植ゴテ等を用いて包含層掘削を行った後に、ジョレンを用いて遺構検出作業を行い、遺構掘削作業を行った。

掘削作業と平行して遺構の計測・図化作業を実施した。平面図はトータルステーションによる計測を基本として1/20で作成し、必要に応じて1/10の微細図を併せて作成した。写真撮影は必要に応じて随時行い、白黒35mm、カラー35㎜、白黒６×７版、カラー６×７版の４種類のフィルムに記録した。

第２節　基本層序

調査区は西から東へ緩やかに傾斜しており、層序は、西側は、畑地耕作土（黒褐色土・Ⅰ層）、遺物包含層（黒褐色土・Ⅱ層）、地山（黄褐色土～明黄褐色シルト・Ⅳ層）の順である。東側斜面は、表土（Ⅰ層）、盛土（Ⅱ層とⅣ層の混合土･Ⅲ層）、地山（Ⅳ層）である。遺構は、Ⅳ層上面で検出した。

第３節　検出遺構

（１）土師器焼成遺構（第３・４図、写真図版１・２、カラー図版１）

SX01　調査区北東部（X851～853、Y-560～-563）で検出した。平面形は横長型隅丸方形を呈し、奥壁・側壁の壁が立ち、前壁は極めて緩く立ち上がる前部開口型のものである。規模は短軸長1.85ｍ、長軸長1.90ｍ以上、奥壁深0.20ｍを測る。被熱は奥壁に弱い被熱が少し確認できる。床面は被熱層が薄かったため、遺構掘削時に掘り飛ばしてしまった可能性がある。埋土から土師器、須恵器に混じって焼成粘土塊が出土している。焼成粘土塊は88点、総重量542ｇ出土している。出土した炭化物の樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った結果、樹種はカエデ属で７世紀中頃～８世紀中頃の結果が得られた。また、考古学地磁気年代測定では、750年頃の結果が得られた。

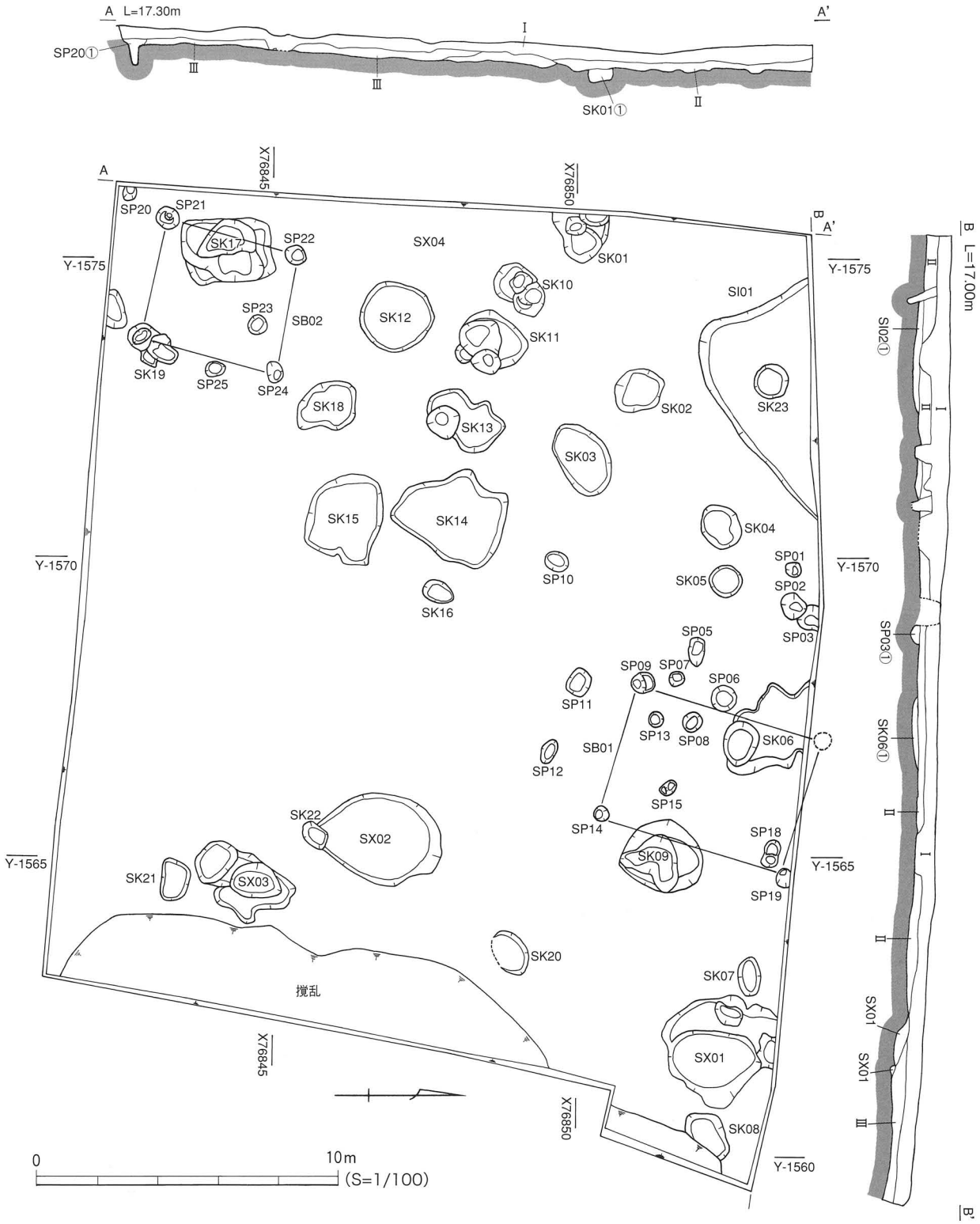
SX02　調査区東部中央（X845～848、Y-564～-566）で検出した。平面形は横長型楕円形を呈し、奥壁から側壁にかけての西側半分の壁が立ち、前壁は極めて緩く立ち上がる前部開口型のものである。規模は短軸長1.52ｍ、長軸長2.31ｍ、奥壁深0.06ｍを測る。前壁付近は焼けておらず、奥壁及び総床面面積7.4割に被熱が及んでおり、焼成床面積は1.3㎡である。強い被熱は奥壁と床面に見られ、被熱層の厚さは0.05ｍである。被熱層は木の根の影響で所々に穴ができている。埋土から土師器、須恵器、土錘に混じって焼成粘土塊が出土している。焼成粘土塊は18点、90ｇ出土している。出土した炭化物の樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った結果、樹種はクリ材で８世紀後半～10世紀前半の結果が得られた。また、考古学地磁気年代測定では、780年±40年の結果が得られた。

SX03　調査区東部中央（X843～846、Y-563～-566）で検出した。平面形は横長型隅丸方形を呈する。規模は短軸0.97ｍ長、長軸長1.74ｍ、奥壁深0.06ｍを測る。床面・壁面ともに被熱は確認されなかった。埋土から土師器、須恵器に混じって焼成粘土塊が出土している。焼成粘土塊は遺構内の南の掘り込みの中で見つかり、45点（稲藁圧痕付くもの１点含む）、総重量328ｇ出土している。

（２）掘立柱建物（第５図、写真図版３）

SB01　調査区北部中央（X850～853、Y-564～-568）で検出した。東西１間･南北１間の建物である。間尺は、東西筋SP09-SP14間で2.3ｍ、南北筋SP14-SP19間で3.3ｍを測る。主軸方向はＮ－17°－Ｅである。

SB02　調査区南西部（X841～846、Y-573～-576）で検出した。東西１間・南北１間の建物である。間尺は、東西筋SP22-SP24間で2.1ｍ、南北筋SP21-SP22間で2.3ｍを測る。主軸方向はＮ－16°－Ｅである。



基本層序

Ⅰ　黒褐色土（表土）

Ⅱ　黒褐色土（遺物包含層）

Ⅲ　黒褐色土＋にぶい黄褐色土ブロック状混

Ⅳ　にぶい黄褐色土（地山）

SP20

1　黒褐色土

SK01

1　黒褐色粘質土＋にぶい黄褐色土少量混

SI01

1　黒褐色土

SP03

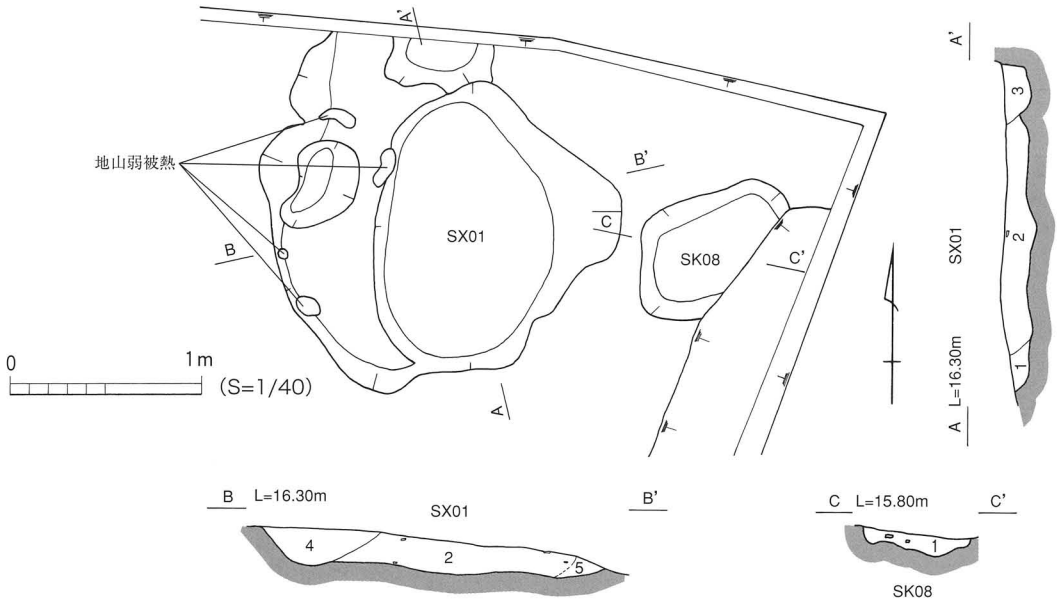
1　黒褐色土＋明黄褐色粘質土粒状混＋炭粒

SK06

1　明黄褐色土＋黒褐色土多量混

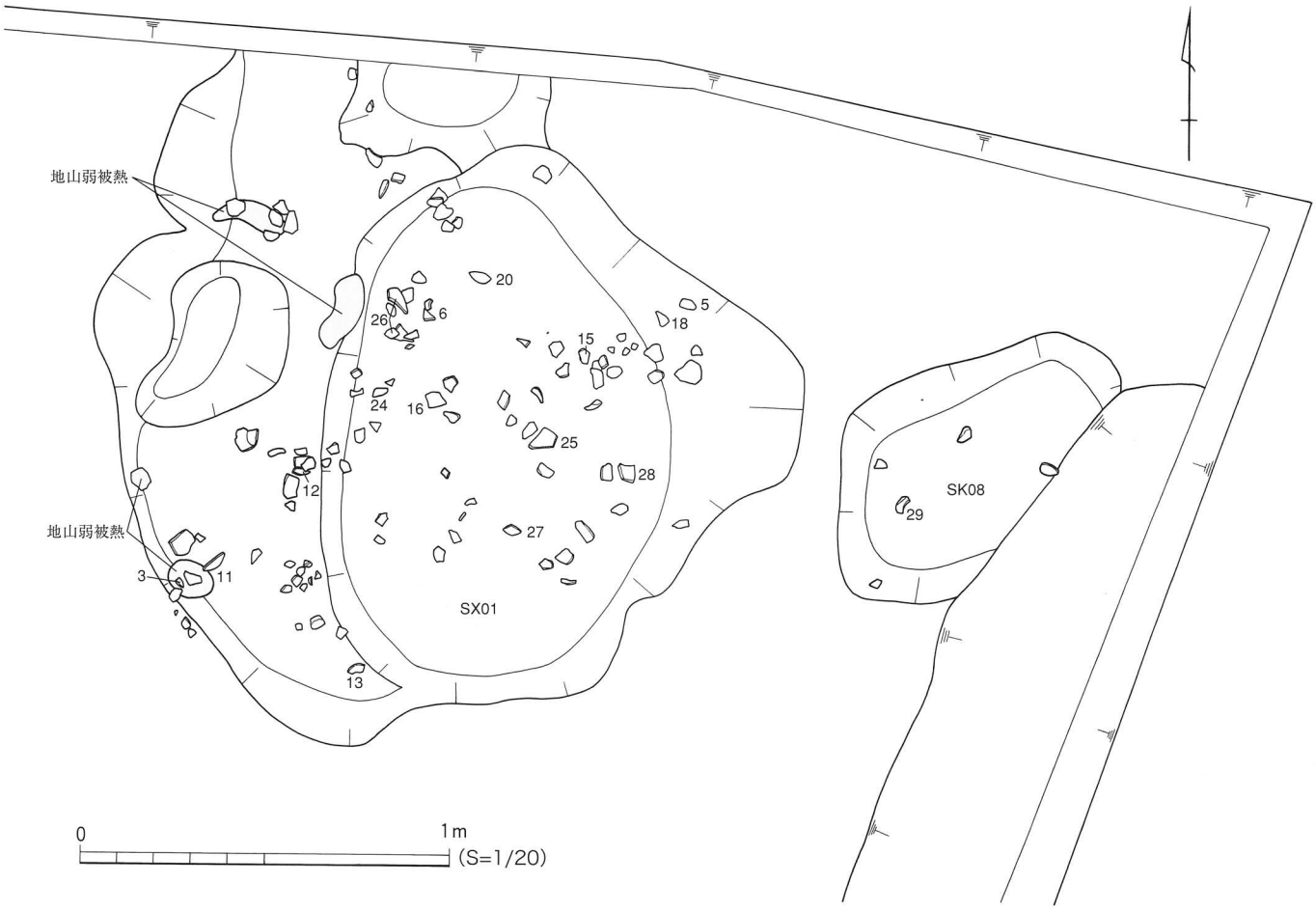
第２図　調査区全体図（S=1/100）

SX01・SK08



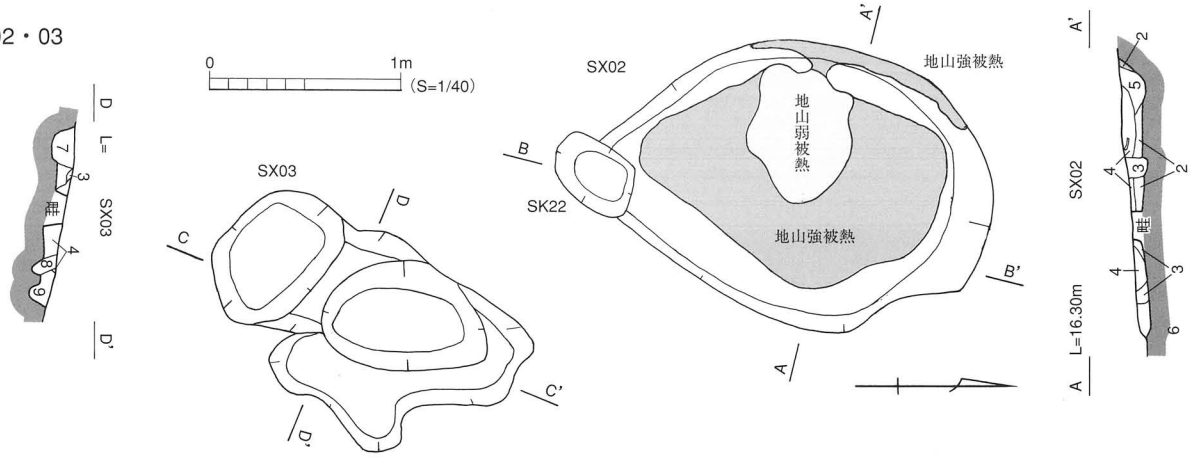
SX01
1　黒褐色土＋黄褐色土ブロック状混
2　黒褐色土＋暗褐色土（焼土）粒状混＋炭粒
3　黒褐色土＋褐色土（焼土）粒状混＋にぶい黄褐色土粒状混
4　灰黄褐色土＋黒褐色土粒状混＋にぶい黄褐色土粒状混＋炭粒
5　黄褐色土＋炭粒

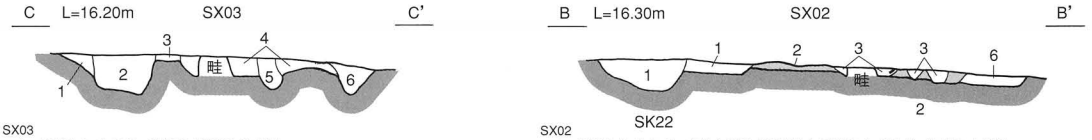
SK08
1　黒褐色土＋浅黄褐色土粘土ブロック状混



第３図　SX01、SK08平面図及び断面図（S=1/40）　遺物出土図（S=1/20）

SX02・03

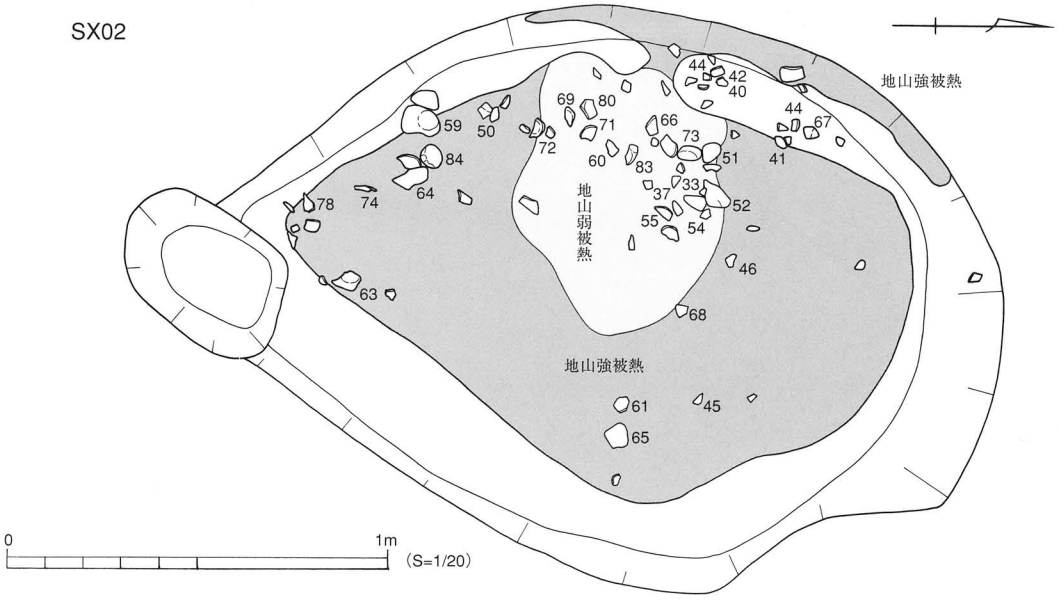


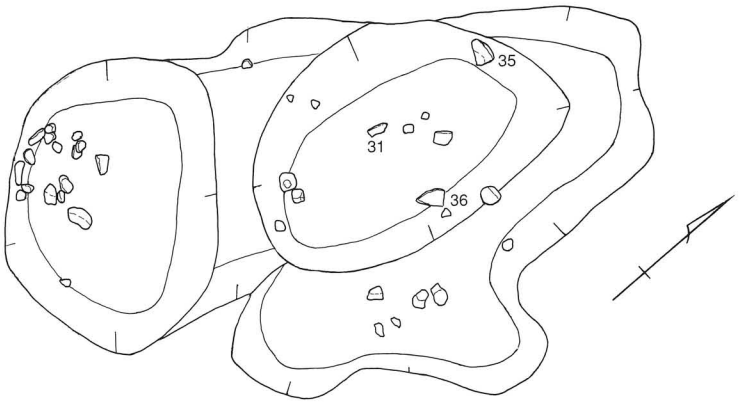


SX03
1 黒褐色土＋にぶい黄褐色土粘質土粒状混
2 灰黄褐色土＋にぶい黄褐色土粘土多量混＋浅黄褐色土ブロック状混
3 暗褐色土＋明黄褐色土ブロック状混
4 暗褐色土＋明黄褐色土ブロック状混＋橙色土多量混＋炭粒
5 黒褐色土
6 にぶい黄橙色土＋黒褐色土
7 黒褐色粘質土＋にぶい黄橙色粘土多量混
8 黒褐色土＋明黄褐色粘土多量混
9 にぶい黄橙色粘土＋黒褐色土の混合土

SX02
1 黒褐色土＋にぶい黄橙色粘質土粒状混＋明褐色土（焼土）粒状混＋炭粒
2 明褐色土（焼土）
3 褐色土粘質シルト＋明黄褐色粘質土の混合土
4 黒褐色シルト＋明褐色土（焼土）少量粒状混＋炭粒
5 黒褐色シルト＋灰黄褐色土＋明黄褐色粘質土多量混粒状混＋明褐色土（焼土）粒状＋炭粒
6 黒褐色土＋明黄褐色土粘質土ブロック状混

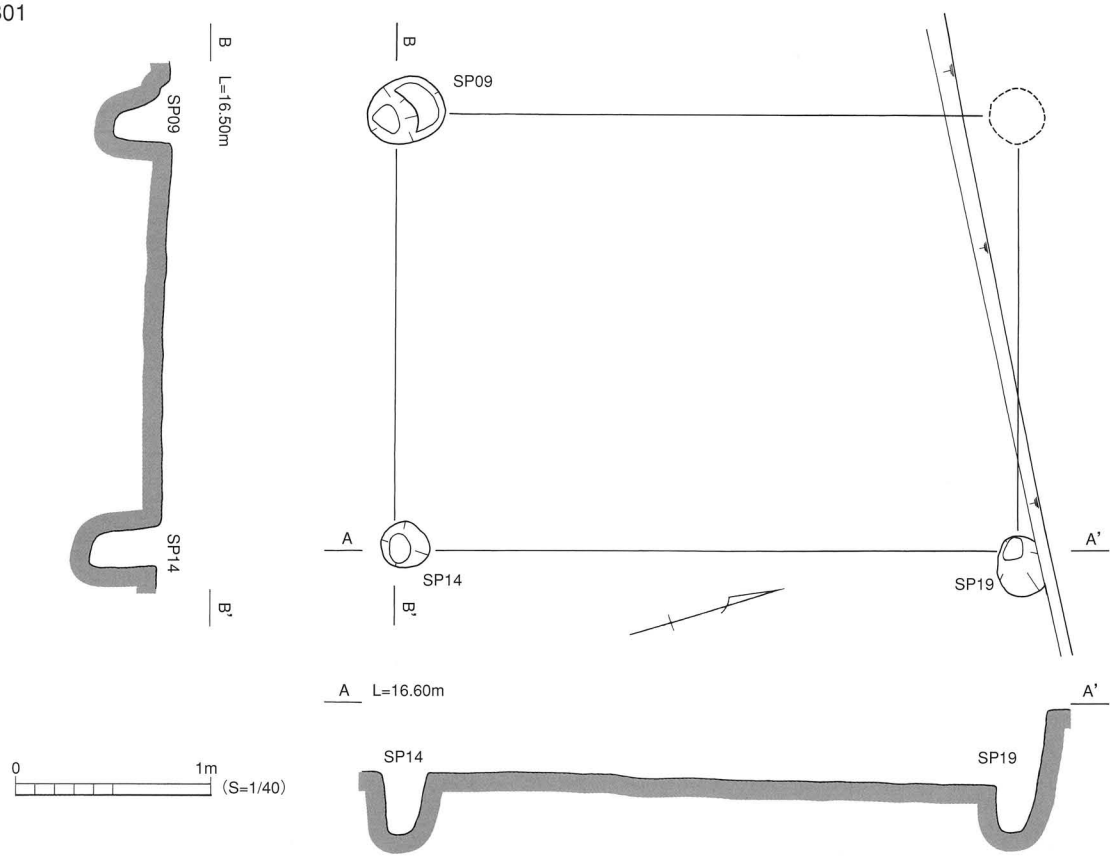
SK22
1 黒褐色土＋明黄褐色粘質土ブロック状混



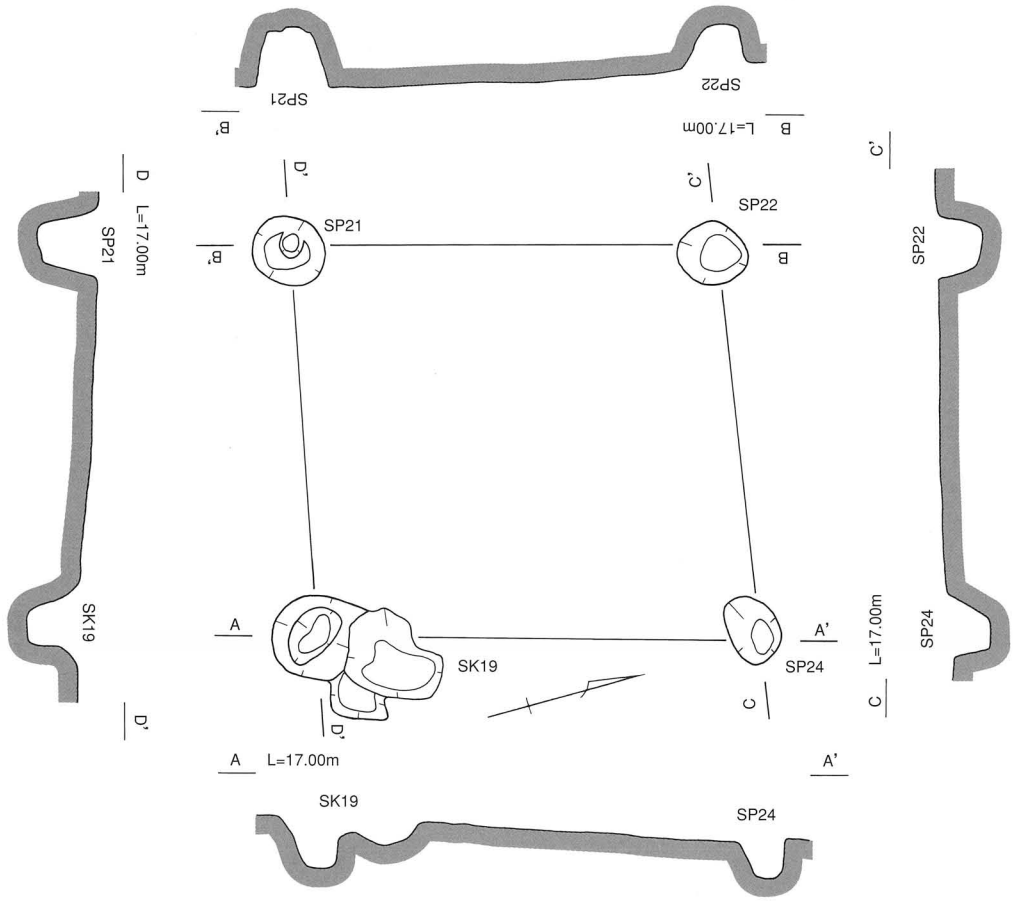


第４図　SX02・03平面図（S=1/40）及び遺物出土図（S=1/20）

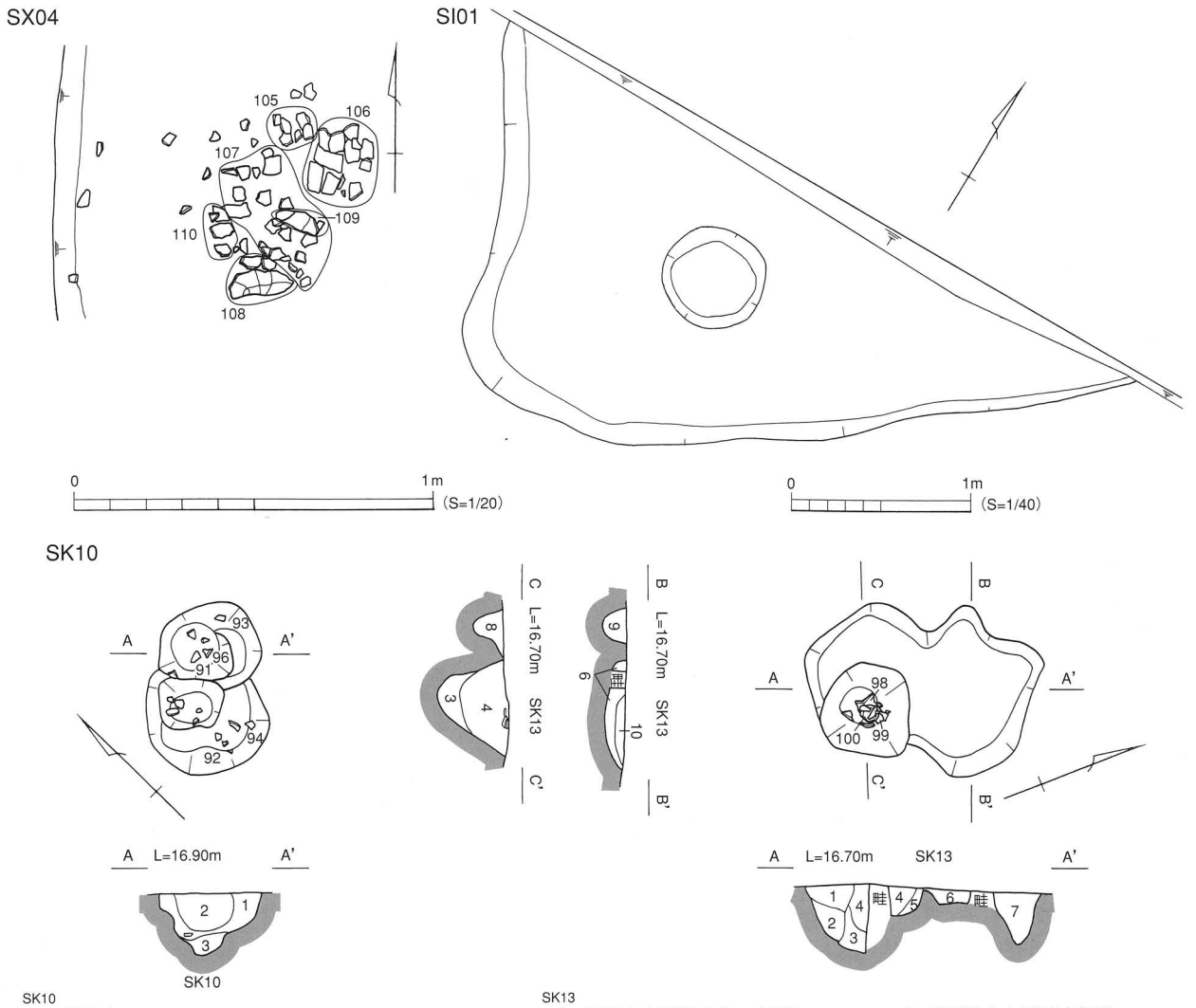
SB01



SB02

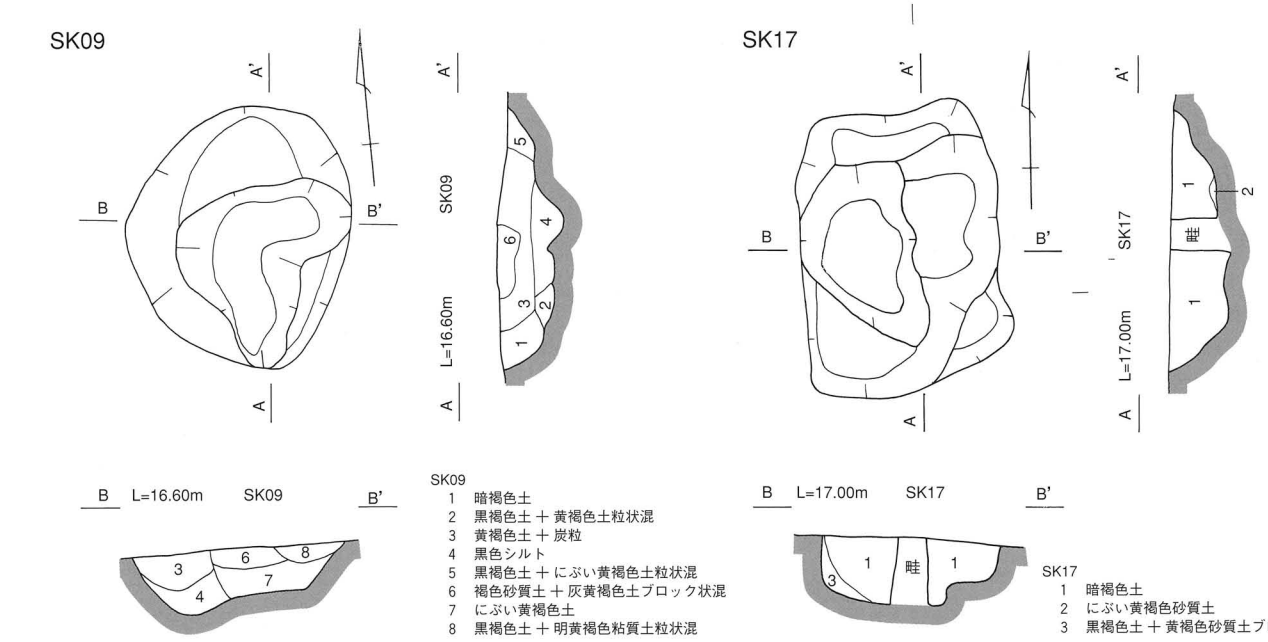


第５図　SB01・02平面図及びエレベーション図（S=1/40）



SK10
1 黒褐色土
2 暗褐色土＋明黄褐色土シルトブロック状混
3 黒褐色土＋にぶい黄褐色土砂質の混合土＋明黄褐色シルトブロック状混

SK13
1 黒褐色土＋黄褐色土ブロック状混
2 暗褐色土＋黄褐色土ブロック状混
3 黒褐色粘土質＋明黄褐色シルトブロック状混
4 黒褐色土＋浅黄橙色粘土少量混
5 暗褐色土＋黄褐色土の混合土
6 明黄褐色土＋黒褐色土多量混
7 暗褐色土＋明黄褐色シルトブロック状混
8 黒褐色土＋にぶい黄褐色土ブロック状混
9 黒褐色土＋明黄褐色土少量混
10 黒褐色土＋にぶい黄褐色土少量混



SK09
1 暗褐色土
2 黒褐色土＋黄褐色土粒状混
3 黄褐色土＋炭粒
4 黒色シルト
5 黒褐色土＋にぶい黄褐色土粒状混
6 褐色砂質土＋灰黄褐色土ブロック状混
7 にぶい黄褐色土
8 黒褐色土＋明黄褐色粘質土粒状混

SK17
1 暗褐色土
2 にぶい黄褐色砂質土
3 黒褐色土＋黄褐色砂質土ブロック状混

第６図　SX04出土状況図（S=1/20）、SI01平面図及び土坑平面図・断面図（S=1/40）

（3）竪穴建物（第６図、写真図版３）

SI01　調査区北西部（X852 ～ 854、Y-570 ～ -575）で検出した。北側は調査区外に延びるため、不明である。平面形は隅丸方形であり、短軸 2.5 m以上、長軸 3.8 m以上を測る。堀肩は緩やかに立ちあがる。主軸方向はＮ－ 54°－Ｅである。埋土から須恵器が出土している。SK23 は SI01 が埋まった後に掘削されている。

（4）土坑（第３・６図、写真図版３・４）

調査区内では、浅い土坑が多く検出されたが、その多くは木の根の痕または風倒木痕であった。

SK08　調査区北東部（X852 ～ 853、Y-561）で検出した。東側は後世の撹乱を受けている。平面形は歪な楕円形であり、長軸 0.92 m、短軸 0.55 m以上、深さ 0.10 mを測る。埋土から土師器が出土している。

SK09　調査区北部中央（X851 ～ 852、Y-564 ～ -566）で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 1.38 m、短軸 1.20 m、深さ 0.30 mを測る。埋土の状況から風倒木痕と考えられる。

SK10　調査区西部中央（X849 ～ 850、Y-575）で検出した。平面形は不整形であり、長軸 0.98 m、短軸 0.56 m、深さ 0.34 ～ 0.37 mを測る。2 個の穴が切り合い関係にある。埋土から土師器、須恵器が出土している。

SK13　調査区西部中央（X848 ～ 849、Y-573）で検出した。平面形は不整形であり、長軸 1.34 m、短軸 0.95 m、深さ 0.08 ～ 0.28 mを測る。南側に一辺 0.50 m、深さ 0.40 mを測るほぼ方形の穴があり、この穴の埋土から土師器、須恵器が出土している。

SK17　調査区北西部（X843 ～ 845、Y-574 ～ -576）で検出した。平面形は長方形であり、長軸 1.50 m、短軸 1.05 m、深さ 0.35m を測る。

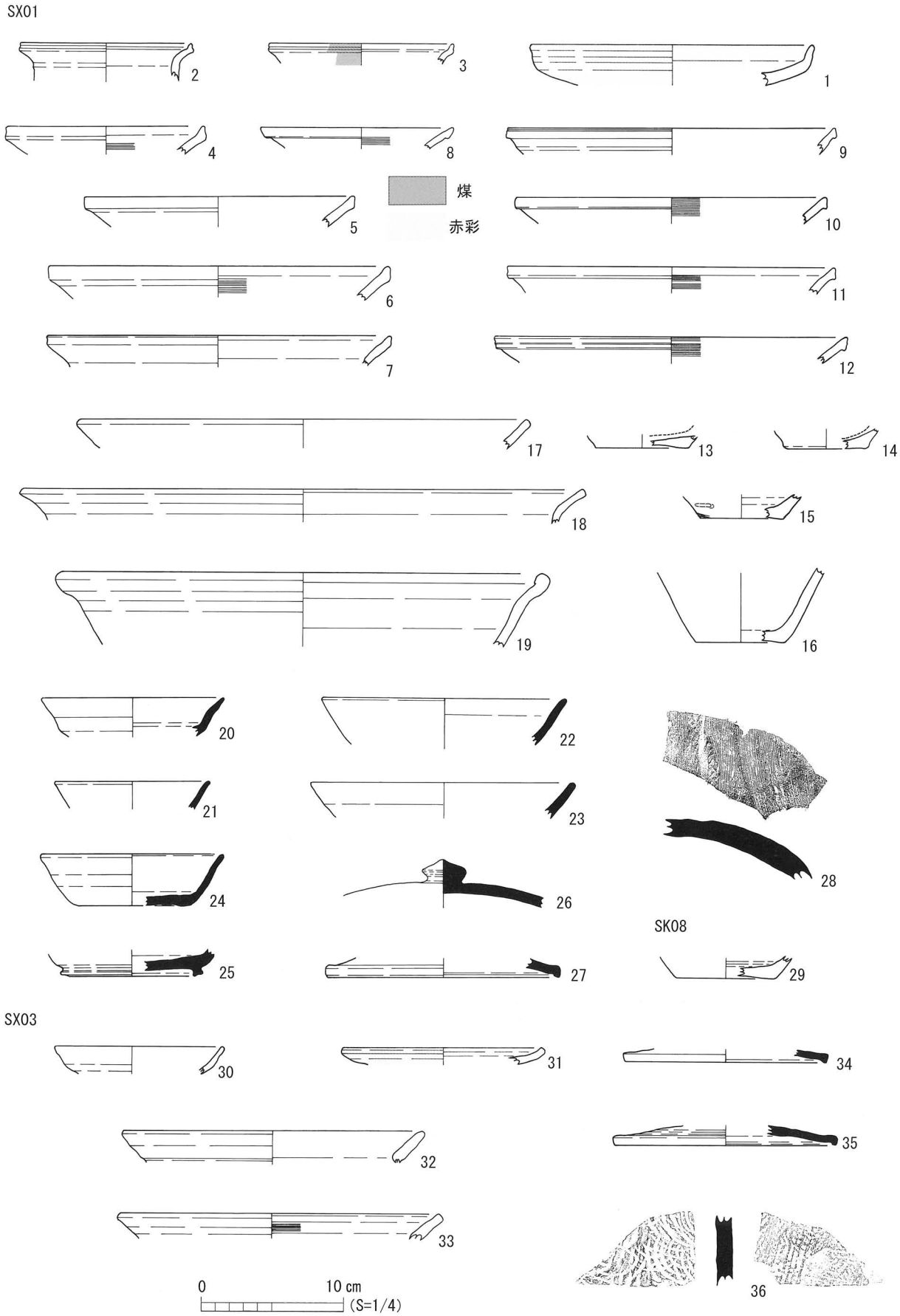
（5）土器だまり（第６図、写真図版３）

SX04　調査区西部中央（X848 ～ 849、Y-575 ～ -576）で検出した。縄文土器が数個体確認された。

第４節　出土遺物（第７～ 10 図、写真図版５～７）

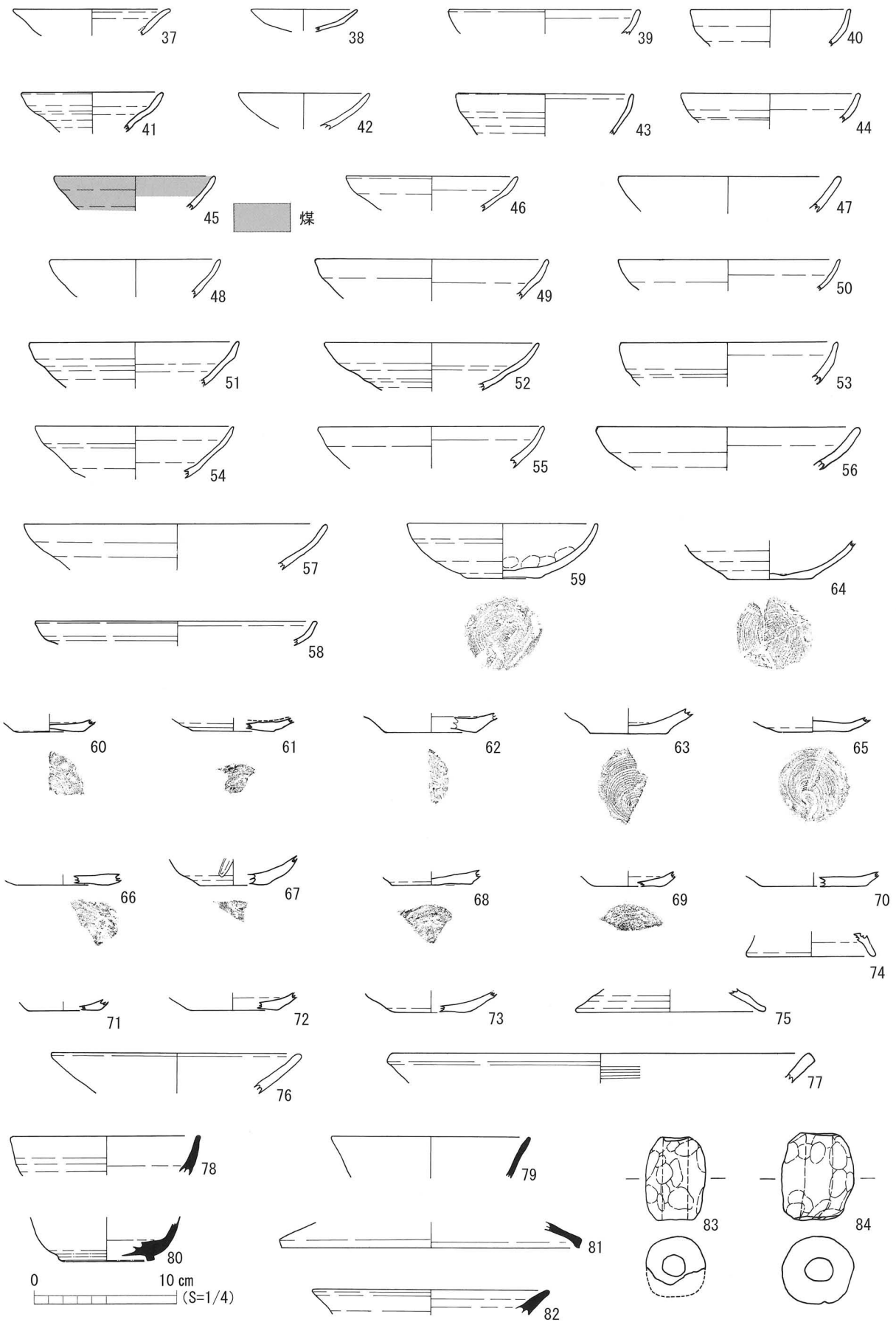
SX01　1 ～ 19 は土師器である。1 は高杯である。口縁部が外反気味に立ち上がる。内外面に赤彩が施される。2 ～ 4・8 は短胴釜である。5 ～ 7・9 ～ 12 は長胴釜である。2 ～ 4 は、口縁部が外傾し上方に引き上げられ内側に段がつき、端面は面取りし、口縁端部は角を持つ。4 は口縁部内面にカキ目が施される。5 ～ 12 は、口縁部が外傾し端部を強いナデにより面取りする。口縁端部は肥厚する。5・7・10 ～ 12 は口縁部内面にカキ目が施される。13 ～ 16 は釜の底部である。13・14 は内面が剥離している。14 は外底面に回転ヘラ切り痕が見られる。17 ～ 19 は鍋である。17・18 は口縁部が外傾し端部を面取りする。口縁端部は角を持つ。19 は口縁部が外傾し途中で端部を巻き込む。内面には巻き込みの段がつく。20 ～ 28 は須恵器である。20 ～ 23 は杯の口縁部である。20 ～ 22 は口縁部が小さく外反する。23 は口縁部が直線状に立ち上げる。24 は杯Ａである。体部と底部の境は角張っている。外底面は回転ヘラ切り後ナデを行う。25 は杯Ｂである。体部と底部の境は丸い。外底面は回転ヘラ切り後ナデを行い、その後高台を貼り付けている。高台は内傾している。26・27 は杯蓋である。26 はつまみが扁平な宝珠形である。27 は口縁部が丸くおさまる。28 は横瓶である。外面にカキ目が施される。図化しなかったが、焼成粘土塊が出土している。

SX02　37 ～ 77 は土師器である。37 ～ 74 は椀である。37 は口縁部がやや外反する。38 ～ 58 は体部が直線的に立ち上がり、口縁部を上方に引き上げる。口縁端部を細長くおさめるもの（38 ～ 44・46・48 ～ 54）と丸くおさめるもの（39・45・47・55 ～ 58）がある。59 は体部が内湾しながら立ち上がる。外底面に回転糸切り痕が見られる。60 ～ 73 は底部である。60 ～ 69 は外底面に回転糸切り痕が見られる。

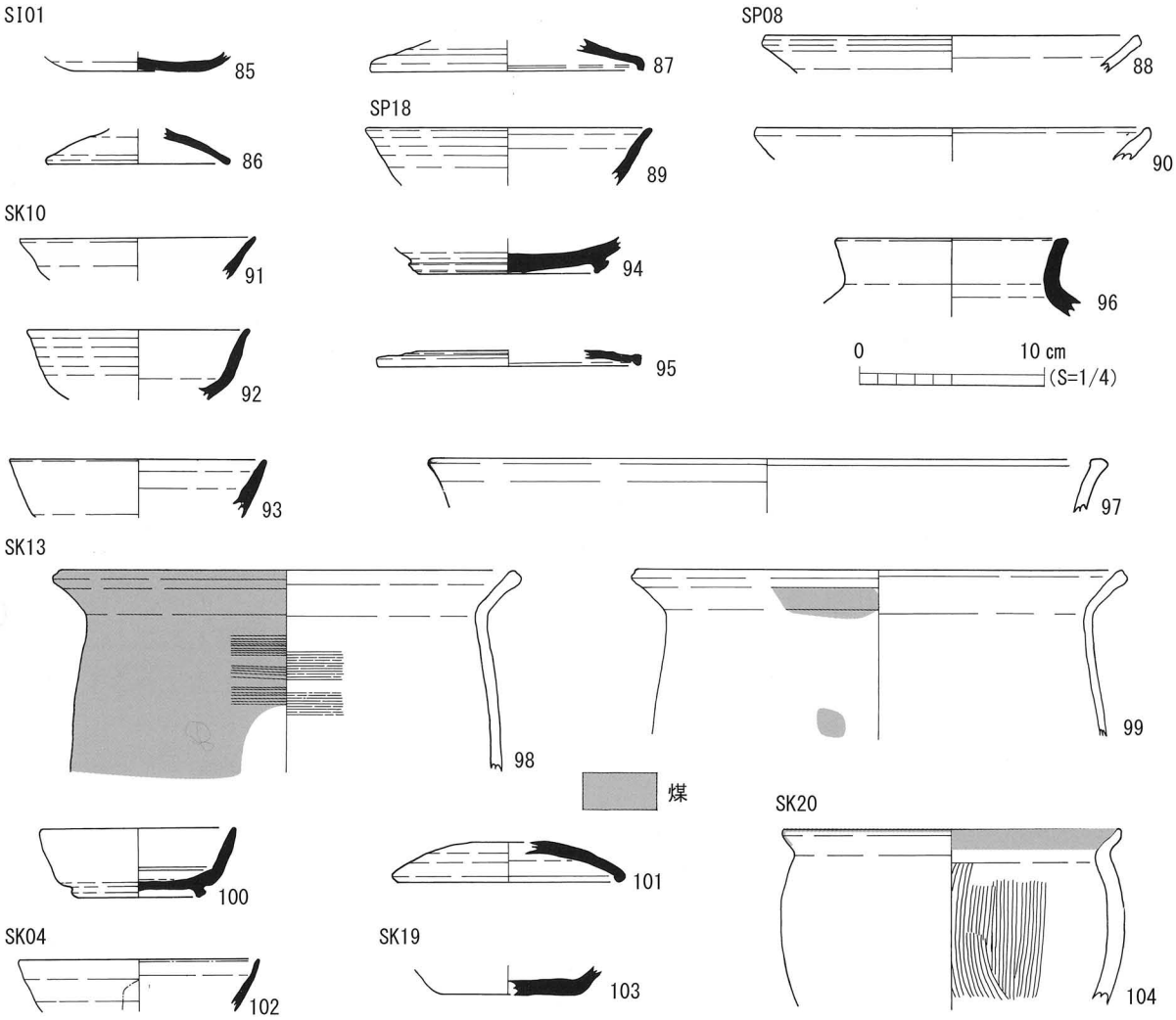


第７図　出土遺物実測図（１）

SX02



第８図　出土遺物実測図（２）



第９図　出土遺物実測図（３）

60・61 は内面が剥離している。74 は底部の高台である。75 は高杯の脚部である。76 は短胴釜である。口縁部は外傾し口縁端部を丸くおさめる。77 は長胴釜である。口縁部が外傾し端面を面取りし、口縁端部は角を持つ。口縁部内面にカキ目が施される。78 ～ 82 は須恵器である。78・79 は杯である。口縁部がやや外反する。80 は杯Ｂである。高台は内傾している。体部と底部の境は丸い。81 は杯蓋である。口縁部は断面三角形である。82 は短頸壺である。83・84 は土師質の土錘である。83 は外面が一部破砕している。84 は片方の孔が焼成で変形している。図化しなかったが、焼成粘土塊が出土している。

SX03　30 ～ 33 は土師器である。30 は椀である。口縁部は上方に引き上げられ、口縁端部を丸くおさめる。31 は高杯である。杯部は横に伸び、口縁部は緩やかに内湾し、端部を面取りする。内外面に赤彩が施される。32・33 は長胴釜である。32 は口縁部が外傾し口縁端部を丸くおさめる。33 は口縁部が外傾し上方に引き上げられ内側に段がつき、端面は面取りし、口縁端部は角を持つ。口縁部内面にカキ目が施される。34 ～ 36 は須恵器である。34・35 は杯蓋である。口縁部は断面三角形である。36 は甕の胴部である。外面に平行叩き目、内面に同心円の当て具が施される。図化しなかったが、焼成粘土塊が出土している。

SX04　105 ～ 110 は縄文土器の深鉢である。105 はキャリパー形の口縁部を持ち、器面にＲＬ縄文

が施文された粗製土器である。口縁部に粘土紐を「し」の字状に貼り付けた装飾突起が見られる。縄文時代中期前葉前半の新保式と考えられる。106 ～ 110 が胴部片で、106・107 はＬＲ縄文、108 はＲＬ縄文、109・110 はＬ縄文が外面に施文される。108 ～ 110 は外面に煤が付着する。

SI01　85 ～ 87 は須恵器である。85 は杯Ａである。外底面は回転ヘラ切り後ナデを行う。86・87 は杯蓋である。86 は口縁端部を丸くおさめる。87 は口縁端部を内側に巻き込む。

SP08　88 は土師器の長胴釜である。口縁部が外傾し端面を面取りする。口縁端部は角を持つ。

SP18　89 は須恵器の杯である。口縁部が直線状に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。90 は土師器の釜である。口縁部が外傾し途中で口縁端部を巻き込む。内面の巻き込みは段が無く断面は細長くなる。

SK04　102 は須恵器の杯である。口縁部は直線状に立ち上がり、口縁端部でやや内湾する。口縁端部から外面に自然釉が付着する。

SK08　29 は土師器の釜の底部である。

SK10　91 ～ 96 は須恵器である。91 ～ 93 は杯である。91・92 は口縁部が直線状に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。93 は口縁部が直線状に立ち上がる。94 は杯Ｂである。外底面は回転ヘラ切り後ナデを行い、その後高台を貼り付けている。高台は内傾している。95 は杯蓋である。口縁部を内側に巻き込む。96 は短頸壺である。97 は土師器の鍋である。口縁部が外傾し上方に引き上げられ内側に段がつき、端面は面取りし、口縁端部は角を持つ。

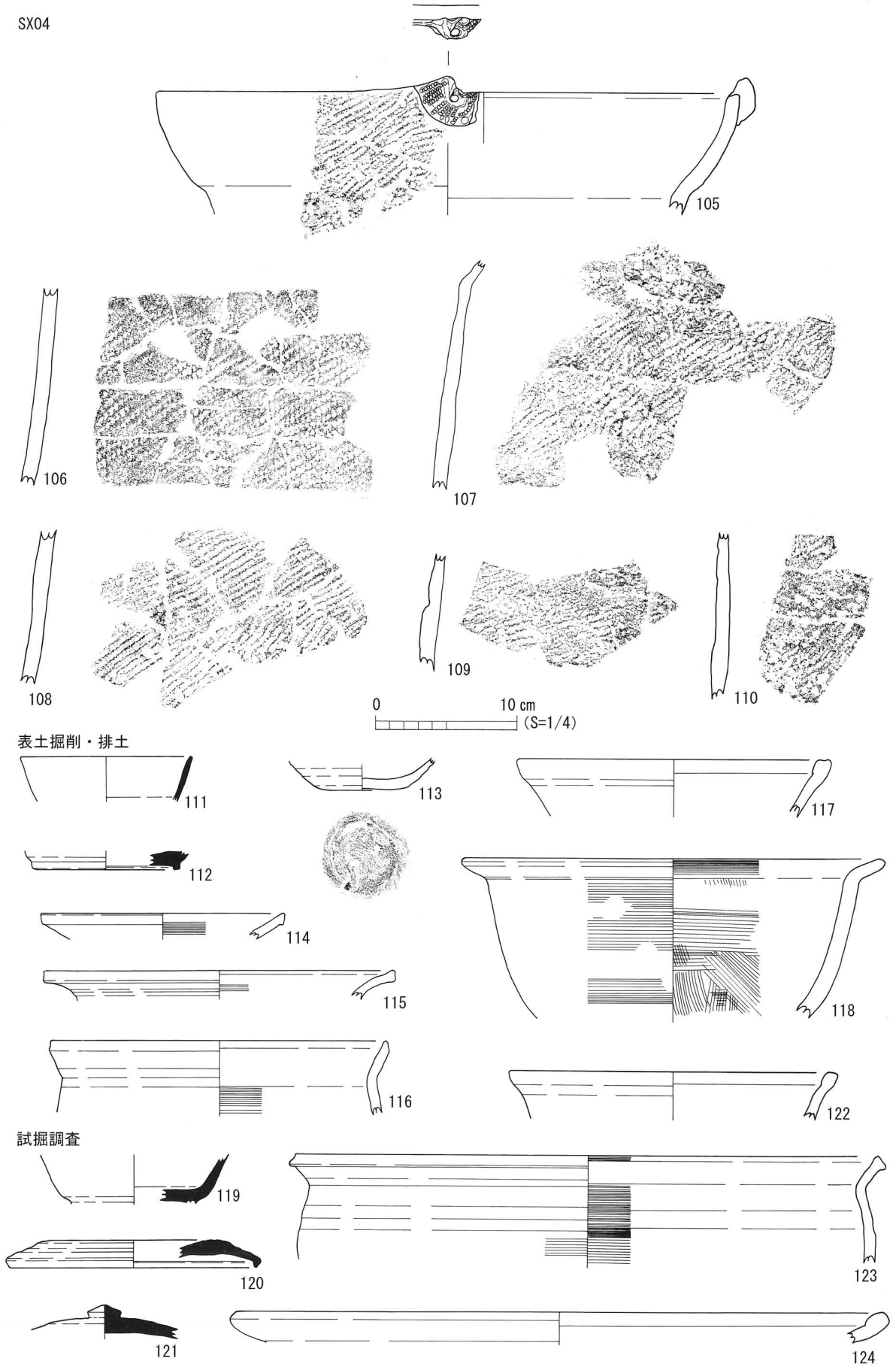
SK13　98・99 は土師器の長胴釜である。ともに卵形の胴部に外傾する口縁部がつく。口縁部は上方に引き上げられ内面に段がつく。端面は面取りし、口縁端部は角を持つ。外面に煤が付着する。100・101 は須恵器である。100 は杯Ｂである。口縁部は直線状に立ち上がり、体部と底部の境は角張っている。外底面は回転ヘラ切り後ナデを行い、その後高台を貼り付けている。高台は内傾している。内外面に自然釉が付着している。101 は杯蓋である。口縁端部を内側に巻き込む。

SK19　103 は須恵器の杯Ａである。外底面は回転ヘラ切り後ナデを行う。内面及び外底面に自然釉が付着する。

SK20　104 は土師器の短胴釜である。半球形の胴部に外傾する口縁部がつく。口縁部は上方に引き上げられ内面に段がつく。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面に煤が付着する。

表土掘削・排土　111・112 は須恵器である。111 は杯で、口縁部が直線状に立ち上がる。112 は杯Ｂである。113 ～ 119 は土師器である。113 は椀の底部である。外底面に回転糸切り痕が見られる。114 は短胴釜である。114 は口縁部が外傾し端部を強いナデにより面取りする。口縁端部は肥厚する。口縁部内面にカキ目が施される。115・116 は長胴釜である。ともに口縁部が外傾し端部を面取りする。口縁端部は角を持つ。115 は口縁部内面、116 は体部内面にカキ目が施される。117・118 は鍋である。117 は口縁部が外傾し途中で口縁端部を巻き込む。内面の巻き込みは段が無く断面は細長くなる。118 は半球形の胴部に外傾する口縁部がつき、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は叩きの上からカキ目後一部ナデケシ、内面はタテハケの上に体部上半部から口縁部にかけてカキ目後頸部をナデケシが施される。

試掘調査　119 ～ 121 は須恵器である。119 は杯Ｂである。体部と底部の境は丸い。120・121 は坏蓋である。121 は口縁端部が断面三角形である。122 はつまみが扁平な宝珠形である。122 ～ 124 は土師器である。123 は長胴釜である。口縁部が外傾し端部を面取りするが上方に引き上げられ伸びる。口縁端部は肥厚する。外面は体部にカキ目、内面はカキ目後口縁部をナデケシが施される。122・124 は鍋である。122 は口縁部が外傾し途中で口縁端部を巻き込む。内面の巻き込みは段が無く断面は細長くなる。124 は口縁部が外傾し途中で口縁端部を巻き込む。内面には巻き込みの段がつく。



第10図　出土遺物実測図（4）

表１　西金屋・西金屋窯跡遺物観察表

№	遺構	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調		成形・調整		備考
									内面	外面	内面	外面	
1	SX01	土師器	高杯	19.8			密	良好	赤褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤彩
2	SX01	土師器	短胴釜	12.0			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	外面に煤付着
3	SX01	土師器	短胴釜	12.8			密	良好	暗灰色＋灰黄褐色	暗灰色＋灰黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	
4	SX01	土師器	短胴釜	13.8			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
5	SX01	土師器	短胴釜	14.0			密	良好	浅黄橙色＋橙色	にぶい橙色＋浅黄橙色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
6	SX01	土師器	短胴釜	18.8			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
7	SX01	土師器	長胴釜	23.6			密	良好	黒褐色＋淡黄色	淡黄色＋黒褐色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
8	SX01	土師器	長胴釜	24.0			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
9	SX01	土師器	長胴釜	23.0			密	良好	灰黄色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
10	SX01	土師器	長胴釜	21.6			密	良好	褐灰色＋明褐色	灰黄褐色＋灰白色	口縁部カキ目	回転ナデ	
11	SX01	土師器	長胴釜	23.0			密	良好	にぶい黄褐色	浅黄橙色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
12	SX01	土師器	長胴釜	24.8			密	やや不良	灰黄褐色	灰白色	口縁部カキ目	ナデ	
13	SX01	土師器	釜底部			6.4	密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		回転ナデ	内面剥離
14	SX01	土師器	釜底部			5.6	密	やや不良	淡黄色	淡黄色		底部回転ヘラ切り	内面剥離
15	SX01	土師器	釜底部			6.0	密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
16	SX01	土師器	釜底部			6.2	やや粗	良好	明黄褐色	明黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	
17	SX01	土師器	鍋	31.4			やや不良	やや不良	暗灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
18	SX01	土師器	鍋	39.4			密	良好	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
19	SX01	土師器	鍋	33.8			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
20	SX01	須恵器	杯	12.8			密	良好	黄灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	高坏か？
21	SX01	須恵器	杯	11.0			密	良好	灰黄褐色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
22	SX01	須恵器	杯	12.8			密	良好	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
23	SX01	須恵器	杯	13.8			密	良好	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
24	SX01	須恵器	杯Ａ	13.0	3.7	7.5	密	不良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ	
25	SX01	須恵器	杯Ｂ			8.8	やや粗	やや不良	灰黄色	黄灰色	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ	
26	SX01	須恵器	杯蓋				密	不良	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	天井回転ヘラ削 回転ナデ	
27	SX01	須恵器	杯蓋	16.4			密	やや不良	黄灰色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
28	SX01	須恵器	横瓶				密	良好	灰白色	灰黄色＋黒褐色	回転ナデ	カキ目	外面に自然釉付着
29	SK08	土師器	椀			7.0	密	良好	浅黄橙色＋明赤褐色	浅黄橙色	回転ナデ	底部回転ヘラ切り	
30	SX03	土師器	椀	12.8			密	良好	明赤褐色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	
31	SX03	土師器	高杯	14.0			密	良好	浅黄橙色＋赤褐色	浅黄橙色＋赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤彩
32	SX03	土師器	長胴釜	21.0			密	良好	灰黄褐色＋にぶい黄褐	にぶい黄褐＋灰黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	
33	SX03	土師器	長胴釜	23.2			密	良好	褐色＋浅黄橙色	にぶい黄橙色＋橙色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
34	SX03	須恵器	杯蓋	13.8			密	不良	灰黄褐色＋にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
35	SX03	須恵器	杯蓋	15.6			密	良好	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	外面に自然釉付着、焼歪み有
36	SX03	須恵器	甕				密	良好	黄灰色	灰色	当て具	叩き目	
37	SX02	土師器	椀	13.0			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
38	SX02	土師器	椀	7.4			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
39	SX02	土師器	椀	13.4			密	良好	明黄褐色	明黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	
40	SX02	土師器	椀	11.0			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
41	SX02	土師器	椀	9.8			やや粗	良好	にぶい黄褐色＋浅黄橙色	にぶい黄褐色＋浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
42	SX02	土師器	椀	9.4			密	良好	明褐色＋浅黄橙色	浅黄橙色＋明褐色	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤彩？
43	SX02	土師器	椀	12.4			密	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	
44	SX02	土師器	椀	12.4			密	良好	にぶい黄橙色	浅黄橙色＋橙色	回転ナデ	回転ナデ	外面赤彩？
45	SX02	土師器	椀	11.2			密	良好	灰黄褐色＋にぶい黄褐色	にぶい黄橙色＋褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	内外面に煤付着
46	SX02	土師器	椀	12.0			密	良好	浅黄橙色＋橙色	橙色＋浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤彩？
47	SX02	土師器	椀	11.6			密	良好	黒褐色	にぶい黄橙色＋黒褐色	回転ナデ	回転ナデ	
48	SX02	土師器	椀	11.8			密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
49	SX02	土師器	椀	16.3			やや粗	良好	浅黄橙色＋橙色	浅黄橙色＋橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤彩？
50	SX02	土師器	椀	15.6			密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
51	SX02	土師器	椀	14.6			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
52	SX02	土師器	椀	15.0			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
53	SX02	土師器	椀	11.4			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
54	SX02	土師器	椀	14.0			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
55	SX02	土師器	椀	15.7			やや粗	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
56	SX02	土師器	椀	13.8			密	良好			回転ナデ	回転ナデ	
57	SX02	土師器	椀	15.8			密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
58	SX02	土師器	椀	19.8			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
59	SX02	土師器	椀	13.4	3.9	5.4	密	良好	橙色＋浅黄橙色	橙色＋浅黄橙色	回転ナデ 指頭圧痕	底部回転糸切り	内外面赤彩？
60	SX02	土師器	椀			4.6	密	良好	にぶい黄橙色	灰黄褐色		底部回転糸切り	内面剥離
61	SX02	土師器	椀			5.6	密	良好	橙色	褐灰色＋橙色		底部回転糸切り	内面剥離
62	SX02	土師器	椀			4.6	密	良好	橙色	橙色＋暗灰色	回転ナデ	底部回転糸切り	

№	遺構	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調		成形・調整		備考
									内面	外面	内面	外面	
63	SX02	土師器	椀			5.6	密	良好	暗灰黄色	黒褐色＋暗灰黄色	回転ナデ	底部回転糸切り	
64	SX02	土師器	椀			5.8	密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	底部回転糸切り	
65	SX02	土師器	椀			4.6	密	やや良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	底部回転糸切り	
66	SX02	土師器	椀			6.4	密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	底部回転糸切り	
67	SX02	土師器	椀			4.9	密	良好	橙色	浅黄橙色	回転ナデ	底部回転糸切り	
68	SX02	土師器	椀			5.6	密	良好	にぶい黄橙色＋明赤褐色	にぶい黄橙色＋明赤褐色	回転ナデ	底部回転糸切り	内外面赤彩？
69	SX02	土師器	椀			5.0	密	良好	にぶい黄褐色	赤褐色＋にぶい黄橙色	回転ナデ	底部回転糸切り	外面赤彩？
70	SX02	土師器	椀			7.0	やや粗	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
71	SX02	土師器	椀			5.0	密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
72	SX02	土師器	椀			6.4	密	良好	橙色＋浅黄橙色	橙色＋浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
73	SX02	土師器	椀			4.6	やや粗	良好	明黄褐色	明黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	
74	SX02	土師器	椀			8.8	密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
75	SX02	土師器	高杯			13.2	密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
76	SX02	土師器	短胴釜	17.6			密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
77	SX02	土師器	長胴釜	22.0			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ・ヨコハケ	回転ナデ	
78	SX02	須恵器	杯	15.0			密	良好	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
79	SX02	須恵器	杯	14.0			密	良好	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
80	SX02	須恵器	杯B			4.7	密	良好	黄灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	外面及び底面に自然釉付着
81	SX02	須恵器	杯蓋	15.6			密	不良	にぶい黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
82	SX02	須恵器	短頸壺	16.3			密	不良	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ・カキメ	
83	SX02	土錘		4.2	6.0		やや粗	やや不良	灰白色			指当圧痕	
84	SX02	土錘		5.0	6.2		やや粗	良好	橙色			指当圧痕	
85	SI01	須恵器	杯A			9.0	密	やや不良	にぶい黄色	灰黄色	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	
86	SI01	須恵器	杯蓋	11.8			密	不良	橙色＋褐色	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
87	SI01	須恵器	杯蓋	14.8			密	不良	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
88	SP08	土師器	長胴釜	20.0			粗	良好	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
89	SP18	須恵器	杯	15.0			やや粗	やや不良	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
90	SP17	土師器	長胴釜	21.2			粗	良好	褐灰色	褐灰色＋浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
91	SK10	須恵器	杯	12.8			密	不良	灰白色＋淡橙色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
92	SK10	須恵器	杯	12.0			やや密	良好	暗灰黄色	暗灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
93	SK10	須恵器	杯	13.9			密	不良	暗灰黄色＋にぶい黄橙色	暗灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	
94	SK10	須恵器	杯B			9.4	やや粗	やや不良	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ	
95	SK10	須恵器	杯蓋	14.0			密	不良	にぶい黄橙色	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ	
96	SK10	須恵器	短頸壺	12.4			密	不良	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
97	SK10	土師器	鍋	36.7			密	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
98	SK13	土師器	長胴釜	24.2			やや密	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ 体部カキ目	回転ナデ 体部カキ目	外面に煤付着
99	SK13	土師器	長胴釜	26.0			やや密	やや不良	浅黄橙色	にぶい黄橙色＋にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	外面に煤付着
100	SK13	須恵器	杯B	10.4	3.7	6.6	密	良好	黄灰色	黄灰色	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	内外面に自然釉付着
101	SK13	須恵器	杯蓋	12.0			密	良好	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
102	SK04	須恵器	杯	12.8			密	良好	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部から外面に自然釉付着
103	S K 19	須恵器	杯A			7.2	密	良好	暗灰黄色	灰黄色＋にぶい赤褐色	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ	内面・外底部に自然釉付着
104	SK20	土師器	短胴釜	18.0			粗	良好	黄橙色	橙色	回転ナデ タテハケ目	回転ナデ	口縁部内面に煤付着
105	SX04	縄文土器	深鉢	41.0			粗	良好	浅黄橙色＋にぶい黄橙色	浅黄橙色＋にぶい黄橙色	ナデ・ケズリ	縄文	装飾突起貼付
106	SX04	縄文土器	深鉢				密	良好	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文	
107	SX04	縄文土器	深鉢				粗	良好	明黄褐色	橙色	ナデ	縄文	
108	SX04	縄文土器	深鉢				粗	良好	明黄褐色	褐灰色＋にぶい黄橙	ナデ	縄文	外面に煤付着
109	SX04	縄文土器	深鉢				やや粗	良好	にぶい黄橙色	橙色＋暗赤褐色	ナデ	縄文	外面に煤付着
110	SX04	縄文土器	深鉢				粗	良好	明黄褐色	にぶい黄褐色＋にぶい黄橙色	ナデ	縄文	外面に煤付着
111	表土	須恵器	杯	10.0			密	良好	暗黄灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	
112	排土	土師器	杯B			10.3	やや粗	やや不良	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
113	表土	土師器	椀			6.0	密	良好	橙色	橙色	回転ナデ	底部回転糸切り	
114	排土	土師器	短胴釜	16.8			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
115	表土	土師器	長胴釜	24.4			やや粗	良好	にぶい黄橙色	褐灰色	回転ナデ 口縁部カキ目	回転ナデ	
116	排土	土師器	長胴釜	23.4			密	良好	淡黄色	淡黄色	回転ナデ 体部カキ目	回転ナデ	
117	表土	土師器	鍋	20.0			密	良好	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
118	表土	土師器	鍋	29.0			やや粗	良好	浅黄橙色	浅黄橙色＋橙色	タテハケ目の上から一部カキ目後、ナデケシ	体部タタキの上からカキ目後、一部ナデケシ	
119	試掘 4T	須恵器	杯B				密	良好	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
120	試掘表採	須恵器	杯蓋	17.4			密	良好	灰白色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
121	試掘表採	須恵器	杯蓋				密	良好	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	天井回転ヘラ削	
122	試掘表採	土師器	鍋	22.0			密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
123	試掘 2T	土師器	長胴釜	40.6			やや粗	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	カキ目後、口縁部ナデケシ	回転ナデ 体部カキ目	
124	試掘 6T	土師器	鍋	45.0			やや粗	良好	浅黄橙色	浅黄橙色＋明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	

第４章　自然科学分析

第１節　出土炭化物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

西金屋・西金屋窯跡は、奈良～平安時代の集落跡とされており、本遺跡南端には奈良時代の須恵器窯跡が確認されている。今回の発掘調査では、奈良時代の土師器焼成遺構、土坑、柱穴のほか、縄文時代の土器だまりなどが検出されている。

本報告では、上記した土師器焼成遺構の年代および出土炭化材の樹種の検討を目的として、放射性炭素年代測定および樹種同定を実施した。

２．試料

試料は、土師器焼成遺構（SX01,SX02）から出土した炭化材である。SX01 の炭化材（NK･NKK SX01 ③）は最大 1.5㎝角程度の破片、SX02 の炭化材（NK･NKK SX02 ③）は半裁状（径約 1.8cm）を呈する破片である。放射性炭素年代測定には、上記した炭化材片の最外年輪を含む２～３年分を供し、残りの破片を樹種同定試料としている。

３．分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が68%、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

4．結果

(1) 放射性炭素年代測定

土師器焼成遺構から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、SX01が1,330 ± 30yrBP、SX02が1,170 ± 30yrBPを示す。また、較正暦年代（測定誤差σ）は、SX01がcalAD656-calAD761、SX02がcalAD782-calAD937である（表1）。

(2) 樹種同定

分析に供した炭化材2点は、いずれも落葉広葉樹であり、SX01がカエデ属、SX02がクリに同定された（表1）。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に道管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・カエデ属（*Acer*） カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-50細胞高。

表1．放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	測定機関 Code No.
NK・NKK SX01 ③ 炭化材(カエデ属)	1330±30	-23.02±0.76	1327±28	σ	cal AD 656 - cal AD 689	0.873	IAAA-112044
					cal AD 752 - cal AD 761	0.127	
				2σ	cal AD 650 - cal AD 719	0.808	
					cal AD 742 - cal AD 769	0.192	
NK・NKK SX02 ③ 炭化材(クリ)	1170±30	-25.21±0.76	1165±27	σ	cal AD 782 - cal AD 789	0.057	IAAA-112045
					cal AD 810 - cal AD 847	0.354	
					cal AD 855 - cal AD 895	0.472	
				2σ	cal AD 925 - cal AD 937	0.117	
					cal AD 778 - cal AD 900	0.801	
					cal AD 918 - cal AD 964	0.199	

5．考察

土師器焼成遺構から出土した炭化材の較正暦年代は、SX01が7世紀中頃～8世紀中頃、SX02が8世紀後半～10世紀前半を示した。土師器焼成遺構は奈良時代と推定されており、SX02出土炭化材が示した年代はこの所見を支持する。一方SX01はSX02よりも古い年代を示しており、出土遺物から推定される年代観との比較、出土状況などの試料の履歴の検討が望まれる。

また、土師焼成遺構から出土した炭化材は、クリ（SX02）とカエデ属（SX01）に同定された。いずれも二次林を構成する落葉高木であることから、呉羽丘陵などの周辺の山野に生育していた樹木が燃料材として利用されたことが推定される。

富山市域では、これまでにも古代の土師器焼成遺構より出土した炭化材の調査が実施されており、本遺跡の北西に分布する境野新扇状地に位置する御坊山遺跡では、コナラ節やクリが確認されている。コナラ節も二次林の構成種であることから、今回の結果と同様の傾向が窺える。このうち、クリについては、伏焼の炭窯をはじめとして幾つかの用途が想定される焼壁遺構から出土した炭化材にも多く認められる傾向にあり、燃料材としてよく利用されていた可能性がある。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

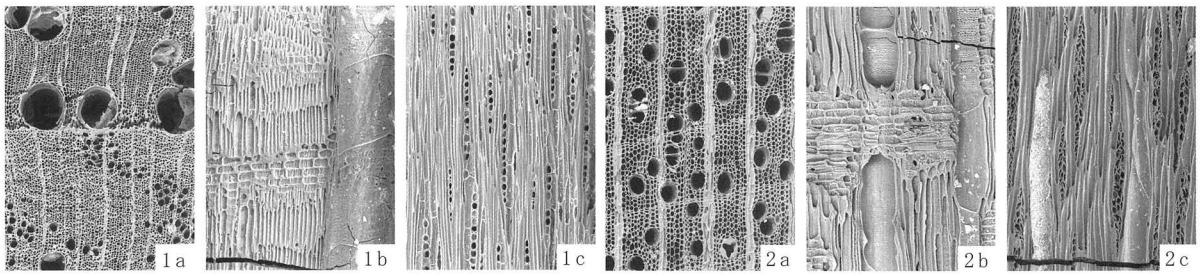
伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.[Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1　炭化材



1. クリ(SX02)　2. カエデ属(SX01)　a:木口，b:柾目，c:板目　　200μm:a　200μm:b, c

第２節　土師器焼成遺構の地磁気年代の研究

酒井英男，菅頭明日香（富山大学理工学研究部）

１．はじめに

富山市古沢地内に位置する奈良時代～平安時代の集落跡である西金屋・西金屋窯跡の遺跡において、平成 23 年度の発掘調査により 2 基の土師器焼成遺構 (SX01・02、図 1) が見つかった。本稿では、これらの遺構の焼土について磁性の調査を行い、特に年代を研究した結果を報告する。

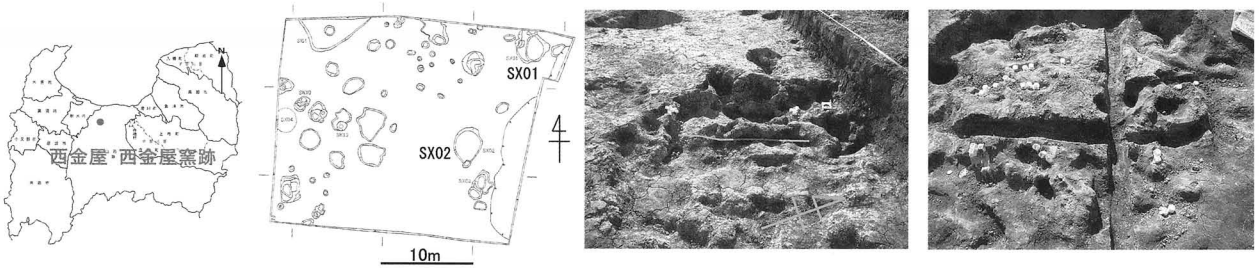


図 1. 西金屋・西金屋窯跡の土師器焼成遺構. 左 :SX01, 右 : SX02. 白い部位は試料採取点を示す.

２．考古地磁気の研究

自然界の土壌には数％の鉄の酸化鉱物が含まれており、その中でも磁鉄鉱 (Fe3O4) や赤鉄鉱 (Fe2O3) には永久磁石になる性質がある。これらの鉱物は、高温まで熱されると冷却時に、その時の地磁気の方向と大きさを磁化として記憶できる。その結果、焼土や遺物は当時の地磁気の記録となった残留磁化を獲得する。地磁気は、図 2 (a) の様に、方向を示す偏角、伏角と強度の３成分で表される。焼土や遺物の残留磁化を用いて過去の地磁気が研究されてきた。考古時代の地磁気は窯跡の資料で研究されており、日本では、過去 2000 年間の地磁気の３成分の詳細な変化が得られている [Hirooka1971, Sakai & Hirooka1986 など]。図 2 (b)･(c) には、そのうちの地磁気の方向の変化をシュミットネット図に示しており、偏角は西 20 ˚から東 15 ˚、伏角は 35 ˚から 65 ˚の範囲で移動している。図 2 の地磁気変動を焼土や遺物の残留磁化と対比すると年代が推定できる。焼土遺構では保存が良いと、数十年の精度での年代推定が可能である。

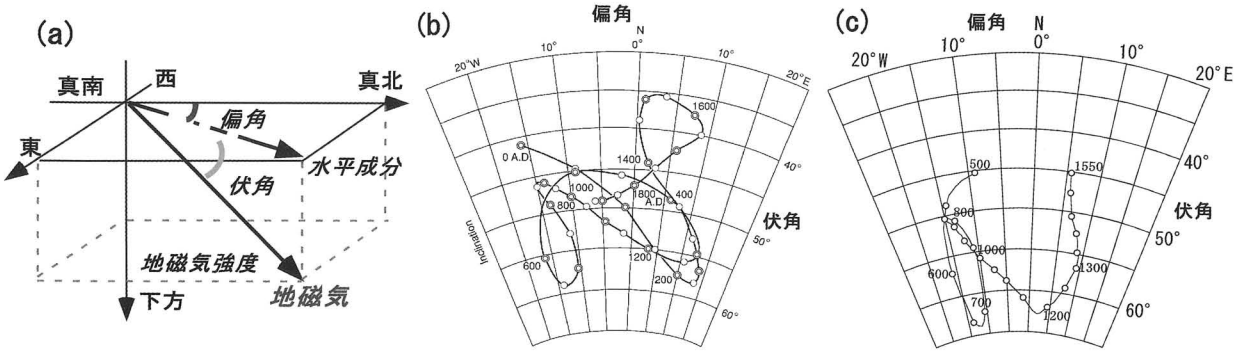


図 2. (a) 地磁気の偏角、伏角と地磁気強度. (b) 地磁気方向の過去 2000 年間の変動.
(c) 北陸版の変動.

図2 (b) は、近畿地方等の西南日本の試料を主に用いて得られており、西南日本版の地磁気変動と称されている。また研究が進んで地域による地磁気変動の違いも検討できる様になった。地域毎での特徴が明らかになると年代推定の精度が向上する。北陸地域では、広岡［1997］により、図2 (c) に示すAD500-1550年の地磁気変動が得られている。西金屋・西金屋窯跡は奈良時代から平安時代と考えられており、この北陸版地磁気変動を用いて年代を研究した。富山県内では、同時代の近傍での焼土遺構として、北押川遺跡や向野池遺跡等で地磁気年代の研究が行われている［酒井ほか、2006,2008a,b］。

3．試料の採取と磁化測定

2基の土師器焼成遺構は、研究の便宜上、site1(SX02) と site2(SX01) とサイト名を付け、各サイトから10数個の研究試料を採取した。試料は容量10ccのプラスチック製ケース（以下ではケースと称す）を用いて以下の様に採取した。まず、ケースに収まる大きさに焼土面を整形し、1辺約2cm立方体のブロックにする。そしてブロックと周辺に薄い石膏をかけて固定し、その後でケースに濃い石膏を入れて焼土ブロックに上から被せる。十分に固まった後でケース上面に水平面との交線を記し、磁気コンパスを用いて磁北からのずれと水平面からの最大傾斜角を読んで記録する。その後でケースに入った試料を焼土面より外す。

試料の採取時に磁気コンパスを用いているので、研究結果の解析では地磁気偏角の補正が必要となる。この補正には、国土地理院の地磁気分布 (2000.0 値) による西偏7.3度を用いた。

図3．研究試料の採取状況

3．1．消磁実験とザイダーベルト図法

各遺構から複数試料を採取することで種々の原因の誤差をなるべく小さくした。また焼土には、地磁気の記録となる磁化以外に二次磁化が付いている場合があるので、交流磁場による消磁を40mT（milli-tesla、磁場強度の単位）までの磁場で段階的に行って二次磁化を除いた。磁化測定と交流消磁実験には富山大学の超伝導磁力計を使用し、消磁結果はザイダーベルト図法［Zijderveld, 1967］で解析した。

ザイダーベルト図法は、図4左の様に、磁化ベクトルの終点を水平面（水平成分）と鉛直面（鉛直成分）に分解して方向と大きさを平面図に表現する方法である。水平面投影では、横軸に磁化の南北成分を、縦軸には東西成分を取って黒丸で示している。また鉛直面投影では、横軸には同様に南北成分を、縦軸には磁化の上下成分を取って白抜き丸で表す。この様に、磁化の鉛直と水平の成分を投影後、水平面投影の面を90°回転させて鉛直平面と重ね合わせたのがザイダーベルト図である。残留磁化が安定な一つの成分からなる試料の消磁では、磁化は方向を変えずに減少し、磁化の点は右図の様に原点に向かう直線上に乗る。二次磁化があると磁化方向は複雑に変化する。

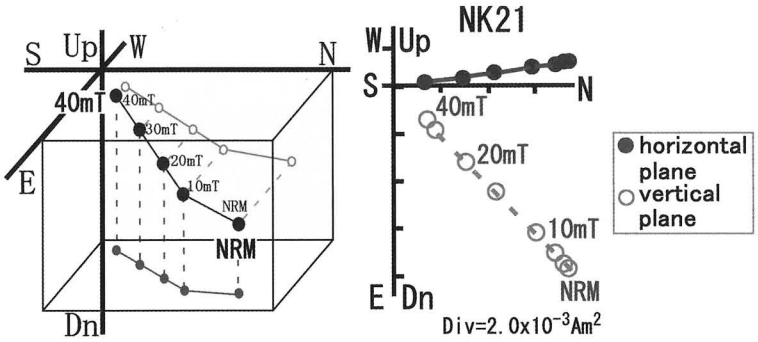


図 4. 交流消磁の結果を示すザイダーベルト図の概念 (左) と試料 NK21 の結果 (右)、図中の NRM は消磁前の方向を表す.

4. 測定結果と考古地磁気年代

4. 1. 磁化方向

Site1(SX02) の試料の磁化の強さは site2(SX01) の試料に比べて強かったが、これは site1 の焼成度が高かったことを示すと考えられる。また site1 の多くの試料では、図 4 右の例の様に消磁に伴うザイダーベルト図上の点の移動は原点に向かう結果となり、残留磁化は安定な一成分と示された。そして各試料の磁化方向はほぼ同じ方向に集中した。Site2 でも、消磁前の磁化方向は多少ばらついていたが、消磁で二次磁化を除いた結果、集中する磁化を抽出できた。

表 1 と表 2 に、消磁により安定な磁化が得られた試料の磁化方向と消磁前の磁化強度をまとめた。Site1 については、測定結果に統計処理 [Fisher1953] を適用して平均の磁化方向と誤差 (α 95 角と K 値) を求め、表 1 の下に示している。次に、北陸版地磁気変動と磁化方向を比較して最も近い位置の年代と誤差を読みとり、遺構の年代を推定した。

表1. Site1の磁化

試料番号	偏角(°)	伏角(°)	磁化強度(A/m)
nk1	-0.6	49.1	3.16E-04
nk3	-17.2	48.8	3.32E-05
nk4	-11.3	53.0	4.17E-05
nk6	-15.9	54.4	6.26E-04
nk10	-14.5	54.7	3.59E-03
nk11	-11.9	54.9	2.26E-03
nk12	-8.3	46.2	1.08E-02
nk13	-7.8	49.2	2.65E-03
nk14	-5.6	55.7	2.90E-03
nk17	-8.1	55.1	1.13E-02
nk18	-20.3	49.1	2.69E-03
nk19	-15.8	55.0	2.81E-03
nk21	-14.9	53.7	3.99E-03
ave.	-11.7	52.3	3.39E-03
α95:	2.40°	K:	299.0

表2. Site2の磁化

試料番号	偏角(°)	伏角(°)	磁化強度(A/m)
nk31	-9.0	43.9	1.08E-03
nk33	-15.2	43.7	6.12E-04
nk34	-12.7	43.2	3.64E-04
nk35	-14.5	48.0	4.87E-04
nk36	-12.8	45.9	5.47E-04
nk37	-8.7	57.3	8.75E-04
nk38	-12.4	56.3	1.29E-03
nk39	-4.5	53.6	1.90E-03
nk40	-17.8	49.7	1.52E-03

4. 2. 考古地磁気年代

図 5 の左図では、site1(SX02) の平均の磁化方向とその誤差を、図 2 (c) の北陸版地磁気変動より A.D.500 ～ 1200 年を抜粋した図と対比している。対比では、奈良時代の終わり頃と平安時代の二つの年代が考えられるが、考古学の調査結果を併せて考えると奈良時代の可能性が高い。その結果、SX02 の年代として A.D.780 ± 40 年が推定された。

Site2(SX01) では、試料を採取できる焼土の領域が少なく、半数の試料は遺構の西縁より採集した。図 1 に載せた SX01 の写真では左側の狭い領域にあたる。図 5 の右図に示すように、西縁部の試料の磁化は浅い伏角を示した。従来の研究では、遺構を埋める土で縁部は傾く場合があると報告されていた。

今回の遺構西縁部の試料も傾いて伏角が浅くなっている可能性がある。これに対して、縁から離れた範囲の4試料の磁化は違う方向を示した。磁化の集中度は劣るものの、この範囲の結果の方が信頼性は高いと考えられる。また磁化方向はsite1(SX02)に比べてより若干深い伏角を示しているので、SX01については、年代の誤差は大きいが、SX02より古いA.D.750年頃の使用年代が推測される。

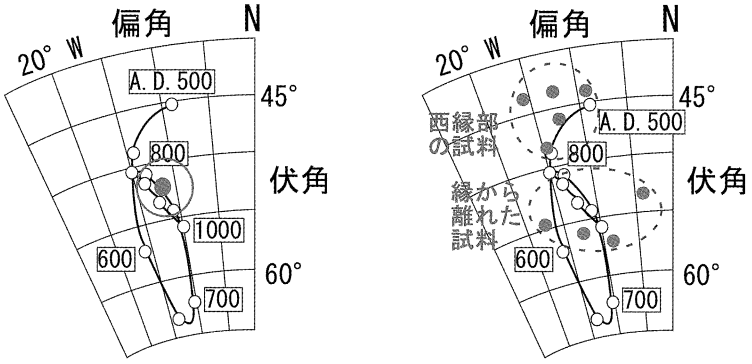


図5. 焼土の磁化方向と北陸版地磁気変動との対比：左Site1(SX02)、右Site2(SX01). Site2では、各試料の磁化方向を示している.

5. まとめ

富山市金屋・西金屋跡において、平成23年度の調査により発掘された土師器焼成遺構の地磁気年代の研究を行った。焼土の磁化方向と北陸版地磁気変動との対比の結果、SX02の使用年代はA.D.780年±40年と得られた。SX01については、SX02より若干古いA.D.750年頃の年代が推測された。

現地調査と研究結果の検討において富山市埋蔵文化財センターの堀内大介氏に御協力頂いた。

参考文献

Fisher. R.A. (1953): Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.

Hirooka, K.(1971): Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. and Mineral., 38, 167-207.

広岡公夫 (1997)：北陸における考古地磁気研究「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」, 北陸中世土器研究会偏, 桂書房, 560-583.

Sakai, H. and K. Hirooka (1986): Archaeointensity determinations from western Japan, J. Geomag. Geoelectr., vol.38, 1323-1329.

酒井英男・山本雄治・菅頭明日香・堀沢祐一 (2006): 富山市向野池遺跡の焼土遺構の考古地磁気年代, 富山市埋蔵文化財報告18, 富山市埋蔵文化財センター ,110-116.

酒井英男・山本豊・菅頭明日香・藤田慎一 (2008a)：富山市北押川B遺跡における考古地磁気研究, 富山市埋蔵文化財調査報告26, 富山市北押川B遺跡発掘調査報告書－呉羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書（2）－, 富山市埋蔵文化財調査報告26,125-138.

酒井英男・山本豊・菅頭明日香・吉田　寿 (2008b)：御坊山遺跡および北押川C遺跡における考古地磁気研究, 富山市北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書, 富山市教育委員会, 121-128.

Zijderveld, J.D.A. (1967)： A.C. demagnetization of rocks-analysis of results, Methods in Paleomagnetism, ed. Collinson, D.W., Creer, K.M. and Runcorn, S.K., New York, Elsevier, 254-286.

第5章　総　　括

第1節　土師器焼成遺構

今回の調査で、土師器焼成遺構を3基確認した。これまでの調査で古代婦負郡域では、射水丘陵東端域において開ヶ丘遺跡群〔富山市教委2003〕や向野池遺跡〔富山市教委2002〕・北押川B遺跡〔富山市教委2008〕などで平安時代の土師器焼成遺構が確認されている。本遺跡のある呉羽丘陵西麓では金草電化農場前遺跡で平安時代の土師器焼成遺構が確認されている〔富山市教委2012〕。

以下、今回見つかった土師器焼成遺構について検討する。なお、土師器焼成遺構は望月精司氏による分類〔望月1997 a・b〕、出土遺物は田嶋明人氏による編年〔田嶋1988〕に準拠する。

(1) 土師器焼成遺構 SX01

ＡＩａ１類焼成坑（横長志向型・開口型・方形）に分類され、古代で最も普遍的な土師器焼成遺構の形状である。出土した遺物は、Ⅲ～Ⅳ$_1$期（8世紀第2四半期～第3四半期）と考えられる。自然科学分析の結果、8世紀中頃の年代が得られており、編年の年代観とほぼ一致する。土師器の器種はほぼ釜か鍋であり、主に煮炊具を生産していたと考えられる。

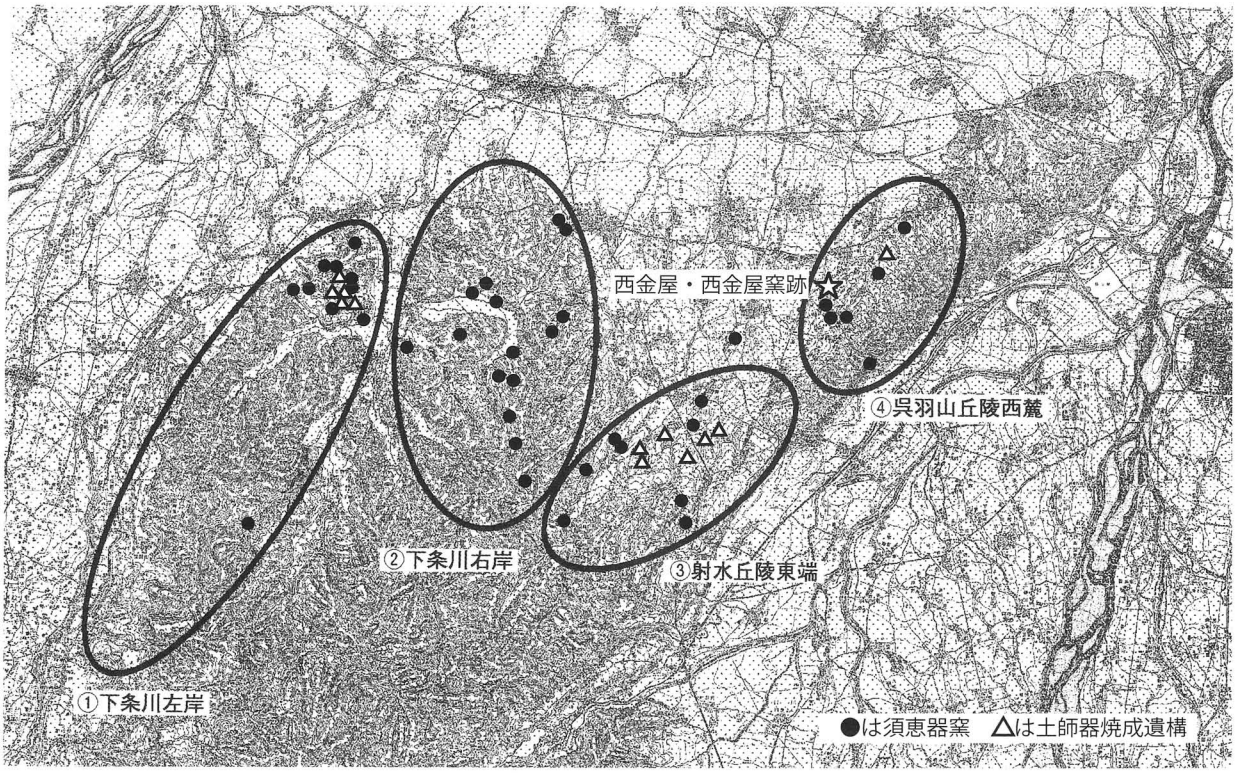
(2) 土師器焼成遺構 SX02

ＡＩａ２類焼成坑（横長志向型・開口型・楕円形）・床面強被熱タイプに分類される。出土した遺物は、Ⅳ$_2$期（8世紀後半～9世紀初頭）と考えられる。自然科学分析の結果、8世紀末頃の年代が得られており、編年の年代観とほぼ一致する。土師器の機種はほぼ椀であり、主に食膳具を生産していたと考えられる。土師器椀は赤彩椀の可能性があり、蛍光X線分析を行ったが顕著には赤彩の痕跡は確認できなかった。

(3) 土師器焼成遺構 SX03

ＡＩａ１類焼成坑に分類される。明確な被熱痕跡は見られなかったが、埋土に多量に焼土が混ざること、焼成粘土塊が出土することから土師器焼成遺構と考える。出土した遺物はⅢ期と考えられる。

以上、婦負郡域ではこれまで確認されていない奈良時代の土師器焼成遺構が確認されたこととなる。



第11図　射水丘陵～呉羽丘陵周辺の須恵器窯・土師器焼成遺構分布図（望月・鹿島2010に加筆）

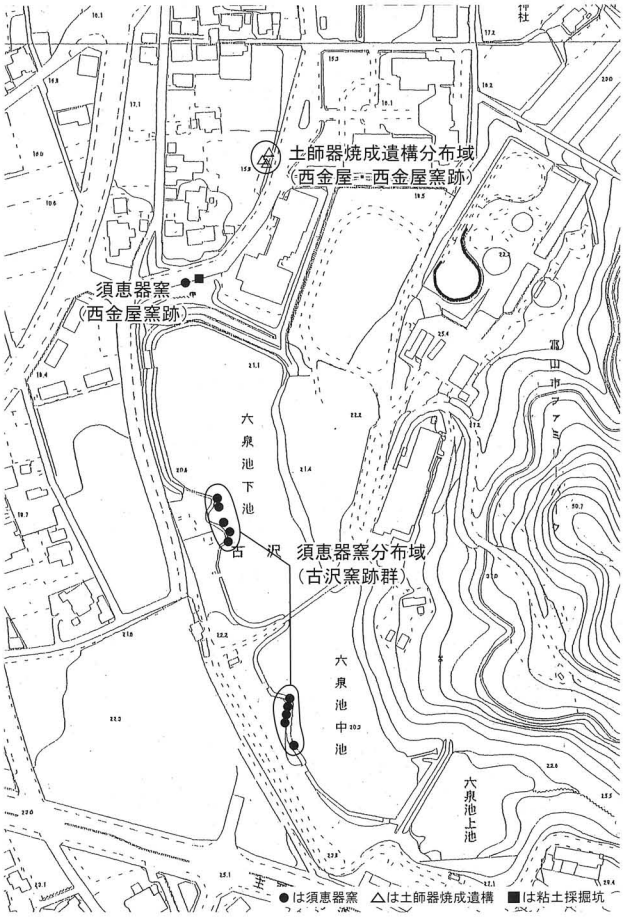
8世紀後半～9世紀前葉は、北陸地域では土師器焼成遺構普及期〔望月 1997 b〕と考えられており、今回確認された3基とも当該期に当たる。当該期の土師器焼成遺構はＡＩ類が主体を占めるが、ＡＩ類床面強被熱タイプも定量確認されている。今回の調査区では数は少ないが、ＡＩ類とともにＡＩ類床面強被熱タイプが同一面に併存していることを確認した。このＡ類の異なるタイプが顕在化する現象は、焼成器種や製品としての質を意識的に分けたような土師器焼成遺構の使われ方としての分離が想定されており、今回の調査では、煮炊具と食膳具という焼成器種の違いが考えられる。しかし、検討資料が少なすぎるため、資料の増加を持って再検討する必要である。

第２節　呉羽丘陵西麓の古代土器生産体制

今回の調査区西側で掘立柱建物や竪穴建物を検出しており、尾根上に工房ないしは工人集落を形成していたと考えられる。土師器焼成遺構は、それに付随する形で東側の緩斜面に形成している。また、本遺跡の南には、同じ尾根筋の急な斜面に同時期の須恵器窯が操業し、谷部に粘土採掘地が存在する（第12図）。

北陸地域における古代土器生産は、須恵器生産の窯場近くで土師器生産を行い、一体的な集約生産を確立することが特徴であり、8世紀中頃に「北陸型古代土器生産体制」が確立する〔望月・鹿島 2010〕とされており、今回の調査結果により、須恵器窯場（古沢窯跡群・西金屋窯跡）近くで土師器生産を行う「北陸型古代土器生産体制」が、8世紀中～末頃に呉羽丘陵西麓地域に確立していたと考えられる。

最後に調査に御助言御協力頂いた望月精司氏、富山大学酒井英男氏、金沢学院大学中村晋也氏に感謝の意を表する。　（堀内）



第12図　古沢窯跡群における8世紀中頃～9世紀前半の須恵器窯・土師器焼成遺構分布（1：5000）

参考文献

小松市教育委員会 2002『二ッ梨一貫山窯跡』
田嶋明人 1988「古代編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
富山県教育委員会 1991『南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1988『昭和62年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会 2000『西金屋窯跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2002『向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003『開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008『北押川Ｂ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅶ』
望月精司 1997 ａ・ｂ「第１章　土師器焼成坑の定義と型式分類・第２節　土師器焼成坑の分類」「第２章　各地域の土師器生産と土師器焼成遺構・第４節北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
望月精司・鹿島昌也 2010「第４部　窯業体制と生産組織・第３章　北陸の古代土器生産と窯・工房・工人集落」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－　窯跡研究会編』真陽社

Ⅱ　米田大覚遺跡

第１章　経　　過

第１節　調査に至る経緯

米田大覚遺跡は、昭和63年から平成３年に富山市教育委員会が実施した分布調査で確認した。平成５年３月発行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載し、埋蔵文化財包蔵地（№201021）として周知した遺跡である。現在の包蔵地面積は172,000㎡である。

当該地の周辺はかつて田畑であったが、近年宅地化が進み、住宅が建ち並ぶ。この一画において、平成23年６月23日、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の所在確認依頼があった。盛土造成はなされていたが、建物は未建築の場所であった。すぐ北側及び西側は平成７・８年度に分譲宅地造成に伴い4,600㎡を発掘調査しており、平安時代を中心とする豊富な遺構・遺物が確認されていた。当該地に遺跡の広がりが及ぶことは明らかだったため、工事主体者側と保護措置について協議を行ったが、地盤改良による遺跡の損壊が免れないことから、工事主体者の同意を得て地盤改良を行う範囲143.35㎡の本調査を行うこととなった。

第２節　調査の経過

発掘調査　発掘調査は、土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が常駐して調査の監理にあたった。

着手前に建築業者立会いのもと、調査を要する地盤改良範囲について確認を行った。

第13図　発掘調査風景

７月21日から重機掘削をはじめ、排土は調査区外へ搬出した。遺物包含層は須恵器・土師器を多く含むため、掘削には慎重を期した。翌22日から作業員を投入して重機掘削が終わった所から順次、遺物包含層掘削を開始した。遺物包含層掘削は７月27日に完了し、引き続き遺構検出作業に移った。この時点で、小規模な溝が縦横に延びる様子や細かな凹凸が多数みられることが確認できた。

遺構掘削は８月１日から行った。遺構検出で確認した遺構プランは、雨が降ると水没して見えなくなるため、調査区を一定の範囲で区切って再度遺構検出を行い、その後遺構掘削を行うという作業を北東から南西に向かって繰り返した。多くが浅い遺構で、出土遺物も少なかったが、遺構数が多いことと凹凸が激しいことから、思いのほか掘削に時間を要した。掘削を終えた遺構から断面図・平面図を作成した。８月24日に高所作業車を使って全景写真を撮影、翌25日に補足測量を行って調査を完了した。27日から搬出した排土を埋め戻し、30日に埋め戻し終了を確認した。

整理作業　整理作業は発掘調査終了後から平成24年３月29日まで行った。接合作業にあたっては、遺構出土遺物どうしはもちろん、遺構出土遺物と包含層出土遺物も接合する個体がみられたため確認を行った。遺構出土遺物は口縁部が残るものを中心にできるだけ図化するよう努めた。遺物写真撮影は４×５判を使用し、図化したものについて行った。墨書の写真についてはデジタル撮影を行った。これらの作業と平行して原稿作成を行い、平成24年３月30日に本書を刊行した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山県の平野は、東は北アルプス、南は飛騨高地、西は丘陵性山地に囲まれ、そこから富山湾へ流れ下る河川が形成している。県域の中央を北に向かって突き出る呉羽丘陵を境に東が呉東平野、西が呉西平野に分けられる。呉東平野はさらに、狭義の富山平野、新川平野、黒部平野などに細分される。このうち米田大覚遺跡が所在するのは、狭義の富山平野（以下、この狭義の範囲を富山平野と呼ぶ）内で、神通川と常願寺川の二大河川により形成され、西は呉羽丘陵に接している。

富山平野は、県域の北中部に位置し、北は富山湾に面する。とくに神通川下流域は富山市街地を擁して都市化・工業化が進む。地形的には、氾濫原が広がり、旧神通川の流路痕跡が幾筋も残って自然堤防や後背湿地がみられる。

遺跡が位置する米田町は、富山市街地から北東約 4kmにある。海岸からは約 3km内陸にあり、西約 1.5kmには神通川、東約 4kmは常願寺川が流れる氾濫原地帯である。米田町から南に約 2km、幅約 0.8 kmにかけては標高８～10ｍの微高地・自然堤防が広がり、周囲の低地より４～５ｍ程度高い。この微高地・自然堤防上に古代を中心とする遺跡が点在しており、米田大覚遺跡はその北端付近に位置する。調査地点の現標高は約 8.5 ｍ、遺構検出面は約 7.6 ｍである。

「米田町」の地名が示すとおり、遺跡地図登載時頃までは田畑が広がる地域であったが、近年は急速に宅地化が進み、住宅や工場が建ち並ぶ地域となっている。

第２節　歴史的環境（第 14 図）

米田大覚遺跡を中心として、神通川下流域から常願寺川左岸までの遺跡を概観する。

縄文時代前期は、この頃ピークを迎えた海進によって、遺跡は現在よりかなり内陸に立地していたことがわかっている。海進を示す一例として、神通川左岸の小竹貝塚は、現海岸線から約 4.5km内陸に位置している。海退が進んだ後期・晩期には海岸砂丘上に岩瀬天神遺跡や浜黒崎野田・平榎遺跡が現れる。前者は、晩期前半の「岩瀬天神式土器」を標識とする遺跡である。また、米田大覚遺跡が所在する微高地にも晩期の豊田・豊田城遺跡がある。

弥生時代前期の遺跡は低調で、中期中葉以降増え始める。富山県内全体を通してみたときも同様の傾向がある。前期は神通川左岸の打出遺跡や右岸の豊田・豊田城遺跡、豊田大塚・中吉原遺跡などが知られているが、散発的に遺構・遺物が確認される程度である。中期前葉に遺跡数はいったん減じ、中期中葉以降に増加する。打出遺跡や豊田大塚・中吉原遺跡など前期に存在した遺跡に加えて、新たに浜黒崎悪地遺跡、浜黒崎野田・平榎遺跡など海岸部にも立地するようになる。豊田・豊田城遺跡は、緑色凝灰岩、翡翠、管玉など玉作関係遺物の出土がある。弥生時代後・終末期になるとさらに遺跡数が増え、遺構・遺物も豊富になる。古墳時代前期まで継続する遺跡が多い。本遺跡の南東にあって豊富な玉作遺物が出土した宮町遺跡や、県内最多の鉄器出土があった神通川左岸の拠点集落である打出遺跡などはその代表である。

弥生時代終末期から古墳時代前期は、神通川左岸の段丘上にある百塚遺跡や百塚住吉遺跡において、方形周溝墓や前方後円 (方) 墳を含む古墳群が近年相次いで確認されている。このほか、時期不詳のものが多いが、呉羽丘陵上にも多数の古墳が存在する。本遺跡の南には前期の方墳であるちょうちょう塚古墳が独立して存在する。中期と後期は、古墳・集落ともに目立った遺跡は見られない。

米田大覚遺跡の中心時期となる奈良・平安時代は、史料にみえる施設などとの関わりが推定される遺跡がある。米田大覚遺跡で過去に発掘された建物群は、古代越中国の「新川郡衙」とみられている

1. 米田大覚遺跡　2. 打出遺跡　3. 四方北窪遺跡　4. 江代割遺跡　5. 四方荒屋遺跡　6. 四方背戸割遺跡　7. 今市遺跡
8. 岩瀬天神遺跡　9. 大村城跡　10. 日方江城跡　11. 千原崎遺跡　12. 蓮町遺跡　13. 飯野新屋遺跡　14. 宮町遺跡
15. 小西北遺跡　16. 豊田大塚・中吉原遺跡　17. 豊田・豊田城遺跡　18. ちょうちょう塚　19. 百塚住吉D遺跡　20. 八ヶ山A 遺跡
21. 八町Ⅱ遺跡　22. 百塚住吉遺跡　23. 百塚遺跡　24. 長岡八町遺跡　25. 北代遺跡　26. 長岡杉林遺跡　27. 富山城跡

第14図　米田大覚遺跡周辺の遺跡分布

（藤田 2004、富山市教委 2006）ほか、これに関連する遺跡として南約 1.1kmに位置する豊田大塚・中吉原遺跡がある。人面墨書土器、人形などの祭祀遺物が多数出土し、上記の新川郡衙の祭祀場と考えられている（堀沢 2003）。さらに、南東にある宮町遺跡は、平安時代の掘立柱建物群や道路があり、古代「志麻郷」に関わる遺跡の可能性が指摘されている。本遺跡の西に隣接する蓮町遺跡も『延喜式』にある「磐瀬駅家」とする説があるが（藤田 2004）、現在のところ目立った遺構は確認されていない。官的な性格を有するとみられている複数の遺跡の存在が想定され、奈良・平安時代には本遺跡周辺が重要な位置を占めていたことが推測できる。

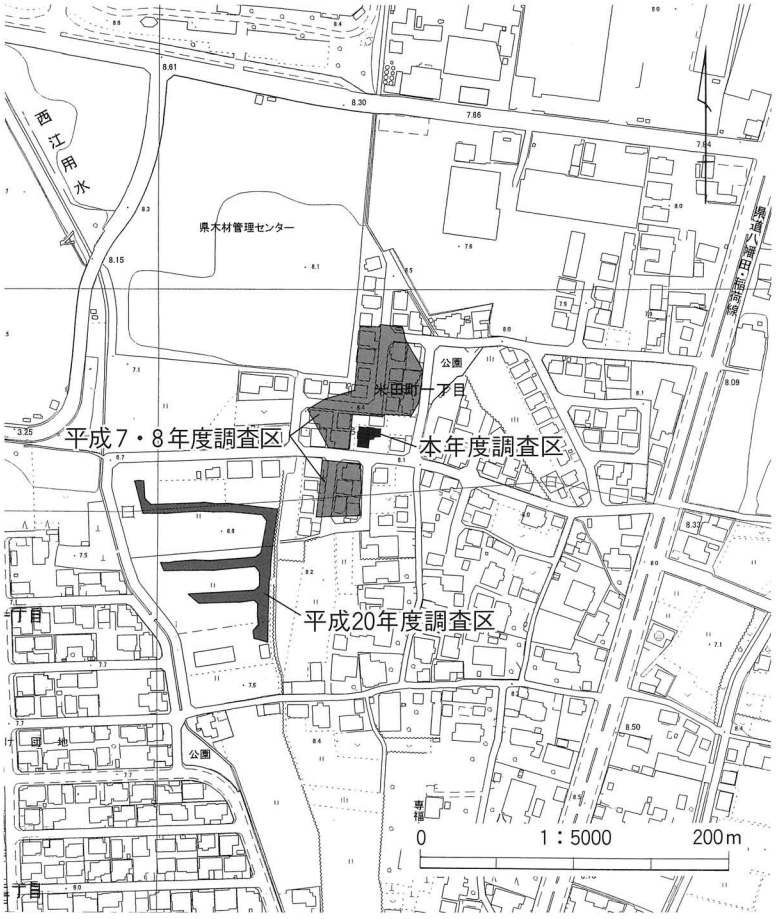
中世は、本遺跡では平成 20 年度の発掘調査で中世後期の屋敷跡が検出されている。同じく中世後期は、本遺跡北側の海岸近くに大村城、日方江城などの城館遺跡がある。また、神通川を挟んで左岸河口周辺は中世の遺跡が集中する。この辺りは、『廻船式目』にあげられた三津七湊のひとつである「越中岩瀬湊」の有力な候補地とされている。四方荒屋遺跡や打出遺跡などは中国製陶磁器や屋敷跡などがあり、港湾都市的な性格が考えられている（中世岩瀬湊調査研究グループ 2004）。

第３節　米田大覚遺跡における過去の調査

平成７・８年度と平成 20 年度の２度、宅地造成に伴う発掘調査を行っている。前者は遺跡範囲の中央付近で行った 4,600㎡の調査、後者は南西部で行った 1,869㎡の調査である（第 15 図）。

平成７･８年度調査（富山市教委 2006・第 24 図）　９世紀中頃を中心に、８世紀末から 10 世紀初頭までの時期幅がある。掘立柱建物 32 棟が検出され、４群に分けられる。南の一群は５×４間の廂付建物を核として 10 × 2 間の長舎建物などがＬ字に配置され、新川郡衙の郡庁域と推定されている。この北側にも棟方向を揃えた建物があり、郡衙に伴う館や厨家の可能性が指摘されている。208 点の墨書土器、緑釉陶器、風字硯など官衙的な遺物の出土が注目される。また、調査区のほぼ全域に小規模な溝が縦横に広がる。このうちの一部は道路跡とされる。

平成 20 年度調査（富山市教委 2009）　平成７・８年度調査区の南西に位置する。両調査区は最短部で約 20 ｍしか離れていないが、時期・遺構内容ともに様相が大きく異なる。平安時代の井戸３基や溝が確認されたものの、主体となるのは中世後期である。居館の区画溝とみられる方形にめぐる溝がある。出土遺物では銅製花瓶が特筆される。荘園「米田保」とのかかわりが指摘されている。



第15図　米田大覚遺跡調査区位置図

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査開始前に、対象地に世界測地系に基づく座標杭を設置した。

表土はバックホウで遺物包含層の上面まで除去した。遺物包含層掘削は、作業員がスコップ、ジョレンを使って行い、遺物が集中する地点では移植ゴテを使用した。包含層出土遺物は２～3m の範囲で一括して取り上げた。引き続き遺構検出を行ったところ、縦横に延びる溝や細かな凹凸が多数認められた。雨が降ると調査区が水没して検出した遺構がみえなくなるため、北東部から南西部にむかって部分的に再度遺構検出し、その範囲を遺構掘削するという作業を繰り返した。主な遺構については断面図をとり、写真撮影を行った。遺構出土の主な遺物は位置を記録し、その他は一括して取り上げた。完掘した遺構はトータルステーションを使用して縮尺 20 分の１で図面作成した。写真撮影は６×７判と 35㎜判を用い、全景写真は高所作業車にて実施した。

第２節　基本層序（第 16 図）

調査地は元は水田で、近年宅地造成の際に盛土された。調査当時の地表面の標高は約 8.5 ｍである。

調査区の四隅で土層図をとったが、いずれも同じ層序である。Ⅰ・Ⅱ層は暗褐色の造成盛土である。Ⅲ層は明灰色粘質シルトで水田耕作時の床土とみられる。Ⅳ層は黄褐色土である。Ⅴ・Ⅵ層が遺物包含層で、両方合わせて約 0.2 ｍの層厚がある。Ⅴ層は黒褐色、Ⅵ層は暗灰褐色を呈する。いずれも遺物を多く含む。Ⅶ層が橙褐色砂質土の地山である。ほとんどの遺構はⅦ層から掘り込まれているが、一部Ⅵ層から掘り込む遺構が認められた。前者の遺構覆土は暗灰褐色を呈するのに対し、後者の覆土は黒褐色を呈しており、厳密に同様ではないが、直上の遺物包含層の色調に似ている。地山の標高は約 7.65 ｍである。

地下水位が高く、夏季でも地山から 0.3m 程度掘った遺構では水を湛えた状態となる。

第３節　検出遺構（第 16 ～ 20 図）

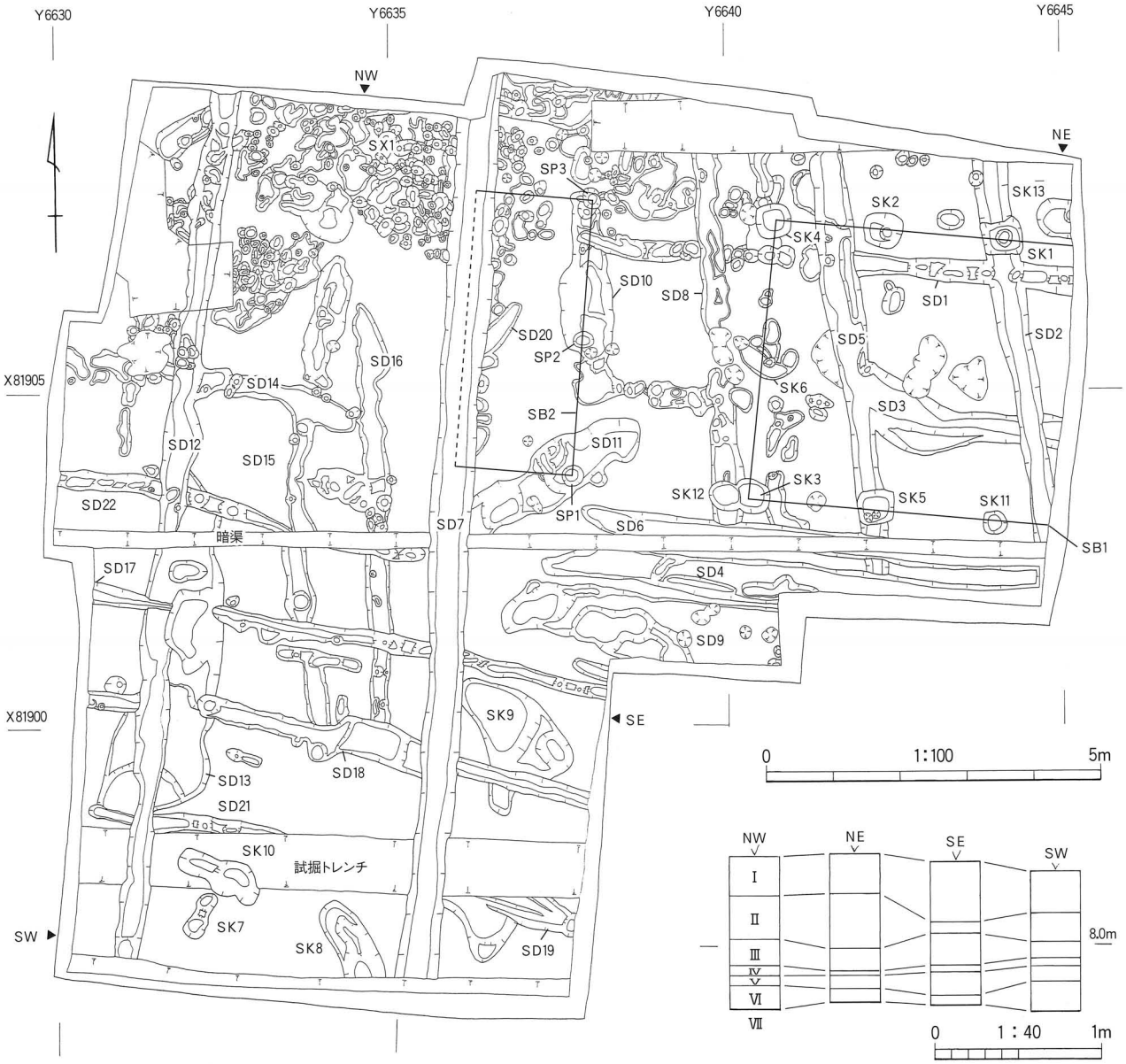
主な検出遺構は掘立柱建物２棟、土坑５基（掘立柱建物の柱穴を除く）、縦横に延びる小溝群である。主体となる掘立柱建物と小溝群は、掘立柱建物出土の遺物が乏しいため遺物から時期差を判断しがたいが、一部重複がみられている切り合いから判断すると掘立柱建物が古いとみている。SD7 はⅥ層から掘り込まれた遺構で、他の遺構より新しい。以下、主な遺構について記載する。

(1) 掘立柱建物

２棟ある。SB1 は梁行２間×桁行３間以上である。当初、SK6 と SK11 が浅く、形状も小型、いびつであることから柱穴でないと考え、南北２棟の建物になる可能性を考えたが、その他の柱穴の形態・規模が類似し、間隔もほぼ同じであること、軸方向も一致することから一つの建物と判断した。

また、SB2 の３基の柱穴（SP1 ～ 3）は SB1 の延長にあり、軸も一致するので SB1 の廂や軒支柱となることが考えられるかもしれないが、SB1 の柱間から 2.7 ｍ離れ、SB1 の柱間隔より 1.5 倍広いこと、また廂などとした場合、SP1 ～ 3 の深さが身舎となる SB1 の柱穴より 1.5 倍程度深くなりやや不自然であることから、ここでは別の建物として報告する。この場合、SB2 の西側の桁行は後世の SD7 の掘削によって失われたと考えられる。

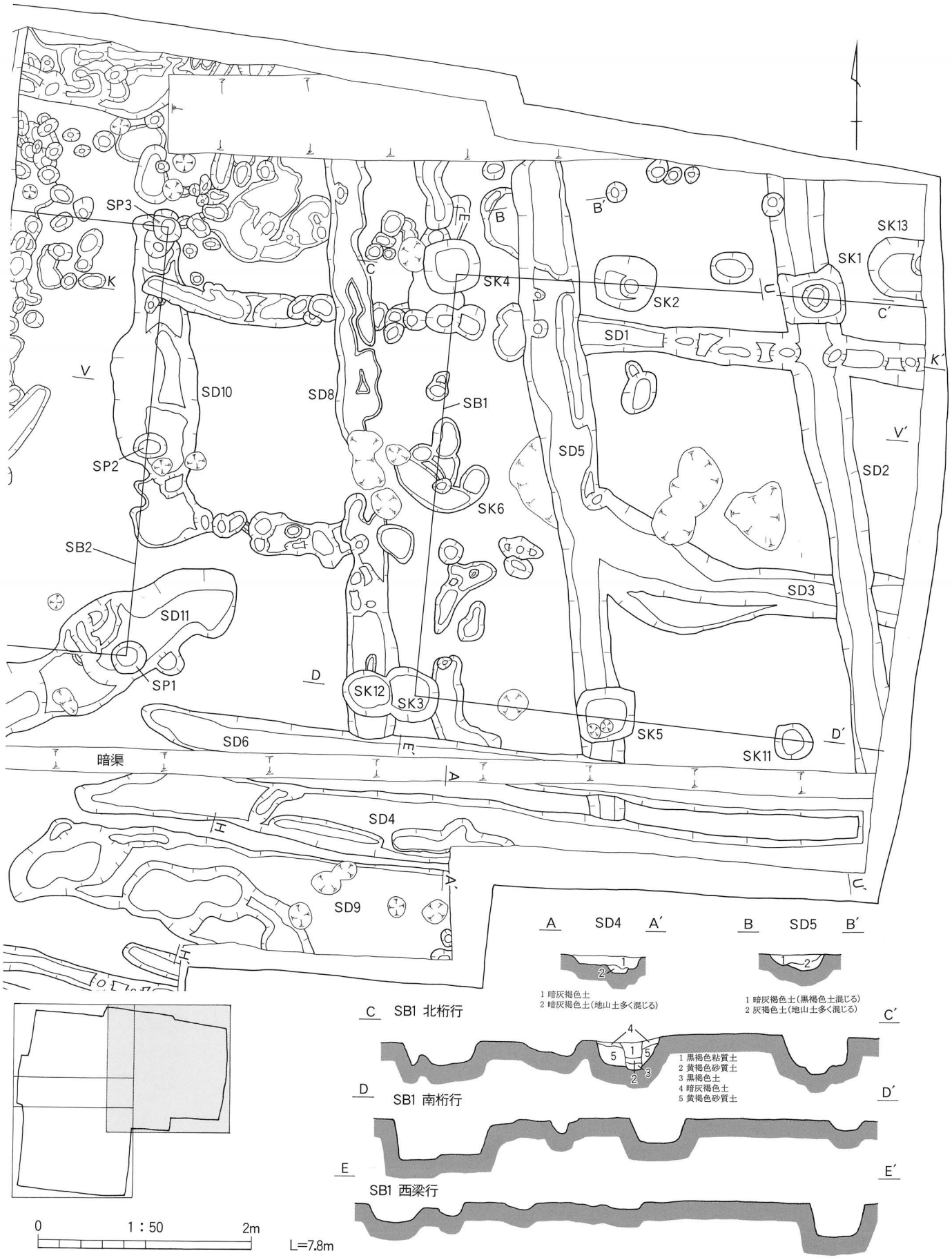
SB1（第 17 図）　調査区北東部に位置する。SK6 はいびつで、柱穴らしくないが、これを除外すると SK3 から SK4 まで 4.1 ｍの柱間となり、本遺跡における他の掘立柱建物と比べて極端に長くなるため、SK3 － SK6 － SK4 を梁行とした２×３間以上の建物とみる。軸の方位はＮ -5° - Ｅである。



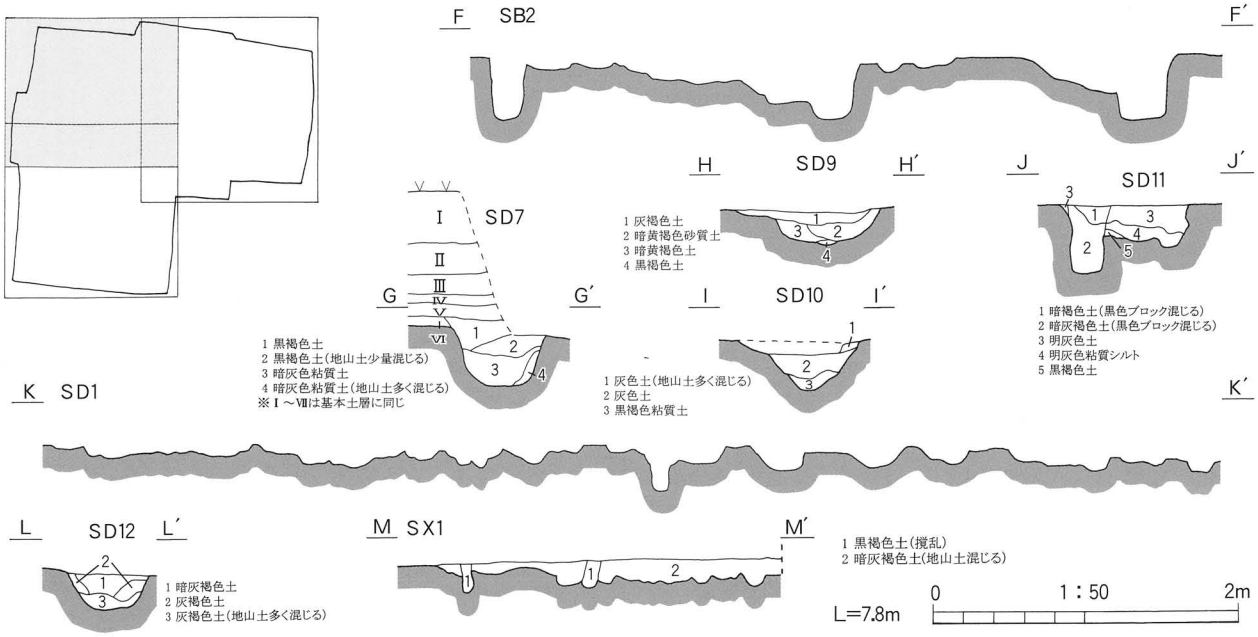
第16図　調査区全体図・基本層序図

SK6、SK11 以外の柱穴は隅丸方形で一辺 0.5 ～ 0.6 m程度、深さ 0.25 ～ 0.35 m程度である。SK1・2 は底面が円形に一段窪む。SK11 は一辺 0.35 m、深さ 0.1 mと小型である。SK6 は切り合いのためか複雑な形状を呈し、深さは約 0.1 mである。柱穴間の距離は北の桁行が 1.72m の等間隔、南の桁行が 1.80 mの等間隔である。梁行の間隔は約 2.08 mである。SK3 は SK12 を切る。この両者は規模・深さが似ており、掘り直しの可能性も考えられる。SK1・5 は、小溝群である SD2・5 と重複するが、遺構検出段階で柱穴を確認できなかったことから、SD2・5 より古いとみられる。SK2 から土師器の底部破片が出ているが、時期不詳である。

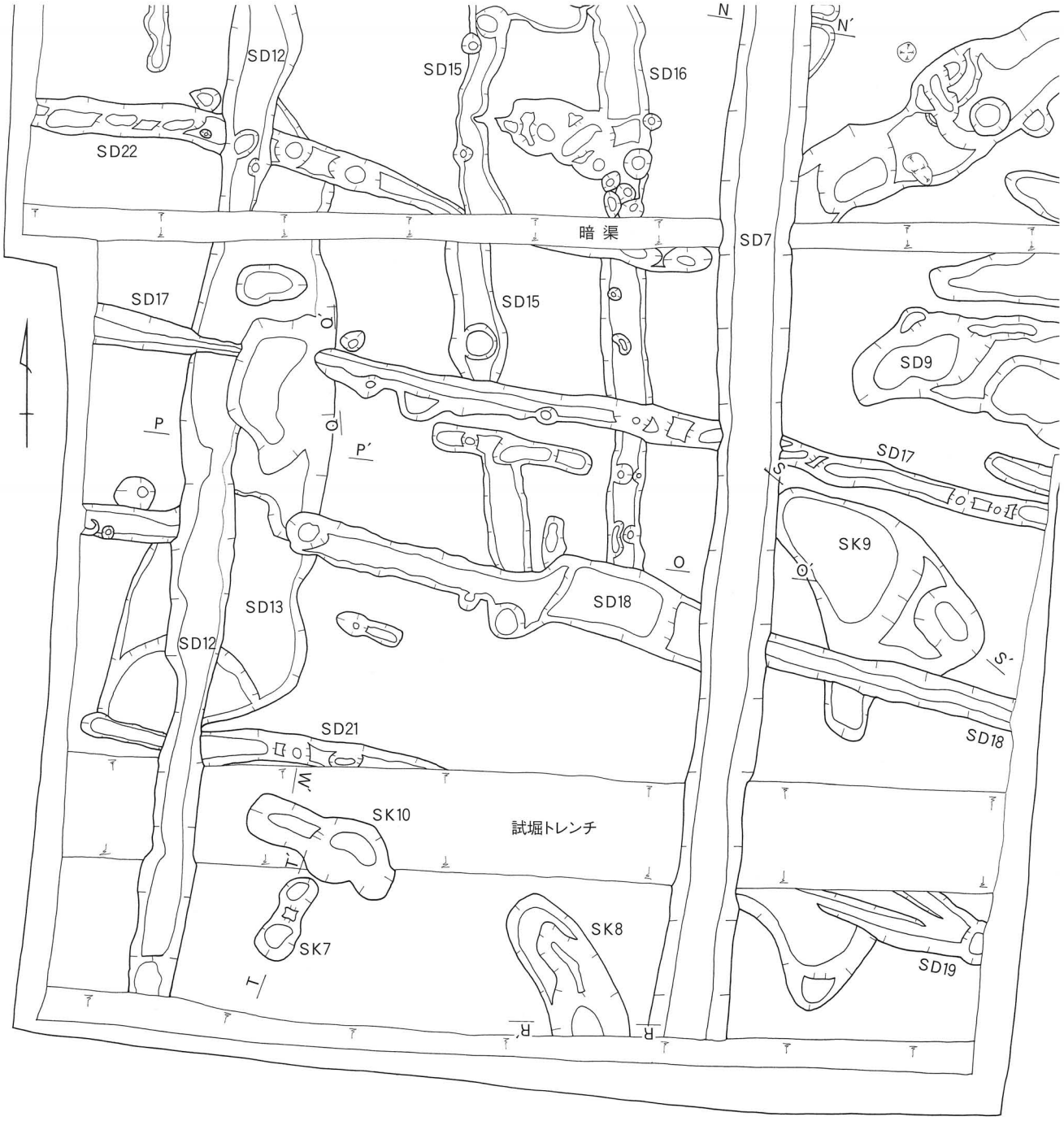
SB2（第 18 図）　調査区北中部、SB1 の西側に位置する。上述したとおり西側の桁行が SD7 により失われたとみて、本来は 1 × 2 間の掘立柱建物と考える。SP1・2・3 の 3 基が柱穴となり、桁行の柱間は 2.08 m、梁行の柱間は推定約 1.8 mである。軸の方位はN -5° - Eである。柱穴はいずれも径 0.25 ～ 0.30 m、深さ 0.35 ～ 0.40 mの規模である。出土遺物はない。

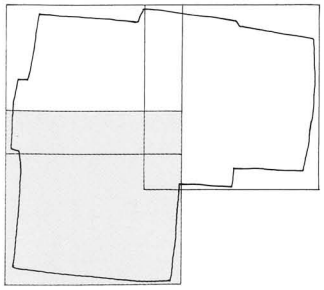


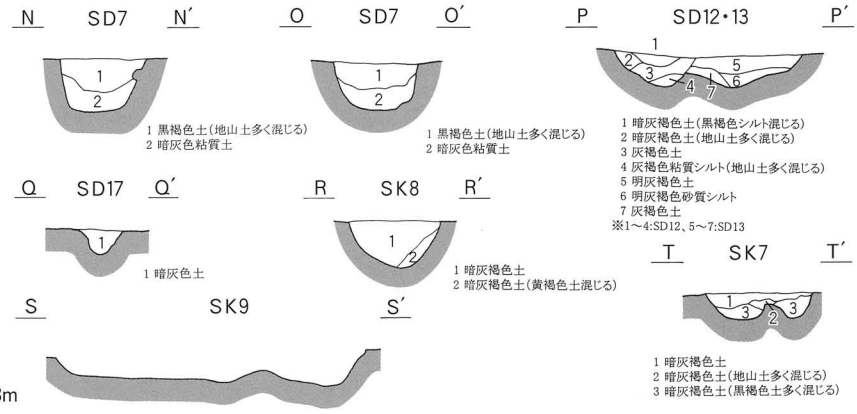
第17図　検出遺構平面図・断面図(1)



第18図　検出遺構平面図・断面図(2)

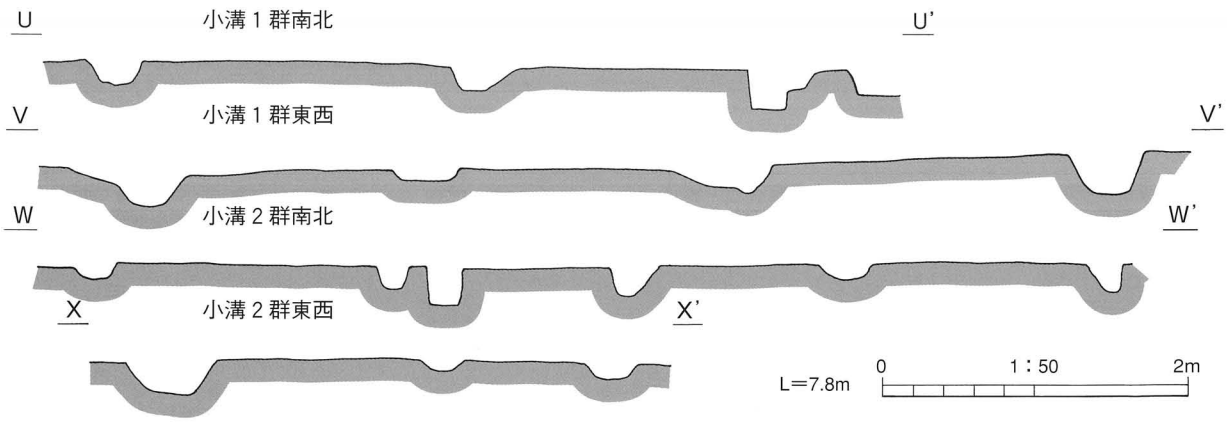






0　1：50　2m
L=7.8m

第19図　検出遺構平面図・断面図(3)



第20図　小溝群断面図

(2) 小 溝 群

小規模な溝が縦横に延び格子状となる。溝と表現しているものの、不規則な掘り込みが連続して掘られた結果、溝状にみえている部分もあり、溝の底面は凹凸が顕著である。溝の幅は0.2～0.6 m程度、深さは0.1 m前後と全体的に浅い。第４章３節で検討するように畠跡の可能性が高いと推定している。走行方向と途切れ具合から大きく２群に分けられると判断した。

１群（第17・20図）は、調査区北東部、SB1・SB2と同じ範囲にある溝である。SD1・3・6が東西方向、SD2・5・8・10が南北方向の溝を構成する。いずれも平行し、また東西方向の溝はSB2付近で途切れることで共通する。各溝は1.8 m前後の間隔が多く、狭いところで1.3 m、広いところで1.9 mのものがある。両方向の溝はやや斜交する。

２群（第18・19・20図）は、調査区西部を中心に広がる溝群である。SD14・22・17・18・21が東西方向、SD12・15・16が南北方向の溝となる。東西方向の溝は平行しているが、途切れ具合が異なり、SD17・18は東の調査区外まで延びる。各溝の間隔は1.3 m前後である。南北方向の溝は、間隔が不統一で、方向や途切れ具合もやや異なる。全体的に１群ほどは規則的でない。

SD4は１群の東西溝と途切れる位置が同じだが、SD6との間隔が狭い。２群のSD22の延長とも考えられる。規模や形状からみて、同じ性格を有する溝とみたい。

いずれの群も覆土は２層以上のところがあるが、基本は単層である。東西―南北方向の溝の切り合い関係については、SD1とSD2の交差点において前者が新しいことを確認したが、それ以外の場所では判断がつかなかった。この切り合いを重視するなら、１群では東西溝が新しいと考えられる。

(3) その他の溝

SD9（第17図）　SD4の南に接する。１群の東西溝と平行するが、幅が広い。検出長4.2 m、幅0.9 m以上、深さ約0.1 mである。底面は凹凸が激しい。

SD11（第17図）　調査区中央に位置する。検出長3.0 m、幅0.85 mである。深さは一定ではないが最深部で0.3 mである。他の溝がおおよそ正方位を指向するのに対して、斜めに延びる。SP1に切られる。

SD13（第19図）　調査区西部にある長さ5.1m、幅1.5 mの不整形な溝である。SD12に切られる。深さは約0.15 mであるが、底面は凹凸が顕著でピット状に深くなるところや段になるところがある。

SD7（第18・19図）　調査区の中央を南北に延びる。他の遺構と違い、基本層序のⅥ層から掘り込まれ、覆土も黒褐色を呈している。検出長13.5 m、幅0.5～0.7 m、掘り込み面からの深さ0.45 mである。逆台形状の断面形を呈し、底面の高さは北端が1cm高い程度で、ほぼ一定である。出土遺物の多くは須恵器・土師器であるが、一部かわらけや珠洲を含む。

(4) 土　坑

掘立柱建物の柱穴以外の土坑が5基ある。SK13以外は調査区南部で検出した。不整形で底面は凹凸が多い。また、溝はほぼ東西南北を指向するのに対し、これらの土坑は斜め方向となる。

SK7（第19図）　楕円形を呈する。長軸0.7 m、短軸0.32 m、深さ0.18 mである。

SK8（第19図）　調査区外へ延び溝となる可能性がある。検出長1.25 m、幅0.6 m、深さ0.3 mである。

SK9（第19図）　不整形を呈する。長軸2 m、短軸1.2 m、深さ0.25 mである。

SK10（第19図）　不整形を呈する。長軸1.3 m、短軸0.55 m、深さ0.25 mである。

SK13（第17図）　調査区北東部で検出した。幅0.58 m、深さ0.2 mである。

(5) その他の遺構（第18図）

SX1　調査区北西部で検出した。径0.1～0.2 m程度のピット状ないしは不規則な掘り込みが東西6 m、南北2 mの範囲に密集する。他の場所でもこうした小さなシミが散発的にみられたが、本遺構周辺は特に密度が高い。深さは0.1 m前後で、凹凸が激しい。覆土は単層で、地山の黄褐色土を含む。

第4節　出土遺物（第21～23図）

大半が平安時代の須恵器・土師器である。一部、中世の土器、近世の陶器等がある。残存率は5～30%が多く、良いものでも60%程度である。包含層出土遺物が相当量あり、遺構出土のものより量、遺存状態ともよい。墨書土器4点の出土が特記される。

SD4　1は須恵器杯Aの墨書土器である。外底面中央に「罡本」と書かれる。8画目は剥落で見えない。欠損部にもう一字ある可能性もある。回転ヘラ切り後、ナデを行う。2～5は須恵器杯である。いずれも口縁部は直線的に立ち上がる。焼成は3・5は堅緻、2・4はやや不良である。6は須恵器甕である。口縁部は外傾し、内端がわずかに引き出される。外面はナデによる凹凸が明瞭である。

SD5　7は須恵器杯Bである。高台は内端接地である。器壁は3㎜と薄い。8は須恵器杯蓋である。内面は強いナデにより凹凸の稜ができる。9は土師器甕である。口縁端部は引き出して丸くおさめる。

SD7　10～12は須恵器杯蓋である。10はつまみで、ボタン状を呈する。11は器壁が薄く、端部は丸い。12は復元径22cmの大型の蓋である。内外面とも滑らかなつくりである。焼成は不良である。13は須恵器杯Aである。14は土師器甕、15は長胴釜である。15は口縁端部を折り返して肥厚する。16は中世土師器である。口縁は内湾する。17は珠洲の片口鉢である。卸し目は2cmあたり11目である。外面の体部下端が強いナデにより凹む。

SD9　18は須恵器杯である。口縁は直線状に立ち上がる。

SD12　19は須恵器杯蓋である。つまみは扁平な宝珠形である。口縁端部は小さく垂下し、端部は尖り気味である。20・21は須恵器杯である。いずれも口縁部が小さく外反する。

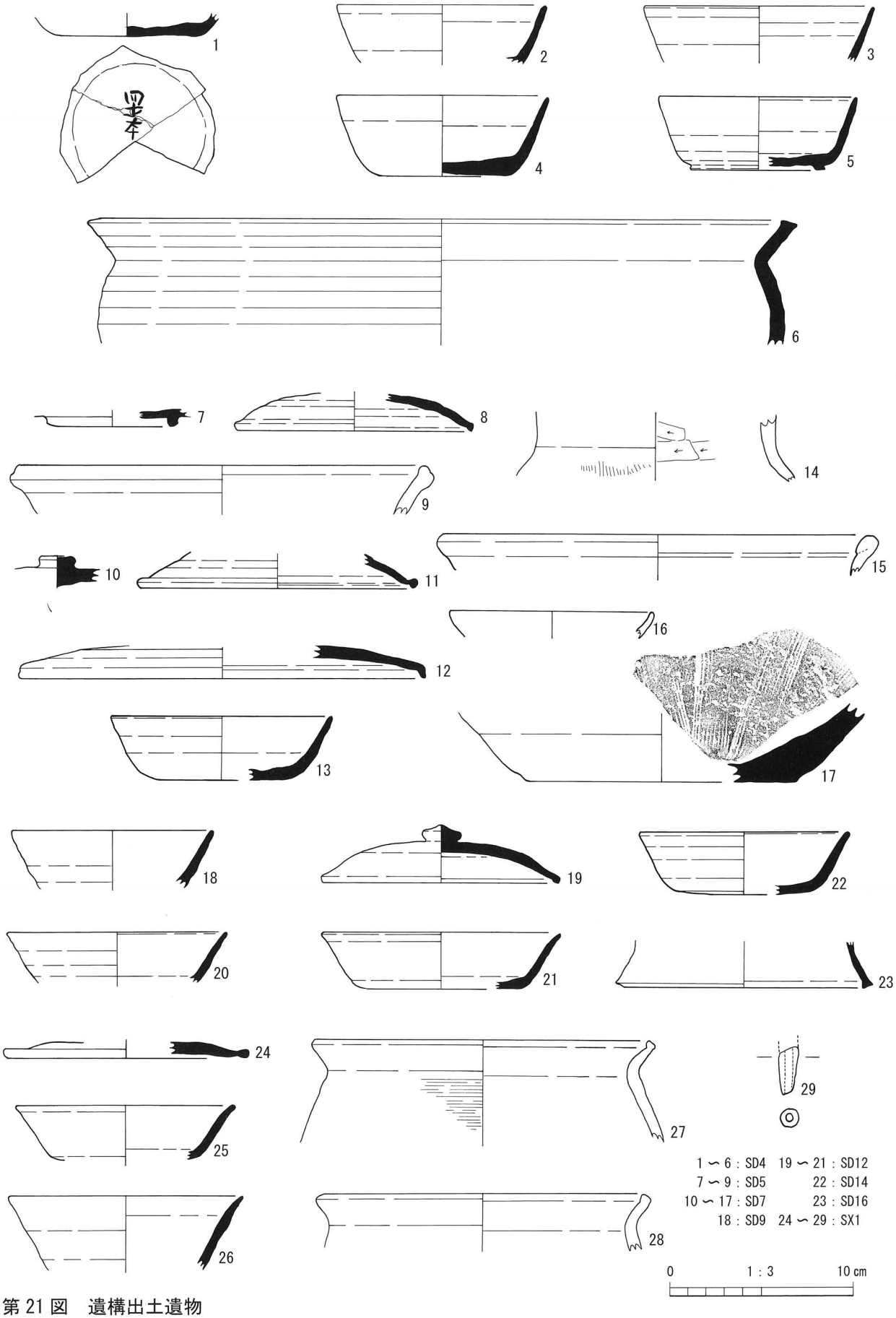
SD14　22は須恵器杯Aである。外底面は回転ヘラ切り痕が明瞭に残る。

SD16　23は須恵器の有台皿または椀の脚部と考えられる。端部は内端・外端を引き出す。内端接地である。内面は薄く降灰している。

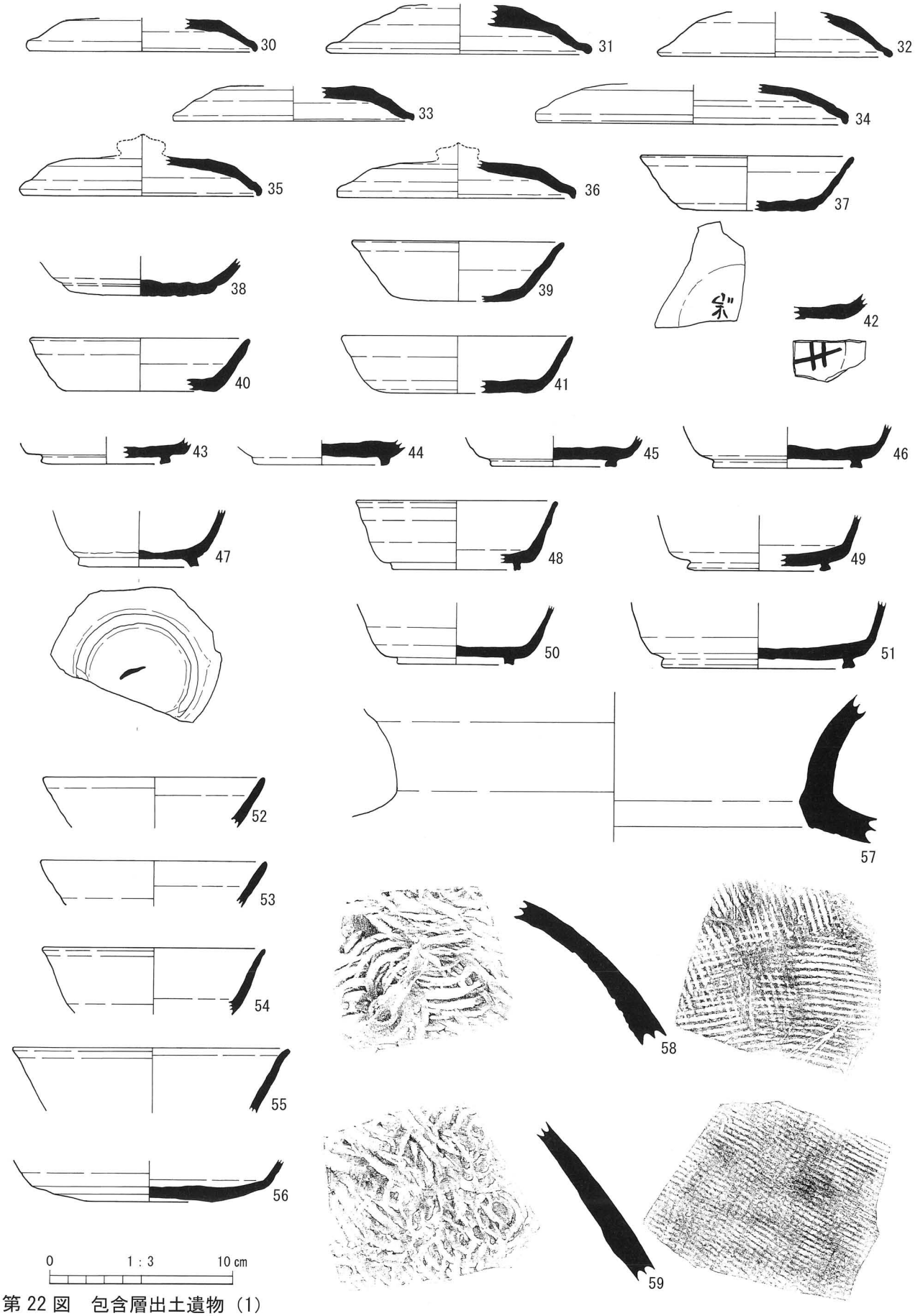
SX1　24は須恵器杯蓋である。つぶれて器高は低い。口縁端部は小さい。25･26は須恵器杯である。いずれも口縁部が小さく外反する。26は外面が薄く降灰し、器高は他に比べ高い。27・28は土師器短胴釜である。口縁端部を上方につまみ上げ、鈍い三角形状になる。29は土師質の土錘である。

遺物包含層　30～59は須恵器、60～72は土師器である。他に土錘が1点ある。

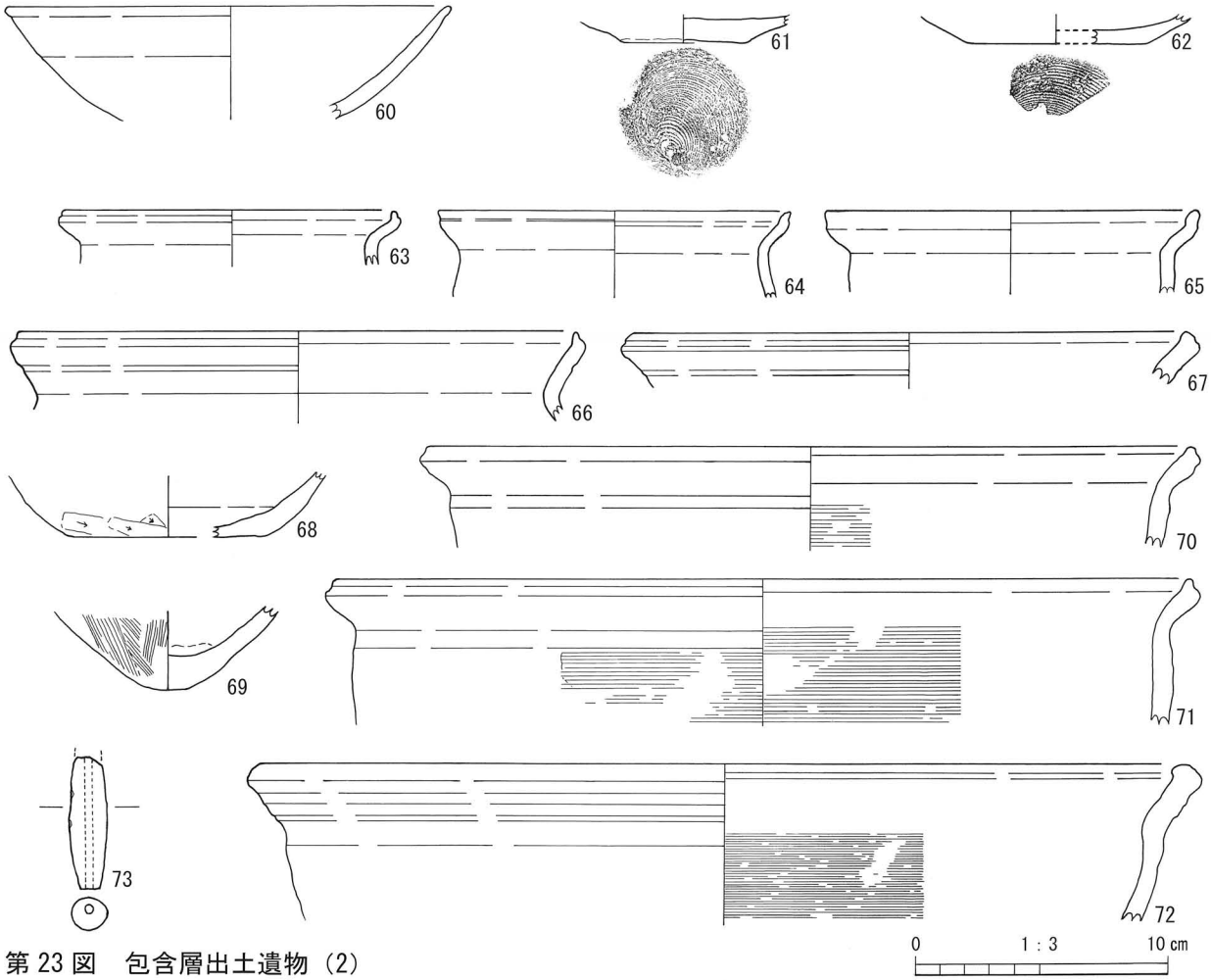
30～36は杯蓋である。口縁端部は、小さくつまみ出して、鈍い三角形状となるもの（30・33・34・36）、小さく丸いもの（31・32）、垂下してやや大きいもの（35）がある。31は天井部の器壁が段を


1 ～ 6 : SD4
7 ～ 9 : SD5
10 ～ 17 : SD7
18 : SD9
19 ～ 21 : SD12
22 : SD14
23 : SD16
24 ～ 29 : SX1
0
1 : 3
10 cm

第 21 図　遺構出土遺物



第 22 図　包含層出土遺物（1）



第 23 図　包含層出土遺物（2）

もって肥厚する。34 は復元口径 16.5cm を越える大型品である。35・36 はつまみが付いた痕跡がある。37 ～ 42 は杯 A である。口縁部は小さく外反する 37・39・40 と直線的に立ち上がる 41 がある。37 は外底面に「柴」の墨書がごく薄くみえる。また、42 は外底面の縁辺部に「井ヵ」の墨書がある。38 は外底面に渦巻状のヘラ切り痕が明瞭に残る。37 は薄手のつくりである。43 ～ 51 は杯 B である。48 のみ口縁部まで残るが、他は底部のみである。底径は 7cm前後が多いが、51 のように 10cmを超えるものもある。51 は内底面が平滑に仕上げられている。47 は底部外面に「一」の墨書がみえるが、右端が湾曲して下にのびる可能性もある。杯 A と杯 B を比べると、杯 B の方が概して焼成が良く、堅緻である。52 ～ 55 は杯である。52・53 は口縁部が直線的に立ち上がり、54・55 は小さく外反する。56 は杯 A である。体部は途中で角度を変え立ち上がる。胎土はにぶい褐色、緻密かつ丁寧なつくりで、他の須恵器と一見して異なる。57 ～ 59 は甕である。57 は頸部である。58・59 は体部で、59 の方が叩き目、当て具痕ともに緻密である。

60 ～ 62 は椀である。60 は口縁部が小さく外反する。61・62 は底部回転糸切りである。63 ～ 65 は短胴釜の口縁部である。63 は端部を上方につまみ上げる。64 は端部をつまみ上げて小さく外に折り返す。65 は端部を厚くつまみ上げて丸くおさめる。内面の口縁端部直下に幅 1cm程度の帯状に煤が付着する。66･67 は長胴釜の口縁部である。66 は端部を小さく尖り気味に、67 は厚く丸くつまみ上げる。68 は短胴釜の底部で外面はヘラケズリ調整である。69 は長胴釜で外面ハケメ調整である。70 ～ 72 は鍋である。口縁端部を小さくつまみ上げる 71・72 と、厚く丸くおさめる 73 がある。71 の内面は全体に煤が付着する。73 は土師質の土錘である。細辻真澄氏の樽形 a 類にあたる（細辻 2001）。

第２表　米田大覚遺跡出土遺物観察表

大きさの単位はcm。（　）は復元径。残存率は％表示。色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠。

番号	遺構	種別	細別	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	調整等	色調	備考
1	SD 4	須恵器	杯 A	—	7.6	—	30	やや密	やや良	外：底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y7/1　内：灰黄 2.5Y7/2	外底部に墨書「罡本」
2	SD 4	須恵器	杯	(11.3)	—	—	20	やや密	やや不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰7.5Y6/1　内：灰オリーブ 5Y6/2	
3	SD 4	須恵器	杯	(12.4)	—	—	10	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 10Y4/1　内：灰 7.5Y5/1	
4	SD 4	須恵器	杯 A	(11.4)	7.2	4.8	30	やや疎	不良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：にぶい黄橙 10YR7/4　内：浅黄 2.5Y7/3	
5	SD 4	須恵器	杯 B	(10.6)	7.4	4.0	40	密	良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切　内：回転ナデ	外：灰 7.5Y4/1　内：灰 7.5Y5/1	
6	SD 4	須恵器	甕	(38.6)	—	—	5	やや疎	やや不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 5Y7/2　内：暗灰黄 2.5Y5/2	
7	SD5	須恵器	杯 B	—	(7.1)	—	10	密	良	外：底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 7.5Y5/1　内：灰オリーブ 5Y6/2	
8	SD5	須恵器	蓋	(12.8)	—	—	20	密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰オリーブ 5Y6/2　内：灰オリーブ 5Y6/2	
9	SD5	土師器	甕	(22.0)	—	—	5	やや疎	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：にぶい橙 7.5YR6/4　内：にぶい橙 7.5YR6/4	
10	SD7	須恵器	蓋	—	—	—	10	やや密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 5Y6/1　内：灰 10Y5/1	ボタン状つまみ
11	SD7	須恵器	蓋	(14.9)	—	—	10	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 N6　内：灰 N6	
12	SD7	須恵器	蓋	(22.0)	—	—	10	やや密	不良	外：回転ナデ、天井回転ヘラ削　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y8/1　内：灰白 2.5Y8/1	
13	SD7	須恵器	杯 A	(12.2)	(6.8)	3.5	40	やや密	不良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切　内：回転ナデ	外：灰黄 2.5Y7/2　内：灰黄 2.5Y7/2	
14	SD7	土師器	甕	—	—	—	5	やや密	やや良	外：ナデ、ハケ目　内：ヘラ削	外：にぶい黄橙 10YR7/4　内：にぶい黄橙 10YR7/4	
15	SD7	土師器	長胴釜	(23.2)	—	—	細片	やや密	良	外：回転ナデ	外：にぶい黄橙 10YR7/3　内：にぶい黄橙 10YR7/3	
16	SD7	中世土師器		(10.9)	—	—	5	密	やや良	磨滅	外：浅黄橙 10YR8/3　内：浅黄橙 10YR8/3	
17	SD7	珠洲	片口鉢	—	(14.6)	—	5	やや疎	やや不良	外：回転ナデ	外：灰黄 2.5Y6/2　内：浅黄 2.5Y7/3	卸し目 2cm当たり 11 目
18	SD9	須恵器	杯	(10.8)	—	—	10	やや疎	やや不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y7/1　内：灰白 2.5Y7/1	
19	SD12	須恵器	蓋	(12.8)	—	3.2	20	密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 5Y5/1　内：灰 5Y5/1	扁平な宝珠形つまみ
20	SD12	須恵器	杯	(11.8)	—	—	5	やや疎	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰オリーブ 5Y6/2　内：灰オリーブ 5Y6/2	
21	SD12	須恵器	杯 A	(12.9)	(8.4)	3.1	10	やや密	やや良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ	外：灰 7.5Y6/1　内：灰 7.5Y6/1	
22	SD14	須恵器	杯 A	(11.4)	(7.5)	3.4	40	やや密	やや良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 5Y6/2　内：灰 5Y6/2	
23	SD16	須恵器	有台椀 or Ⅲ	—	(14.0)	—	5	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 N7　内：灰 5Y6/1	内面降灰
24	SX 1	須恵器	蓋	(13.1)	—	—	30	やや密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 5Y5/1　内：灰 5Y5/1	潰れている
25	SX 1	須恵器	杯	(11.8)	—	—	10	やや密	不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 7.5Y8/1　内：灰白 7.5Y8/1	
26	SX 1	須恵器	杯	(12.8)	—	—	20	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：暗灰 N3　内：灰 N5	外面降灰
27	SX 1	土師器	短胴釜	(18.2)	—	—	5	やや密	やや良	外：体部カキ目　内：回転ナデ	外：にぶい橙 7.5YR7/3 内：にぶい橙 7.5YR7/4	
28	SX 1	土師器	短胴釜	(17.4)	—	—	5	やや密	やや不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい褐 7.5YR5/3	
29	SX 1	土錘		径 1.1	—	—	50	密	良		外：暗灰 N3　内：灰 N5	
30	包含層	須恵器	蓋	(12.8)	—	—	10	やや密	良	外：回転ナデ、天井回転ヘラ削　内：回転ナデ	外：灰 N5　内：灰 N6	
31	包含層	須恵器	蓋	(14.0)	—	—	10	密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：オリーブ灰 2.5GY6/1　内：オリーブ灰 2.5GY6/1	
32	包含層	須恵器	蓋	(12.6)	—	—	20	やや密	不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y8/2　内：灰白 2.5Y8/2	
33	包含層	須恵器	蓋	(12.8)	—	—	10	やや密	やや良	外：回転ナデ、天井回転ヘラ削　内：回転ナデ	外：黄灰 2.5Y6/1　内：黄灰 2.5Y6/1	
34	包含層	須恵器	蓋	(16.6)	—	—	30	密	良	外：回転ナデ、天井回転ヘラ削　内：回転ナデ	外：黄灰 2.5Y6/1　内：黄灰 2.5Y6/1	
35	包含層	須恵器	蓋	(12.6)	—	—	20	密	良	外：回転ナデ、天井回転ヘラ削　内：回転ナデ	外：オリーブ灰 5GY5/1　内：青灰 10BG5/1	つまみ欠損
36	包含層	須恵器	蓋	(12.8)	—	—	10	密	やや良	外：回転ナデ、天井回転ヘラ削　内：回転ナデ	外：灰オリーブ 5Y6/2　内：灰 N5	つまみ欠損
37	包含層	須恵器	杯 A	(11.4)	(7.4)	3.0	20	やや密	やや不良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y7/1　内：灰白 2.5Y7/1	外底部に墨書「柴」
38	包含層	須恵器	杯 A	—	(7.8)	—	40	やや疎	不良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y8/1　内：灰白 2.5Y8/1	底部のヘラ切痕が顕著
39	包含層	須恵器	杯 A	(11.5)	(6.0)	3.3	20	やや密	不良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 10YR8/2　内：灰白 10YR8/2	
40	包含層	須恵器	杯 A	(11.8)	(8.3)	2.9	20	やや疎	やや不良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切　内：回転ナデ	外：灰白 5Y7/1　内：灰白 5Y7/1	
41	包含層	須恵器	杯 A	(12.7)	(7.5)	3.1	30	密	良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 N6　内：灰 10Y6/1	
42	包含層	須恵器	杯 A	—	—	—	5	やや密	やや良	外：底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰オリーブ 5Y6/2　内：灰 5Y6/1	外底部に墨書「井カ」
43	包含層	須恵器	杯 B	—	(7.0)	—	30	密	良	外：底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 10Y5/1　内：灰 7.5Y6/1	
44	包含層	須恵器	杯 B	—	(7.2)	—	20	やや密	やや良	外：底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 7.5Y5/1　内：灰 7.5Y5/1	
45	包含層	須恵器	杯 B	—	7.0	—	50	密	良	外：底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 5Y6/1　内：褐灰 10YR6/1	外面は底部以外に降灰
46	包含層	須恵器	杯 B	—	(8.2)	—	40	密	やや良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ	外：灰 N5　内：灰 5Y6/1	
47	包含層	須恵器	杯 B	—	6.6	—	60	密	良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 5Y6/1　内：灰オリーブ 5Y6/2	外底部に墨書「一カ」
48	包含層	須恵器	杯 B	(10.8)	(7.0)	3.8	20	やや密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：オリーブ灰 2.5GY6/1　内：灰オリーブ 5Y6/2	
49	包含層	須恵器	杯 B	—	(7.8)	—	30	やや疎	やや良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 2.5Y7/1　内：灰黄 2.5Y6/2	
50	包含層	須恵器	杯 B	—	(6.4)	—	40	やや密	やや良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰 N5　内：灰オリーブ 5Y6/2	
51	包含層	須恵器	杯 B	—	10.4	—	50	密	良	外：回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ　内：回転ナデ	外：灰白 5Y7/1　内：灰 5Y5/1	
52	包含層	須恵器	杯	(11.9)	—	—	5	やや密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰オリーブ 5Y5/2　内：灰オリーブ 5Y6/2	
53	包含層	須恵器	杯	(12.2)	—	—	10	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：黄灰 2.5Y6/1　内：黄灰 2.5Y6/1	
54	包含層	須恵器	杯	(12.0)	—	—	10	密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 7.5Y6/1　内：黄灰 2.5Y6/1	
55	包含層	須恵器	杯	(14.8)	—	—	5	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 N4　内：灰 N6	
56	包含層	須恵器	盤	—	(6.8)	—	30	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰 N5　内：褐灰 7.5YR5/1	非常に堅緻
57	包含層	須恵器	甕	—	—	—	5	やや密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ、体部当て具	外：灰 N6　内：灰 5Y5/1	
58	包含層	須恵器	甕	—	—	—	5	やや密	不良	外：叩き目　内：当て具	外：灰白 2.5Y8/2　内：灰白 2.5Y8/1	
59	包含層	須恵器	甕	—	—	—	5	やや密	良	外：叩き目　内：当て具	外：灰 N6　内：灰 5Y6/1	
60	包含層	土師器	椀	(17.5)	—	—	30	やや疎	やや不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：にぶい黄橙 10YR7/3　内：浅黄橙 10YR8/3	
61	包含層	土師器	椀	—	5.0	—	10	やや疎	良	外：底部回転糸切り	外：にぶい黄橙 10YR7/2　内：灰黄褐 10YR6/2	
62	包含層	土師器	椀	—	(8.0)	—	5	やや密	やや良	外：底部回転糸切り	外：浅黄橙 10YR8/3　内：灰白 2.5Y8/2	
63	包含層	土師器	短胴釜	(13.0)	—	—	細片	やや密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：灰黄褐 10YR6/2　内：にぶい黄橙 10YR7/3	
64	包含層	土師器	短胴釜	(13.9)	—	—	5	やや密	やや不良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：淡橙 5YR8/4　内：淡橙 5YR8/4	
65	包含層	土師器	短胴釜	(14.7)	—	—	5	やや密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：明褐灰 5YR7/2　内：にぶい黄橙 10YR7/2	口縁内面に帯状に煤
66	包含層	土師器	長胴釜	(22.0)	—	—	細片	やや密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：にぶい赤褐 5YR5/3　内：にぶい橙 5YR7/4	
67	包含層	土師器	長胴釜	(22.0)	—	—	細片	やや密	やや良	外：回転ナデ　内：回転ナデ	外：にぶい黄橙 10YR6/3　内：浅黄橙 10YR8/3	
68	包含層	土師器	短胴釜	—	(7.8)	—	5	やや密	やや良	外：ヘラ削　内：ナデ	外：淡赤橙 2.5YR7/3　内：にぶい黄橙 10YR6/3	
69	包含層	土師器	長胴釜	—	—	—	5	やや密	やや良	外：ハケ目	外：灰黄褐 10YR6/2　内：灰黄 2.5Y6/2	
70	包含層	土師器	鍋	(30.4)	—	—	5	密	良	外：回転ナデ　内：回転ナデ、体部カキ目	外：にぶい橙 5YR7/3　内：にぶい黄橙 10YR7/2	
71	包含層	土師器	鍋	(34.0)	—	—	5	密	良	外：回転ナデ、体部カキ目 内：回転ナデ、体部カキ目	外：浅黄橙 10YR8/4　内：にぶい黄橙 10YR7/3	内面に煤
72	包含層	土師器	鍋	(37.0)	—	—	5	密	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ、体部カキ目	外：灰黄褐 10YR6/2　内：にぶい黄褐 10YR5/3	
73	包含層	土錘		径 1.4	—	—	80	密	良		外：にぶい黄橙 10YR7/2　内：にぶい黄橙 10YR7/2	

第４章　総　　括

第１節　遺跡の変遷と性格

本調査区の北・西・南側は平成７・８年度に調査し、32棟の掘立柱建物が検出されている。特に南調査区の建物群は、規模が大きく整然とした配置を示す（第24図）。廂を有する中心建物を正殿、その東に脇殿、西にある長舎建物の３棟がＬ字形の配置をとるとして、これを山中敏史氏（山中2004）の郡庁類型Ｖ類に相当すると指摘した（富山市教委2006）。また、この裏手にあたる北調査区でも建物がいくつかのまとまりになって存在する。これらの建物群と官衙的な出土遺物から、本遺跡を新川郡衙と推定している（藤田2004、富山市教委2006）。

こうした理解を踏まえながら本調査区の遺構の変遷と性格を検討する。

本調査区の遺構の主体をなすのは掘立柱建物と小溝群である。先後関係から掘立柱建物が古いとみている。平成７・８年度調査区でも掘立柱建物と重複する小溝群を検出している。報告書ではその先後関係に触れていないが、調査担当者は同じく掘立柱建物が古いとみている。小溝群出土の遺物は、田嶋明人氏による編年（田嶋1988）に拠るとＶ期、９世紀前半頃と考えられる。掘立柱建物の帰属時期が問題となるが、有意な出土遺物がないため特定できない。ただし、平成７・８年度調査区の建物群は９世紀中頃を中心とし、８世紀末から10世紀初頭まで３期以上の変遷を推測している（富山市教委2006）ことから、本調査区の掘立柱建物も、小溝群より大きく遡ることはないとみられる。SB1とSB2は軸が一致し、配置も関連が認められることから同時期とみてよい。包含層出土遺物も多くは９世紀前半におさまる。唯一Ⅵ層から掘り込まれるSD7は、新旧の遺物が混在しているが、珠洲が吉岡康暢氏の編年のⅢ～Ⅳ１期（吉岡1994）にあたり、13世紀頃に下る可能性がある。

したがって、大きくみると、９世紀前半頃に掘立柱建物SB1、SB2があり、その直後に小溝群が掘削、その後時間をおいて13世紀頃にSD7が掘られたという変遷が考えられる。

平成７・８年度南調査区の郡庁域とされる地点より北側にも建物がいくつかのまとまりで存在している。具体的な性格は不明ながら、郡衙に関係する建物と考えられている（富山市教委2006）。本調査区のSB1・SB2もこの一画に位置し、軸が一致することから、何らかのかかわりを持った付帯施設とみるのが妥当であろう。

小溝群は、後述するように畠跡と推定した。掘立柱建物の廃絶後、それほど時期をおかずに掘削されたと考えられる。同様の溝群は、平成７・８年度調査区にも広がりがあることから、広範囲にわたって耕作が行われたことがわかる。郡衙の郡庁域とされる平成７・８年度南調査区の建物群は、９世紀中頃を中心として３期以上の変遷があり、長期にわたることが推測される。今回調査区の小溝群は９世紀前半頃と推定されることから、建物群と畠は併存していた可能性が高い。小溝群が、南調査区の建物集中域には及んでいないことからも、両者が無関係に存在したのでないことを裏付ける。したがって、郡衙の中心域（郡庁）の裏手にあたる範囲は、全時期を通じて郡衙関連の建物が建つ区域だったのではなく、９世紀前半のある時期は畠としての利用があったとみられる。

13世紀頃と推定したSD7は区画溝の可能性を考えたい。本調査区の南西で行われた平成20年度調査で、「L」字や「コ」字に屈曲した中世後期の屋敷地と推定される溝を検出した（富山市教委2009）。SD7は北側の平成７・８年度調査区に続いている（第24図のSD04）ようにみえるが、SD04は古代の道路跡とあるので、本調査区SD7とは異なる可能性が高い。とすると、調査区外で途切れるか屈曲すると考えられる。区画溝とするなら、その内部に同時期の建物等が存在しないので解釈に難を残すが、削平によって区画溝の下部のみが残ったとみたい。

第 24 図　平成 7・8 年度調査区と本年度調査区全体図

第２節 「罡本（おかもと）」墨書土器について

平成７・８年度調査では208点の墨書土器が出土した。富山県内では富山市任海宮田遺跡、射水市北高木遺跡に次いで多い。人名や役職、施設名や場所、物品、則天文字などがある。今回の調査では、「罡本」、「柴」、「井ヵ」、「一ヵ」の４点の墨書土器が出土した。平成7･8年度調査で「井」は最も多く、可能性のあるものを含めて35点がある。これは呪符記号の可能性が説かれている（富山市教委2006）。「柴」も７点が出土している。「罡本」墨書土器は、今回が初めての出土である。そこでこれについて若干検討を加えたい。

「罡本」で最初に想起されるのが、『倭名類聚抄』にある婦負郡の郷名「罡本」である（京大文学部1968）。訓は「乎加毛止」とする。婦負郡は新川郡の西に接する神通川左岸を中心とした地域である。この郷の比定地については諸説ある。『三州志』は「若しくは山本か」とし、近世における長沢郷の山本村にあてる（平凡社1994）。『地名辞書』、『地理志料』は、現在の富山市四方以南の神通川河口左岸地域、近世の駒見郷、倉垣荘の範囲に比定している。藤田富士夫氏は、米田大覚遺跡の南西約10kmにある神通川左岸の旧速星村から旧鵜坂村近辺を想定した（藤田2002）。このようにいくつかの説が唱えられているものの現状ではいまだ確証は得られていない。

どこに比定されるかはともかくとしても、婦負郡の郷名とみられる墨書土器が新川郡内で見つかっていることは重要であろう。郡域を越えた人・物の移動やつながりあったことを具体的に示す資料となりうる。本遺跡が拠点となる重要な位置を占めていたことが推測でき、郡の中心地としての新川郡衙の蓋然性をより高めることとなろう。しかし、この「罡本」が『倭名類聚抄』にある罡本郷とは別の地名を指している可能性もある。この場合、「罡本」の語義を考えると、「岡のふもと」から起きたと考えられ（志村編2008）、このような地形が平野に位置する本遺跡近辺に存在したとは考えにくい。やはり本遺跡から離れた地域が想定され、郷域や郡域を越えたつながりがあったことを示す。

なお、「罡本」墨書土器は、石川県羽咋市（旧志雄町）杉野屋専光寺遺跡でも出土例がある（志雄町教委1998）。羽咋郡にも罡本郷があり、こちらも比定地は定かでないとされるものの、墨書はこの郷を指している可能性がある。遺跡は宗教行為が行われた「東院寺」の一部である可能性が説かれ、村落規模にとどまらない郷・郡を越えた関係がみられるという。遺跡の性格こそ米田大覚遺跡とは異なるが、ここでも他の行政区画とのつながりを推測できる特殊な施設という点では、「罡本」墨書土器の意味するところは似ている。

第３節　畠跡と推定される小溝群について

本調査区で検出した小溝群と同様の遺構は県内の他の遺跡でも度々検出され、畠跡と解されることが多い。ただ、その溝が畠跡のどの部分にあたり、どのような行為によって残されたものかを具体的に論じたものは多くないように思われる。今回の調査では畠と断定する証拠があるわけではないが、以下で検討するように畠跡とされる特徴を備えている。このことを積極的に評価して報告するものである。

小規模な溝が、一定間隔をもって、同一方向へ平行する溝群については、佐藤甲二氏が仙台市域の調査事例をとおして詳細に検討し、畠の耕作痕と認定した（佐藤1998・2000）。その特徴として13の指標をあげているが、本調査区の小溝群はほぼその特徴を有している。佐藤氏の指摘は、畝や耕作土が残された確実に畠と呼べるものの検討を踏まえて導かれた結果であるから、これと同様の特徴を有する本遺構も畠跡と認めるのが最も妥当性があると思われる。

佐藤氏はさらに、耕作痕の成因について４つの可能性を挙げている。①天地返し痕、②根菜類用畝

床痕、③桑植栽痕、④畝間痕である。このうち④畝間痕については、通常畝間は当時の地表面とほぼ同じかやや上位に位置するため、深いところで地山を20cm程度掘り込む本遺跡例は、その可能性は低いとみてよい。①～③については耕作土や畝が残存していない状況では特定が難しい。しかし、「天地返し」の場合、地力を回復させるためという目的に照らすと、前回のものと重複しては効果が少なく、何度か繰り返すときには前回とは異なる方向、特に直交方向に行うのが効果的である（佐藤1998）。本遺構は東西方向、南北方向の溝を入れていることから、「天地返し痕」と解釈するのに適した要素を備えている。また、同文献で佐藤が「天地返し痕」の特徴としてあげる指標にも多く合致している。ただし、確定的ではなく、現段階では可能性にとどめざるを得ない。

これに関連して、北東部で検出したSX1にも触れておきたい。SX1は溝状ではないが、小さな掘り込みが連続・密集したものという点で小溝群と似ている。したがって同じような作業の結果残された遺構と捉えられ、やはり畠に関連したものとみたい。小溝群のように畝に規定されて掘るのとは異なり、畝とは関係なく面的に掘削されたのであろう。具体的な成因は不明であるが、小溝群とは時期か作物が異なるものと考えられる。

参考文献

京都大学文学部国語学国文学研究室編 1968『諸本集成　倭名類聚抄』臨川書店

佐藤甲二 1998「畑跡の畝間と耕作痕について－仙台市域の考古学的事例から－」『人類誌集報1998』東京都立大学考古学報告3

佐藤甲二 2000「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集

志雄町教育委員会 1998『杉野屋専光寺遺跡』

志村有弘編 2008『姓氏4000歴史伝説事典』勉誠出版

田嶋明人 1988「古代編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

中世岩瀬湊調査研究グループ 2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第33号　富山市日本海文化研究所

富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2009『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』

藤田富士夫 2002「古代婦負郡の「郷」擬定と栃谷南遺跡の位置」『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会

藤田富士夫 2004「古代越中国新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第2号

婦中町 1996『婦中町史』

平凡社 1994『日本歴史地名大系第16巻　富山県の地名』

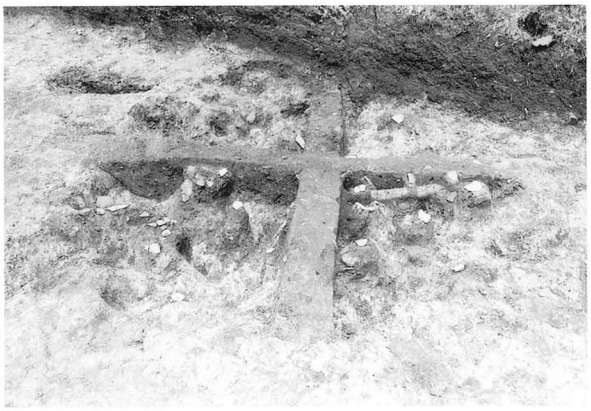
細辻真澄 2001「任海宮田遺跡出土の土錘について」『富山考古学研究』第4号　㈶富山県文化振興財団

堀沢祐一 2003「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

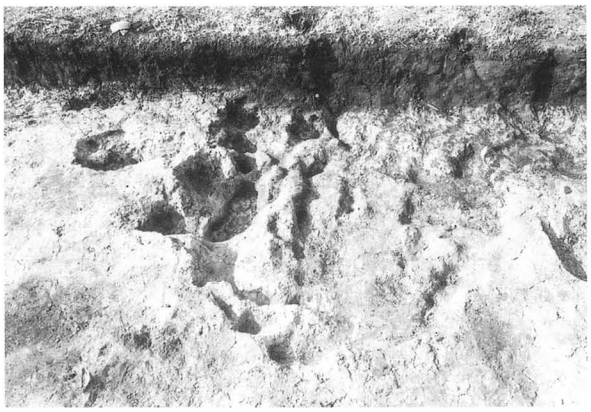
山中敏史 2004「郡衙」『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編　奈良文化財研究所

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

調査区全景（北から）



SX01　土層断面（南から）

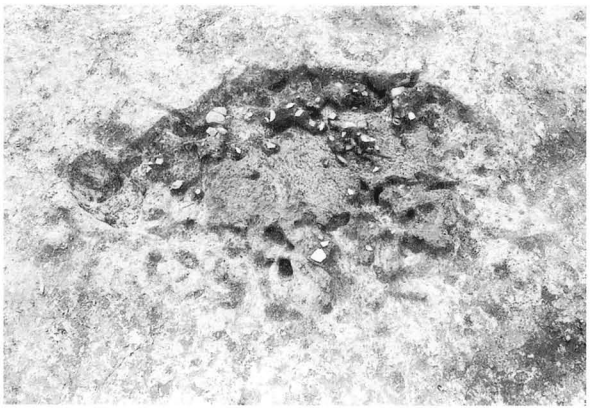


SX01　遺物出土状況（南から）

SX01　完掘状況（南から）

SX01　遺物出土状況近景

SX02　土層断面（東から）

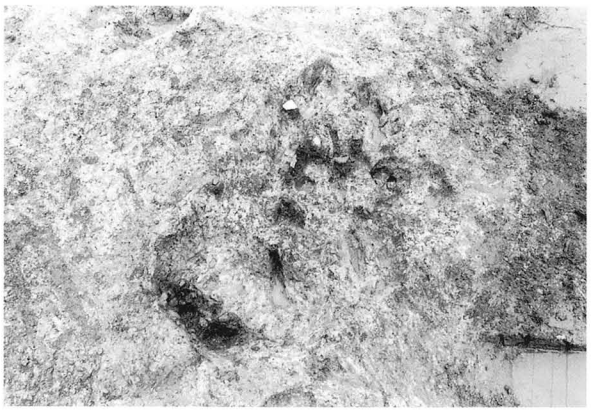


SX02　遺物出土状況（東から）

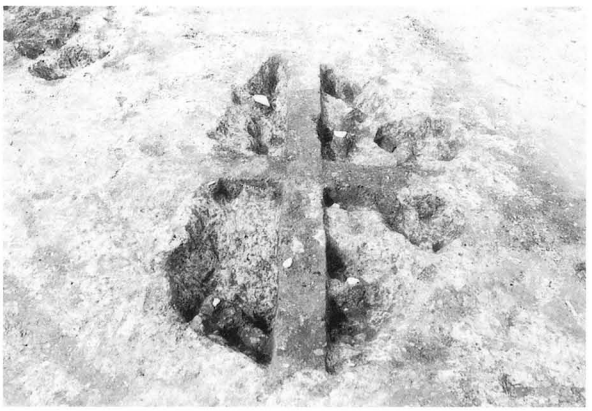
SX02　完掘状況（東から）

SX02　遺物出土状況近景

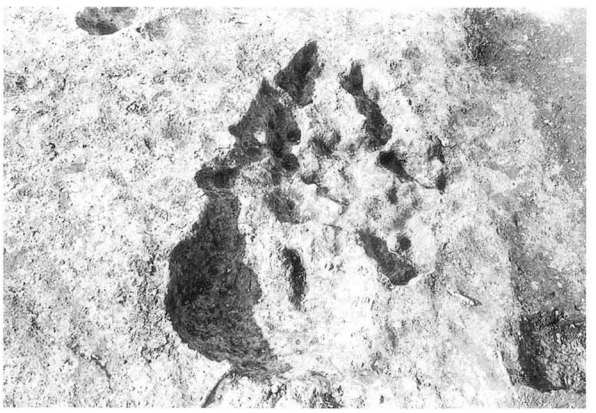
SX02　被熱層断割（東から）



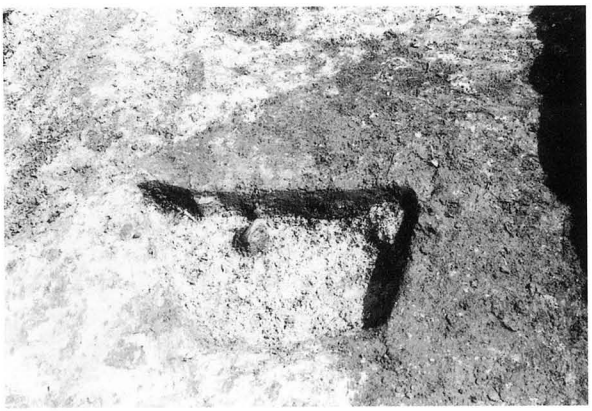
SX03　遺物出土状況（南から）



SX03　土層断面（南から）



SX03　完掘状況（南から）



SK08　土層断面（南から）

SI01 完掘状況（南から）

SK08　完掘状況（南から）

SB01　完掘状況（南から）

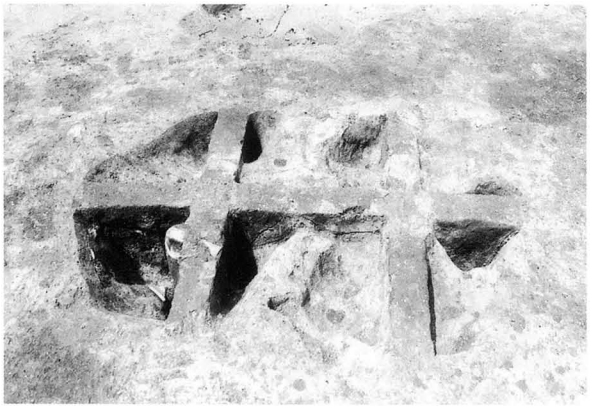
SX04　土器だまり出土状況（南から）

西壁中央

遺構検出風景

遺構掘削風景

SK10　土層断面（南西から）



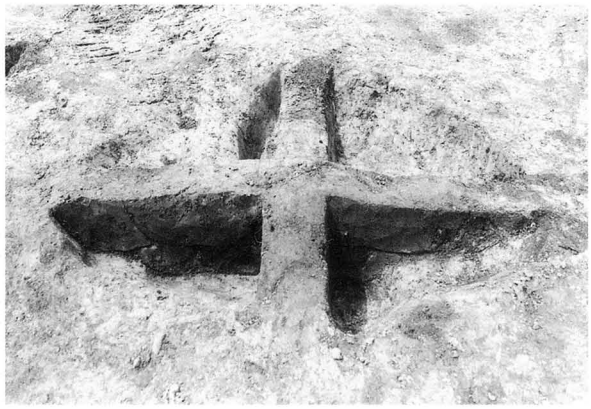
SK13　土層断面（南東から）

SK10　遺物出土状況（南西から）

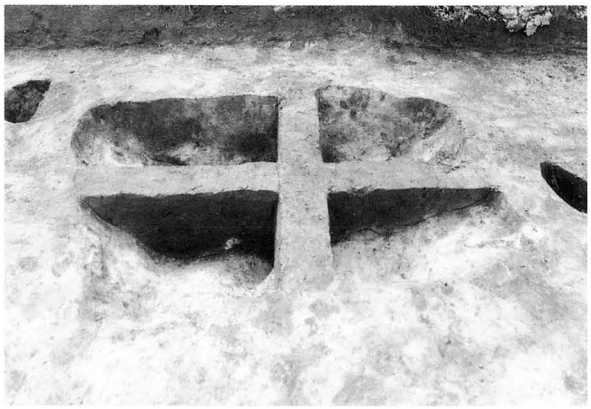
SK13　遺物出土状況（南から）

SK10　完掘状況（南西から）

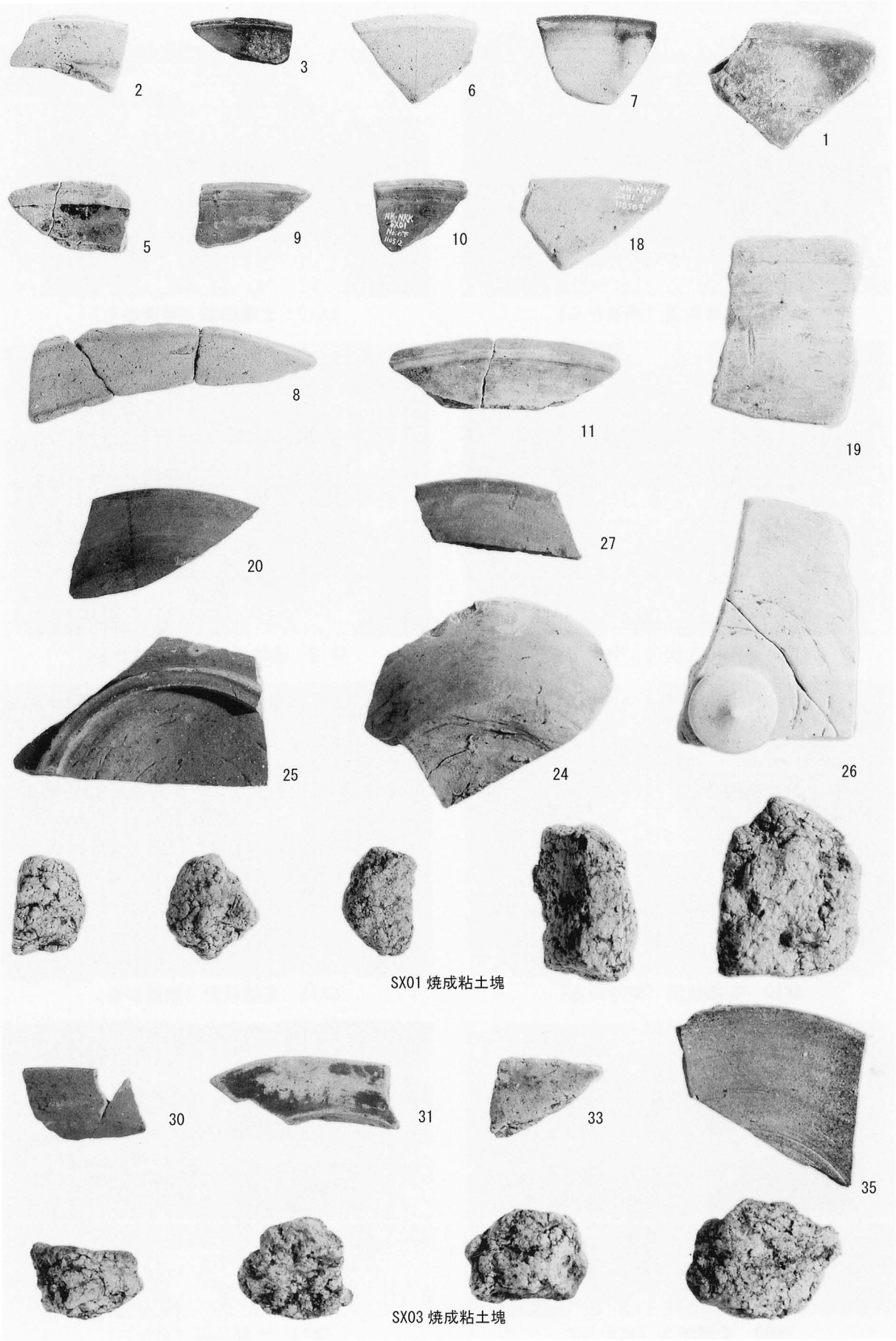
SK13　完掘状況（南西から）



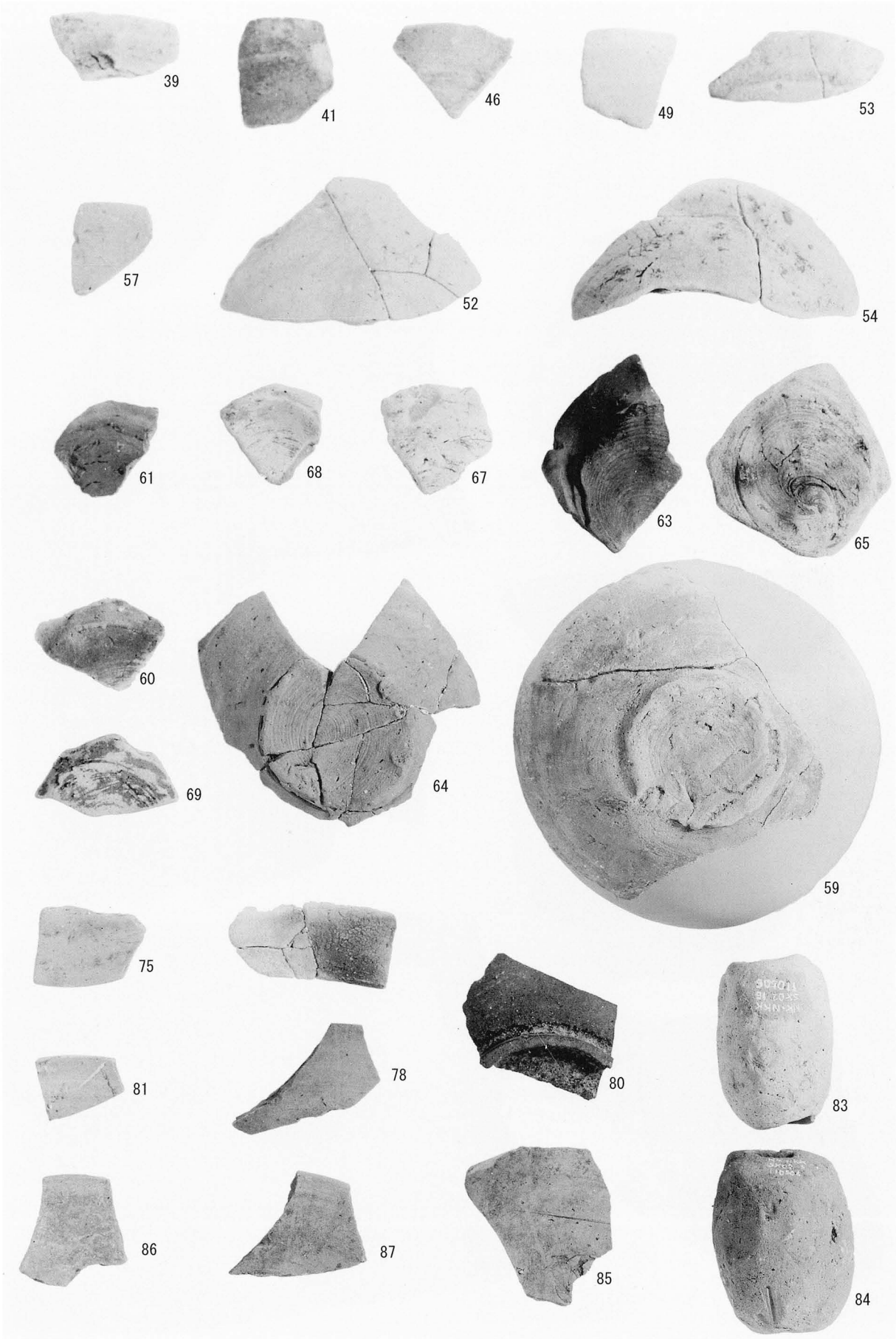
SK09　土層断面（東から）



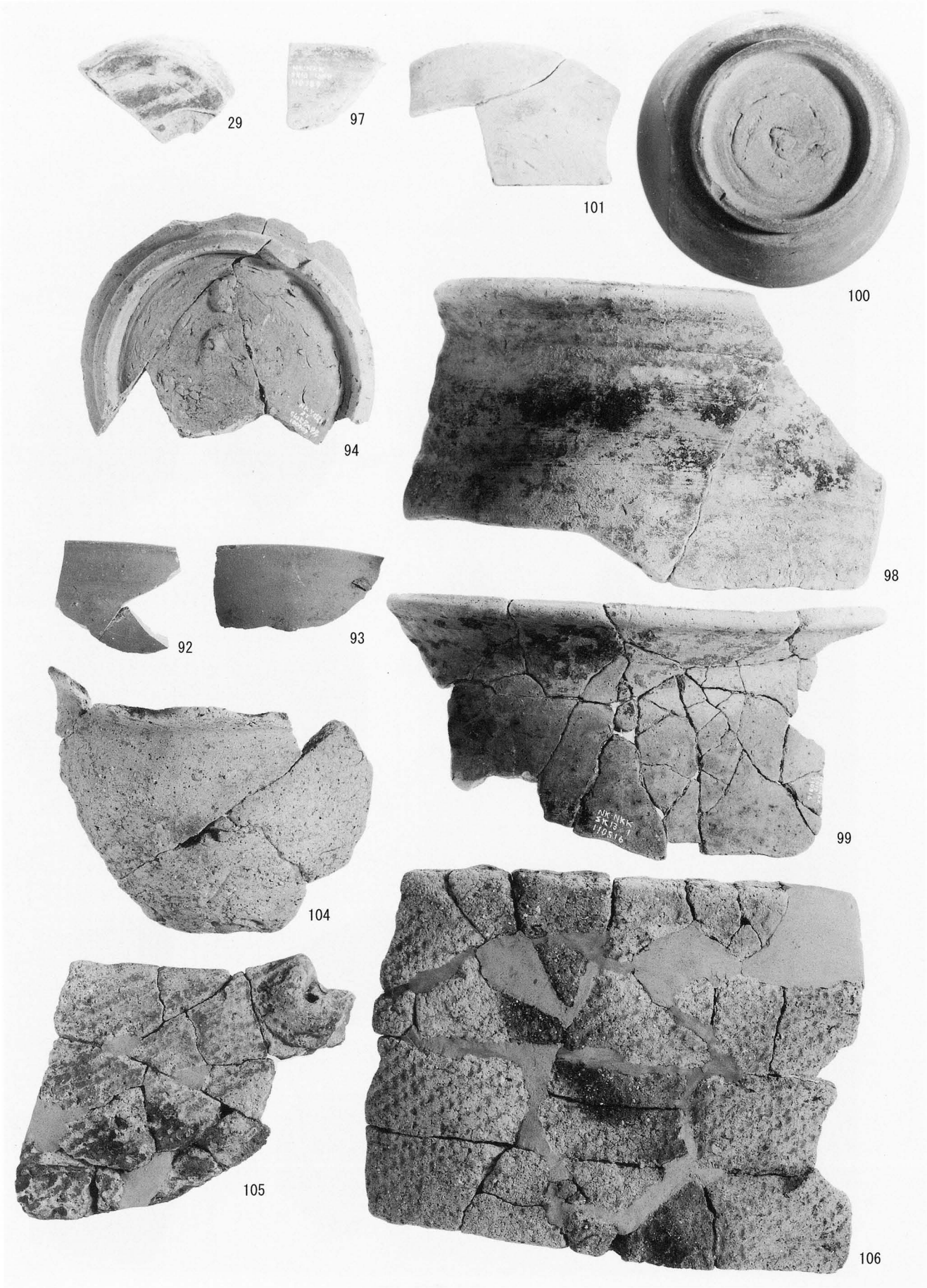
SK17　土層断面（東から）


2
3
6
7
1
5
9
10
18
8
11
19
20
27
25
24
26
SX01 焼成粘土塊
30
31
33
35
SX03 焼成粘土塊

出土遺物（1）


39
41
46
49
53
57
52
54
61
68
67
63
65
60
64
69
59
75
81
78
80
83
86
87
85
84

出土遺物（2）



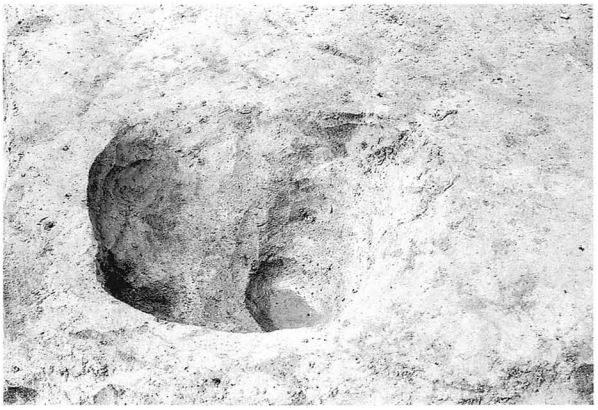
出土遺物（3）

遺跡周辺空中写真（1952年米軍撮影）

調査区全景（南東から）

SB1 完掘（南から）

SK1 完掘（南から）



SK2 完掘（南から）

SK4 完掘（南から）

SK3・SK5 完掘（南東から）

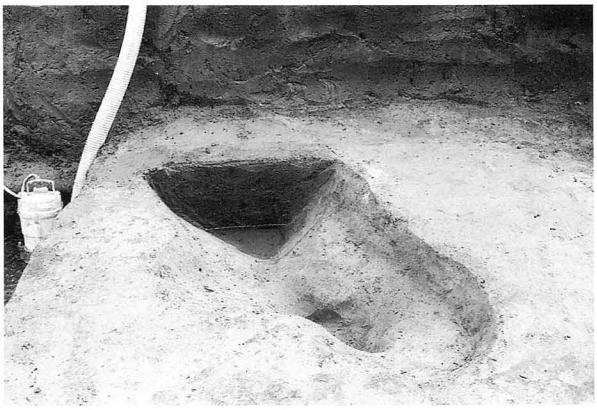
SB2 完掘（北から）

SX1 完掘（東から）

調査区西部小溝群検出状況（東から）

調査区西部小溝群完掘（東から）

SD4・6・9 完掘（西から）

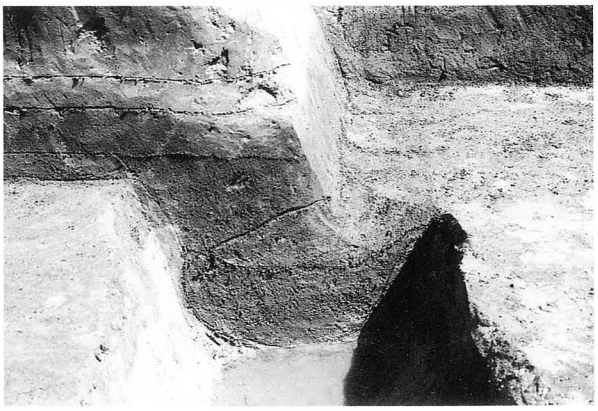


SK8 完掘（北から）

SK9 完掘（西から）

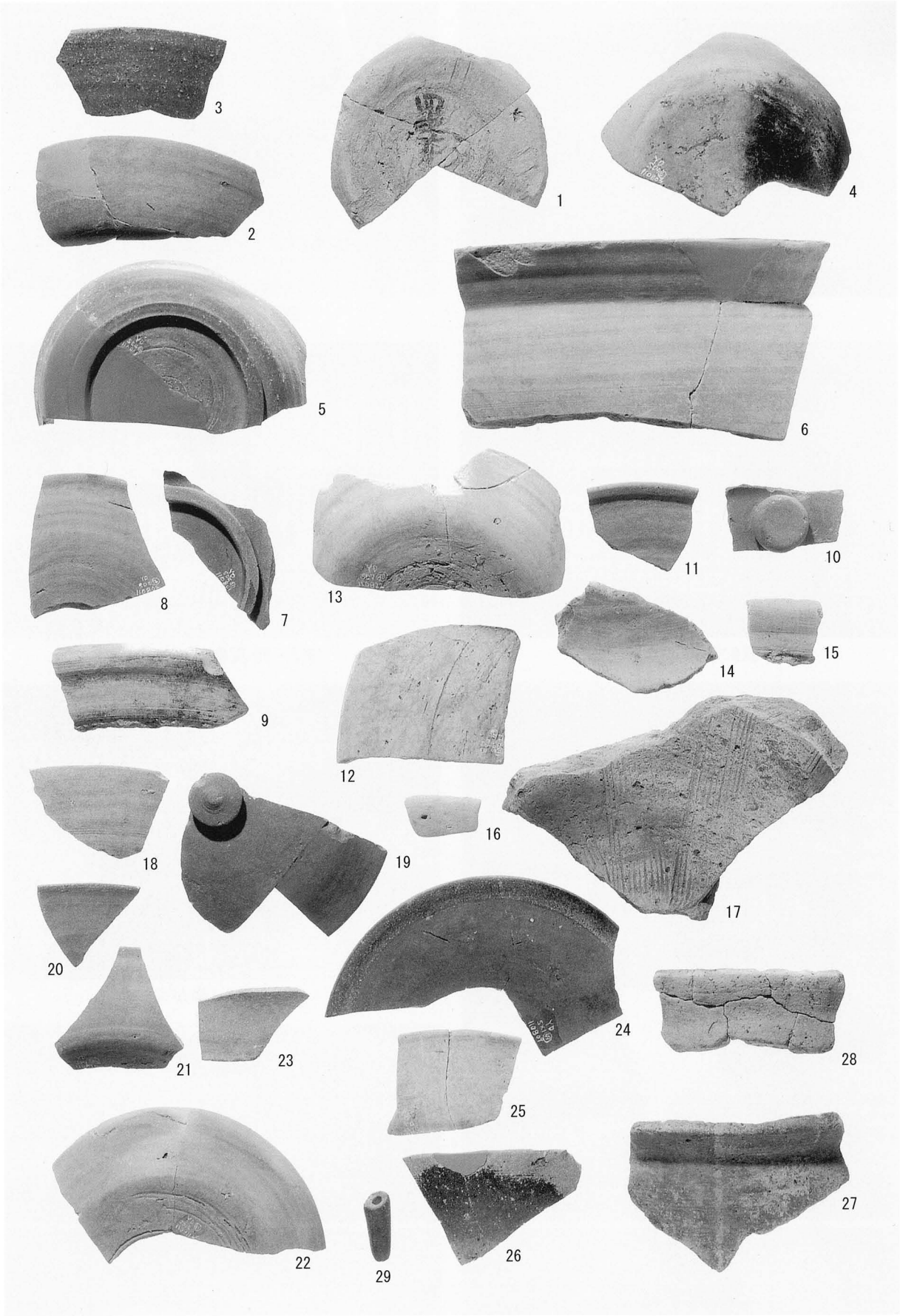
SK7・10 完掘（北から）

SD7 完掘（南から）

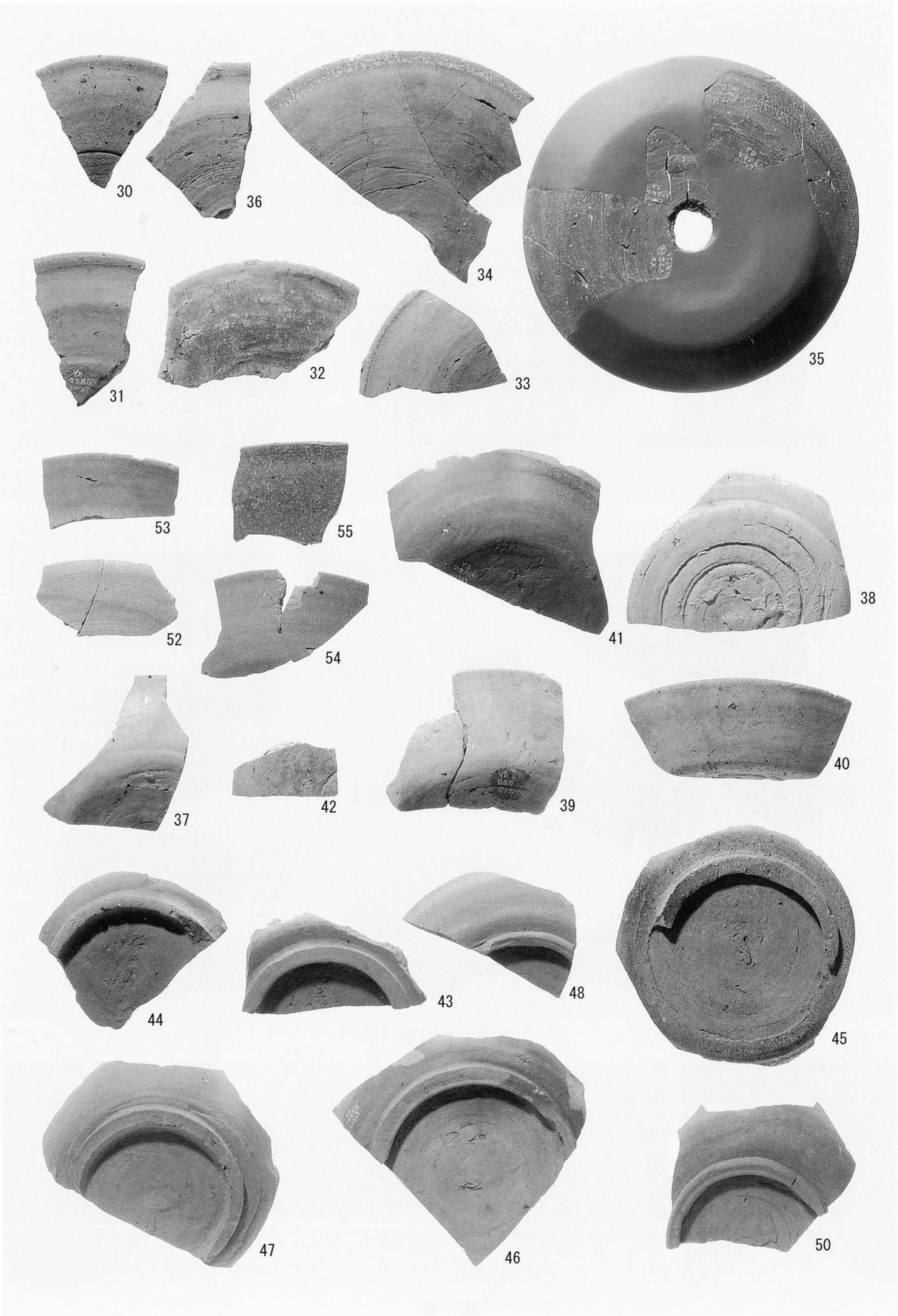


SD7 断面（南から）

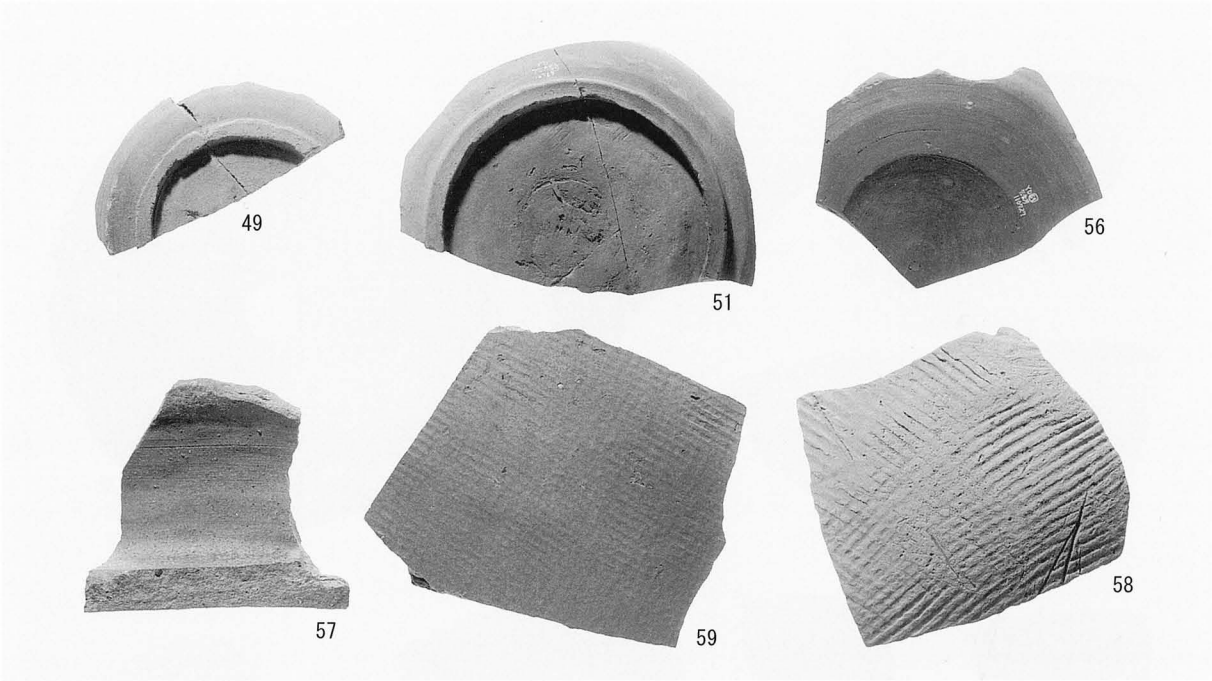
土層堆積状況（北東から）

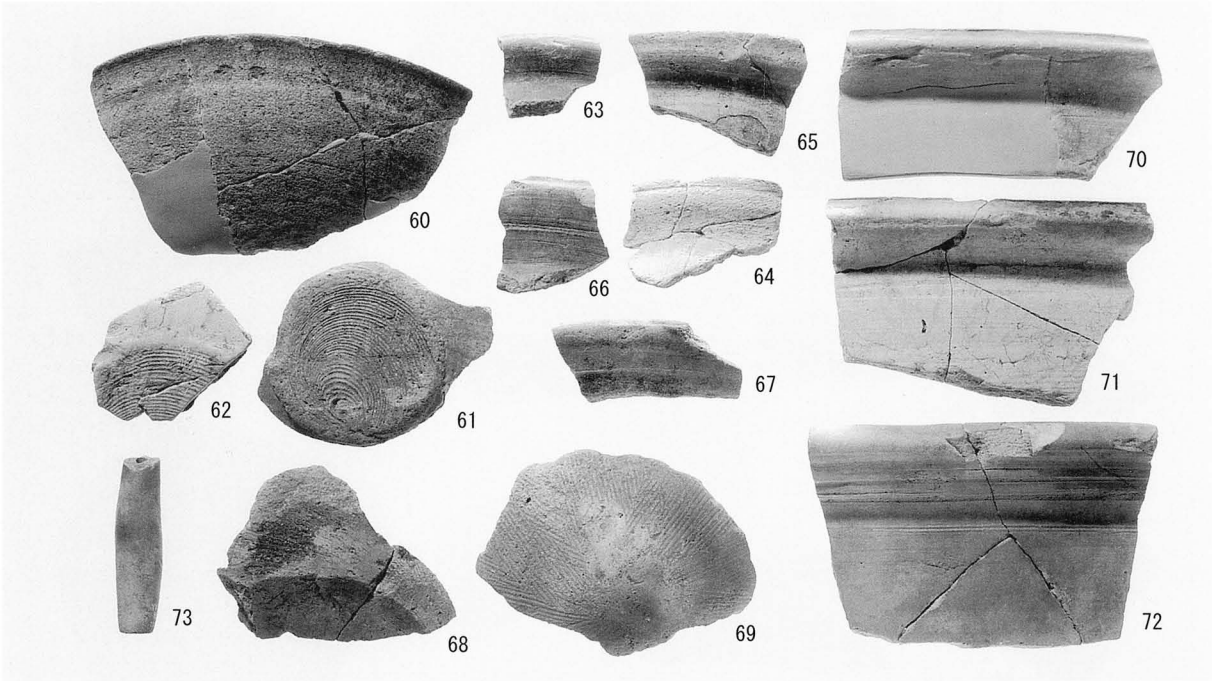


遺構出土遺物

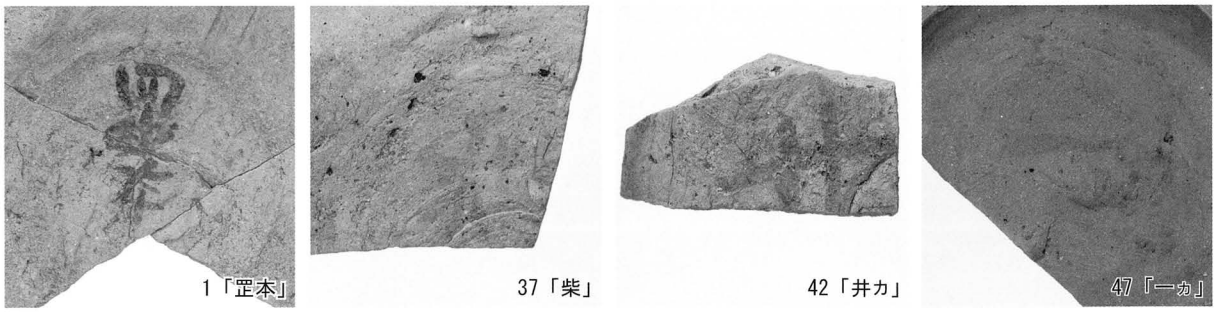


包含層出土遺物（1）


49
51
56
57
59
58


60
63
65
70
66
64
62
61
67
71
73
68
69
72

包含層出土遺物（2）


1「罡本」
37「柴」
42「井カ」
47「一ヵ」

墨　書

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはっくつちょうさがいようろく
書名	富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ
副書名	西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	49
編著者名	堀内大介・野垣好史・酒井英男・菅頭明日香・パリノ･サーヴェイ株式会社
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091　富山市愛宕町一丁目２－24　TEL 076-442-4246
発行年月日	西暦2012年3月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
西金屋・西金屋窯跡（にしかなや・にしかなやかまあと）	富山市古沢（とやましふるさわ）	16201	201293	36度41分45秒	137度08分45秒	20110419～20110519	176	個人住宅建築
米田大覚遺跡（よねだだいかく・いせき）	富山市米田町（とやまし・よねだまち）	16201	201021	36度44分17秒	137度14分28秒	20110721～20110830	143.35	個人住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西金屋・西金屋窯跡	集落・生産	縄文時代	土器だまり	縄文土器	奈良時代の土師器焼成遺構３基と掘立柱建物２棟、竪穴建物１棟を検出
		奈良時代	土師器焼成遺構、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、ピット	須恵器、土師器、土錘	
		平安時代	土坑	須恵器、土師器	
米田大覚遺跡	集落・官衛	平安時代	掘立柱建物、小溝群（畠）、土坑、ピット	須恵器、土師器、土錘	掘立柱建物２棟と畠とみられる小溝群が主体
		鎌倉時代	溝	中世土師器、珠洲	中世の区画溝か

要約

西金屋・西金屋窯跡　土師器焼成遺構３基検出した。これまでの調査では古代婦負郡域で確認されていない奈良時代（８世紀中～末頃）の土師器焼成遺構である。土師器焼成遺構を須恵器窯場（古沢窯跡群・西金屋窯跡）近くで確認したことは、須恵器窯場近くで土師器生産を行うことで一体的な集約生産を行う「北陸型古代土器生産体制」が、８世紀中～末頃に本遺跡のある呉羽丘陵西麓地域にも確立していたと考えられる。

米田大覚遺跡　平安時代（９世紀前半頃）の掘立柱建物２棟と畠跡とみられる小溝群を中心に検出した。平成7･8年度の調査で本調査区南側で整然と配置された掘立柱建物群が検出され、遺跡は「新川郡衙」と推定されている。今回検出した掘立柱建物もこれらの一群に含まれ、関係する建物の可能性がある。４点の墨書土器が出土し、そのうちの「罡本」は婦負郡の「罡本郷」の可能性が考えられる。小溝群は格子状に広がり大きく２群に分けられる。畠の耕作痕（天地返し痕）と推定される。

富山市埋蔵文化財調査報告 49

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ

―西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡―

2012 年 3 月 30 日発行

発　行　富山市教育委員会

編　集　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒 930-0091　富山市愛宕町一丁目 2 － 24

TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810

E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印　刷　株式会社サカイ印刷